平成24年度　産業界のニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

成果報告書

学校法人藤ノ花学園
豊橋創造大学

目次

はじめに ―― 1

１.『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』概要説明 ―― 3
２．文部科学省申請概略 ―― 7
３．事業グループ活動報告 ―― 13
３．１　４つの教育事業 ―― 15
（１）メンタルタフネス講座グループ ―― 17
（２）自己理解促進プログラムグループ ―― 21
（３）地域企業連携プロジェクトグループ ―― 24
（４）３者間協働インターンシップグループ ―― 30
３．２　教育体制・産業界ニーズ把握体制整備 ―― 33
（１）連携事業推進グループ ―― 35
３．３　教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援 ―― 39
（１）ユビキタスキャンパスグループ ―― 41
（２）大学コミュニティグループ ―― 45
４．補助資料 ―― 49
① 教員成果報告書 ―― 51
② 学生成果報告書 ―― 83
③ 社会人基礎評価票の集約結果 ―― 133
④ 成功事例・失敗事例 ―― 137
⑤ 大学教育改革フォーラム in 東海２０１３ ―― 143
⑥ 連携企業・団体一覧 ―― 155
⑦ 各種発行パンフレット ―― 159

はじめに

本報告書は、平成 24 年文部科学省にて採択された『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の活動とその成果を取りまとめたものである。この事業は、三重大学を代表校とした中部圏 23 大学による「アクティブラーニングを通した教育力」および「地域・産業界との連携力」を通して、教育改革力を強化する取組である。本学情報ビジネス学部ならびに短期大学部キャリアプランニング科は、東海 A チームに属して幹事校と副幹事校からなる中部地域大学教育改革推進委員会の調整のもと、連携 FD を通して教育改革の実践過程で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力を高め、中部圏産学連携会議を通して大学が育成しようとする資質と地域・産業界のニーズに関する対話を行うために『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』を展開するものである。このプロジェクトでは地域･産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習や PBL などを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

本学では『大学生の就業力育成支援事業』として、これまで情報ビジネス学部･経営学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業人 SOZO プロジェクト事業」を発展させ、『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』として次の 4 事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

豊橋創造大学

地域産業界連携教育力改革プロジェクトの概要

Ⅰ．4 つの教育事業の実施プロジェクト
① メンタルタフネス講座
② 自己理解促進プログラム
③ 地域産業連携プロジェクト
④ 三者協働によるインターンシップ

Ⅱ．教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備プロジェクト
① 産業界との連携推進
② 中部地域 23 大学との連携

Ⅲ．教育体制整備・産業ニーズ把握体制の後方支援プロジェクト
① ユビキタスキャンパス
② 大学コミュニティ

本報告書をご覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

2013 年 3 月
「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」
事業推進責任者
豊橋創造大学情報ビジネス学部長　佐藤勝尚

１.『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』概要

地域産業連携教育力改革プロジェクトの概要

1．産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備

本補助事業は、産業界ニーズに対応した人材育成を大学や短期大学などの高等教育機関で実施するための体制整備を進めるための補助事業として、平成24年度に文部科学省に創設された事業である(以下「産業界ニーズ補助事業と呼ぶ」)。中部圏では、「アクティブラーニングを通した教育力形成」「地域・産業界との連携力形成」を目的とした事業を 中部圏23大学の共同事業として申請して採択されている。中部圏23大学では、主に教育力を探求する「東海A(教育力)チーム」、産業界ニーズ把握方法を探求する「東海 B(産業界ニーズ把握)」、「北陸地域チーム」、「静岡地域チーム」の4グループに分けて、教育方法や産業界ニーズ把握方法について考え方や方法論を取りまとめるとともに、それらを共有することによって、教育力向上を目指す事業になっている。

2．地域産業連携教育力改革プロジェクト

豊橋創造大学では、「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備」(産業界ニーズ補助事業)への参加にあたって、育成すべき資質とその教育体制および産業ニーズ把握方策について検討し、「地域産業連携教育力改革プロジェクト」(以下、CKP と呼ぶ)として、教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備を推進することになった。

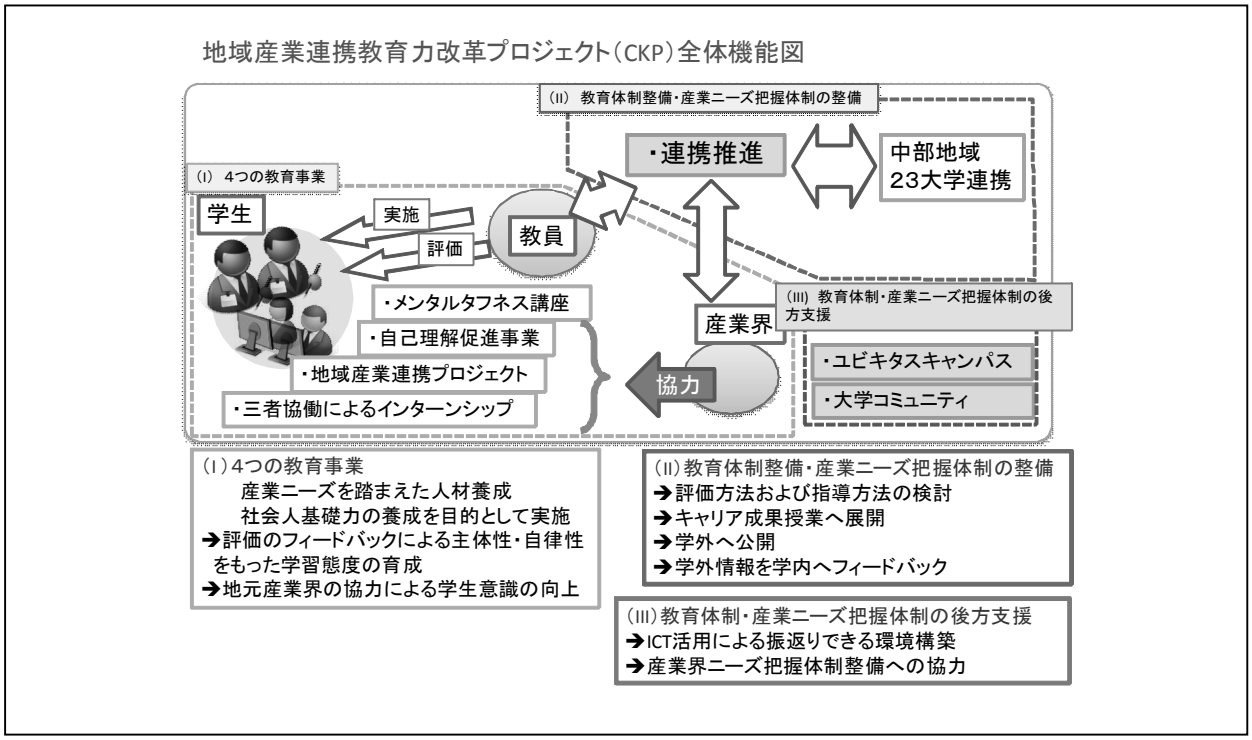
豊橋創造大学では、ディプロマポリシーで定める就業力育成を目指す。具体的には、社会人基礎力を養成できる教育システムの構築を行う。また、人材養成に関する産業界ニーズを把握する体制整備を行う。そのために

（Ⅰ） ４つの教育事業

（Ⅱ） 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備

（Ⅲ） 教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援

の３つの機能を実行するグループを組織化した。これらの担当教員と事務職員で「地域産業連携教育力改革プロジェクト(CKP)」とその運営のための委員会を設置して、事業実施することになった。これらの機能全体を以下の図にまとめる。



３　地域産業連携教育力改革プロジェクト実施体制

本学では「産業界ニーズに対応した教育改善･充実体制整備補助事業」を「地域産業連携教育力改革プロジェクト（CKP)」として実施する。「アクティブラーニングを通した教育力形成」「地域･産業界との連携力形成」を目的として育成すべき資質とその教育体制および産業ニーズ把握方策のために、３つの機能を有したグループの役割を分離して組織化して事業展開を行う。

（Ⅰ）　４つの教育事業

・メンタルタフネス講座
・自己理解促進プログラム
・地域企業連携プロジェクト
・３者間協働インターンシップ

（Ⅱ）教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備

・連携推進

（Ⅲ）教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援

・ユビキタスキャンパス
・大学コミュニティ

これらの事業詳細は、次節以降で説明する。

２．文部科学省申請概略

文部科学省 大学教育改革推進事業

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」

中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化　本学取組について

本学取組名称	地域産業界連携教育力改革プロジェクト
選定年度	平成 24 年度

○学生の社会的・職業的自立のための取組のこれまでの実績について

・これまでどのような方針・視点を持って取組を実施してきたか

豊橋創造大学経営学部(2012 年に情報ビジネス学部から改組)における教育目的は、学生の就業力の育成である。ビジネス社会で求められる経営学、会計・財務領域、ICT 領域の基礎的専門知識の教授に加えて、主体性やコミュニケーション力などの態度・志向性を養成することを目標にした教育を展開している。例えば、産業界での動向についての見識を深めたり、就業のあり方を思考する機会を提供するために、産業界の第一線で活躍する経営者による講義(総合講座)の開講やインターンシップを正課科目として実施している。また、学生の就業感を形成するための教育プログラムとして、厚生労働省の Yes プログラムに準じた科目の創設や学生に近い卒業後 5 年程度の OB による就業についての講演(キャリア形成)を開講している。これまでの専門知識教育に追加する形で、就業力に関する正課授業を運営している。これらの授業では、座学だけでなく、学生のアクティビティが向上するような参加型の講義運営を試行している。

さらに、学生参加型活動もしくは学生の主体的活動として、一部の学生による企業と協働する様々なプロジェクト活動(※1)を支援して、学生の総合的な就業力育成に尽力してきた。例えば、東海ラジオにおける番組企画、制作を実際に行うプロジェクト、B 級グルメ開発を企業と共同で行うプロジェクトなどの指導と支援を行った。地元企業と協働する中で学生自身がプロジェクト運営を学ぶとともに、就業について見識を深める活動になっている。2005 年には、長年の駅前チャレンジショップ運営が評価され都市再生本部都市プロジェクト第十次決定にも選定された。学生に対する教育が地域にも貢献する活動として評価されるとともに、学生自身が、自治体や商工会議所や商店街などの地元企業と協同した事業を行ったことで、自己の就業感の形成が支援できたと評価している。以上のように、学生の専門知識教育に加えて、就業観を形成するために、主として産業界からの協力を得た教育活動を展開してきた。

学生の社会的・職業的自立には、基礎的知識に加えてコミュニケーション力や主体性などをもって状況に応じて対応できる能力が不可欠であり、大学においてもその養成に努力が必要である。この様な認識のもと、本学部では、上記に示したような地域社会や産業界での活動を学生自らが体験できる機会を提供してきた。企業の協力の下、学生は企業との協働を通して、社会人としての役割やコミュニケーションのあり方、仕事への取り組み方などを体感でき、その結果、自らの就業力の醸成がなされることを期待している。

また、全学生の就業に係る総合的基礎能力育成を目標に、平成 22 年度大学生の就業力育成支援事業への採択を契機に、地元企業との協働プロジェクトを全学生参加の教育プログラムとして拡張して取り組んでいる。平成 23 年度には、情報ビジネ学部約 80 名が 13 の企業協働プロジェクトに取り組み、8 月の中間報告会、12 月の成果報告会を実施し、協力企業からも評価を頂いた。また、メンタルタフネス講座は平成 23 年度に 4 回実施し、就業のあり方や集団での行動についての考察などを通して、様々なストレスに対する対処方法を体得できる講座になった。

※1　2003 年　静岡 FM との共同プロジェクト（路上ライブの紹介・参照 web 頁の作成）、2006 年結納店滝崎との共同プロジェクト、2007 年　フリー紙 Planets との共同プロジェクト、　2008 年　東海ラジオとの共同プロジェクト　仕事探究番組「オシゴトーク」の制作、放送プロジェクト、　2010 年　B 級グルメ開発プロジェクト　など。

・これまでの取組の成果を、どのようにカリキュラム・ポリシーに反映させてきたか。

これらの活動を学生の社会人基礎力並びに主体性や協調性を涵養するために、経営学部並びに情報ビジネス学部では、全学生に展開する教育プログラムとして下表に示す正課授業を開講している。専門領域である経営学、会計・財務、ICT 関係の専門科目に加えて、態度志向の養成や協調性を養成するために「職業観・就業観養成」、「就業基礎能力」、「協働活動力」、「意見形成力」の 4 つの項目に分けて、正課授業を割り当てた教育を展開している。4 つの領域は、それぞれ独立したものではなく、相互に補完して学生に総合的な能力育成を目標において、教育展開することになっている。

特に、3 年時に 1 年間をかけて地元企業との協働作業を進めるプロジェクト演習は、平成 22 年度大学生の就業力育成支援事業への採択を契機に正課授業として開講している。これらの正課授業は、学内で教育を進める専門知識と企業社会で必要とされる能力を学生自ら体験の中で学ぶ実践的教育として位置づけている。さらに、正課外の教育プログラムとして開催するメンタルタフネス講座やキャリアセンターが担当する学生支援を進めることで、教育目標である就業力の育成を支援する体制を整えている。このように、カリキュラム・ポリシーの整備とその具体化された正課授業に加えて、課外授業やキャリアセンターの学生支援を通して、学生の主体性や協調性の醸成とともに、就業後、継続した就業を可能にする教育に取り組んでいる。学生就業力を中心的課題に位置づけ、教育プログラムの具体化を進めている。

表　就業力養成のためにカリキュラムに組み込まれた科目

	職業観・就業観養成	就業基礎能力	協働活動力（グループ活動）	意見形成力（少人数教育）	キャリアセンタ学生支援
1 年	職業研究（半期） キャリア形成（半期） 就業体験講座（企業見学 4 回）	キャリア開発 1（半期）	フレッシュマンセミナー（＊）	入門ゼミ（通年）	進路就職面談
2 年	企業研究（半期） 経営ビジネス講座（半期）	国語表現法（半期）	パソコン応用（半期）	基礎ゼミ（通年）	
3 年	インターンシップ	キャリア開発 2（半期）	プロジェクト・マネジメント プロジェクト演習（通年）	専門ゼミ（通年）	インターンシップのサポート 就職ガイダンス
4 年		社会人基礎（半期）		専門ゼミ（通年）	就職活動支援

（＊）は正課授業外で実施

○本事業において実施を計画している内容について

・大学における人材育成と産業界ニーズとのギャップ、その対応について

大学における人材育成と産業界のニーズとのギャップについて、最も指摘される点の1つは「学生の主体性・創造性の欠如」である。これは、企業入社後において、与えられた仕事しか出来ない、仕事上の問題点を自ら発見し、目的を設定し、仮説を立て、創造的に解決していくという社会人として必要な姿勢が欠如している状態である。この問題は、学生の能力が欠如しているのではなく、彼らがこれまでの人生経験において、目的を持って主体性と創造性を発揮する機会が十分に備わっていなかったことにあると考えられる。大学全入時代において各大学の学生サポートが非常に手厚くなる中、学生が「自らの力」で主体的に活動する機会や、創造的に物事を解決していく経験が減少してしまっていることが原因として推測される。そこで、この問題に対応するため、本学では『大学生の就業力育成支援事業』としてこれまで情報ビジネス学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業人SOZOプロジェクト事業」を継続的に推進していくことを決定した。今回は、新たに「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」として、本学は東海Ａ

チームにおける取組みにおいて「アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証」の具体的展開を他大学と連携を取りながら、以下の４事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図ることとする。

なお、この「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」は、情報ビジネス学部が主体となって実施するものであるが、平成24年3月に情報ビジネス学部を募集停止としたため、終了年度まで継続的に行うとともに、平成24年4月より開設した経営学部にて継続をするものである。

① メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み

今回は、平成 22 年度「大学生の就業力育成支援事業」に採択された「メンタルタフネス講座」を改編し、更に以下の事項②の「自己理解促進のための採用面接官の擬似体験（バーチャル人事体験）」との連携を図ることで、総合的な就業力の育成と産業界ニーズとのギャップを埋めるプログラムを委託業者と共同で開発する。これまでの「メンタルタフネス講座」は、学生の「メンタル面の育成」を通して、就職後の早期離職などを防止するための講座である。本講座において、学生はストレス対応、モチベーションコントロール、目標設定などの理論的背景と、それを活かす「場」の発見や就職活動における活用方法を学んできた。今年度以降は、これまでの実施経験と学生からの要望を講座に反映させて、内容の改編を行う。具体的には、運営方法（実施時間、場所等を含む）の改善や内容の改善（効果測定を基にしたプログラムの精査など）、そして新たに事項②の「実践講座」を追加することによって、直近の目的である内定に至るまでの総合的な「就業力」の育成を図る。また、本講座の大学内での位置付けと学生の意識付けを強化するために、①と②を連携させた新しい「メンタルタフネス講座」として位置付けて、キャリア科目群の実習科目の1つとして「正規科目」とする。

②自己理解促進のための採用面接官の擬似体験（バーチャル人事体験）

ここでは、アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を擬似体験するバーチャル人事体験を行う。このプログラムの大きな特徴は、学生が面接者と面接官の両者を体験できることにある。特に通常経験することの出来ない「面接官」の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズの理解と、自己の職業観を理解することが可能となる。具体的には、まず学生に志望企業に対する志望動機（なぜその業界を志望するのか、なぜその企業を志望するのか、その企業でどのような仕事をしたいのか、など5、6問程度）を事前に考えさせ、模擬面接を実施する。面接官は協力企業の人事担当者や外部の新卒採用有識者、もしくは教員によって行い、実際の面接試験に近い形で実施する。学生はこの活動を通して、志望業界や志望企業、志望職種に対する理解を事前に自主的に進めることになる。次に、模擬面接が終了した学生は、面接官として面接官側に着席し、他の学生の面接をオブザーブする役割となる。基本的な質問や進行は協力企業の人事や外部の有識者、もしくは教員が行うが、学生はオブザーブをしながら、他学生の良い点や改善点を面接官の視点から体験的に学んでいく。他学生の面接を面接官側から観察するという体験を通して、自分自身に何が足りていないのか、座学では学べない体験ベースのアクティブラーニングを提供することによって、学生の自主性と実践を通した創造性を涵養して総合的な就業力の育成を図る。プログラムの全体像としては、学生を対象とした面接に関する事前準備セミナーと実際の模擬面接を予定しているが、連携大学や協力企業による相乗効果をより大きなものとするため、関係者を対象とした事前説明会を実施するなど、柔軟な運用に努めることとする。

③ 地域企業と連携した プロジェクト体験

実社会におけるプロジェクトベースでの仕事の増加状況を鑑み、プロジェクトの体験を通して産業界ニーズとのギャップを埋める「プロジェクト演習」科目を展開する。具体的には、地域企業と連携し、学生が企画・立案・運営するプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの1年間の運営を通して、学生自らが学ぶ「創造プロジェクト」として推進する。また、それを補佐する講義科目として、プロジェクトの運営方法を学習する「プロジェクトマネジメント」講義科目を展開する。本「創造プロジェクト」は、担当教員と協力企業のサポートを受けながら、学生がゼロから企画を立ち上げ、自主的に運営を行い、試行錯誤を繰り返して創造的に成果物を生み出していくプロセスを体験させる。答えの用意されていない課題に複数人で取り組むことによって、学生は自主性や創造性、さらにはリーダー

シップや他者との協働がいかなるものであるのかを実地体験を通して学ぶ。また、同時に、企業の仕事の進め方や、ウェブサイト、携帯情報端末の活用方法など、就業後に直面するであろう実務的な仕事能力の醸成を図ることが可能となる。

④ 学生、連携大学、地元企業を含めた 3 者間の協働によるインターンシップ実施

学生自らが行動を起こすアクティブラーニングをコンセプトとして、それを達成するための 5 つの要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を包括的に含むインターンシップ活動を実施する。本学においては、これまでも地元企業と協働し、学生の主体性や創造性を育成する取り組みを実践してきた。本年度はこの活動を連携大学間にも拡大し、学生、連携大学、地元企業の 3 者間の相乗効果によって更なる成果を狙う。具体的には、学生グループに特定のテーマ（例：インターンシップ先の企業紹介を、インタビューや職場体験を通して学生が作成する、など）を与え、アドバイザーとして協力企業の社員を 1 名付けて貰う。この成果物の作成を通して、学生は自然とフィールドワーク、グループワーク、ディベートなどの活動を主体的かつ創造的に行うことが要求される。次に、連携大学間のインターンシップ活動合同報告会において、各大学の代表グループがプレゼンテーションを行い、教員や協力企業の社員が成果物の評価とフィードバックを行うことで、アクティブラーニングを伴った主体性・創造性育成の総合的な達成を狙う。更に、報告会の資料を年度ごとにストックしていくことにより、就職活動時の資料としての活用や連携大学間、地元企業との繋がり強化などの効果を得ることが可能となる。

・支援期間終了後の運用について

支援期間終了後の運用は、連携大学間、協力企業との関係を一層深め、地域内における自立的な運用の継続によって、ナレッジの更なる蓄積やブラッシュアップ、他地域への情報公開による貢献を第一の目標とする。また、本事業を通して教職員の教育力の強化・検証と評価を行い、学生の大学生活を充実させる。

３．事業グループ活動報告

３．１　４つの教育事業

(1)メンタルタフネス講座グループ活動報告

1．グループ事業の取組

メンタルタフネスグループでは、ストレス耐性や我慢の欠如などメンタルタフネスの不足に対応するため、セルフモチベーション、リーダーシップ、目標設定・目標達成などの理論的背景と実践的演習を組み合わせて学生自身の経験知を高める教育プログラムであるメンタルタフネス育成講座を実施した。2年生3月に「第1回メンタルタフネス育成　ベーシック講座」(平成23年度事業で実施済み)、3年生の5月に「第2回メンタルタフネス育成　セルフモチベーション講座」、7月「第3回メンタルタフネス育成　メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座(1)」、9月「第4回メンタルタフネス育成　メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座(2)」の計4回の講座を実施した。

メンタルタフネス育成講座はこれまで年4回実施であったが、平成24年10月16日に文部科学省より採択を受けた『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の取組として本学が進める4つの事業のうち、「①メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み」「②自己理解促進のための模擬面接講座(自己理解促進講座)」を連動させるため、総合的な就業力の育成を目的とした運営方法・プログラム改善等を行い年3回実施に変更した。第1回目となる「ベーシック講座」は、3年生への進級を控えた平成25年3月28日(木)に実施した。各回の講座の概要を以下に示す。

＜＜主なスケジュール＞＞

日程	実施事項
5月	第2回メンタルタフネス　セルフモチベーション講座
7月	第3回メンタルタフネス　メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座(1)
9月	第4回メンタルタフネス　メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座(2)
3月	第1回メンタルタフネス　ベーシック講座（平成25年度3年生対象）

＜＜主な行事＞＞

（1）「第2回メンタルタフネス　セルフモチベーション講座」

開 催 日：平成24年5月19日（土）
会　　場：豊橋創造大学　A22教室
参加人数：学生　42名、教職員　6名
講　　師：キャラメルソース(株) 代表取締役　初見 康行　様
内　　容：セルフモチベーション
モチベーションに関する基本的な知識、モチベーションの代表的な理論(良く知られている考え方)、自分自身のモチベーション「持論」の研究

（2）「第3回メンタルタフネス　メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座(1)」

開 催 日：平成24年7月30日（月）
会　　場：豊橋創造大学　A22教室
参加人数：学生　41名、教職員　4名
講　　師：キャラメルソース(株) 代表取締役　初見 康行　様
内　　容：仕事理解と企業研究

企業研究の必要性と考え方、ボードゲームを用いた企業研究（アパレル業界）、ケーススタディを用いた仕事理解（タイプ別アドバイス法）

（３）「第４回メンタルタフネス　メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座(2)」

開 催 日：平成 24 年 9 月 10 日（月）
会　　場：豊橋創造大学　A22 教室
参加人数：学生　40 名、教職員　4 名
講　　師：キャラメルソース(株) 代表取締役　初見 康行　様
内　　容：自己分析と就職活動
就職活動と自己分析の関係を考えてみる、ボードゲームを用いたビジネス研究（携帯電話業界）、ケーススタディを用いた仕事理解（課題解決）

図 1 セルフモチベーション講座の様子

図 2 ビジネス研究講座(1)、(2)の様子

（４）「第１回メンタルタフネス　ベーシック講座」（平成 25 年度 3 年生対象）

開 催 日：平成 25 年 3 月 28 日（木）

会　　場：豊橋創造大学　A22 教室

参加人数：学生　59 名、教職員　4 名

講　　師：キャラメルソース(株) 代表取締役　初見 康行　様

内　　容：自己のメンタルタフネス

メンタルタフネスの基礎知識、ストレスとは、自己のストレス状況の把握（ストレス度チェック、ストレッサー、）、ストレス対応のための資源、リラックス法等

図 3 ベーシック講座の様子

2．活動成果

メンタルタフネス育成講座では、自己のメンタルタフネス、セルフモチベーションから初めて、仕事理解と企業研究、自己分析と就職活動というような内容で実施したが、各回の講座の学生アンケートの結果をまとめると以下の様になる。アンケートは 5 段階評価（評価　5．非常に満足　4．満足　3．普通　2．不満足　1．非常に不満足）で実施した。全 4 回の講座を受講した学生からは、「就職内定までの道のりは長いが、ストレスと上手く付き合いながら乗り切りたい」、「自分の事なのに自分では気づかないような発見があり、就職活動では自己分析がいかに大切なのかがよくわかった」等の感想が寄せられている。また、出席については全日程 4 日間について全員が受講できるよう各回の欠席者に対して補講を行い、全講座について全員の出席となっている。

表 1 アンケート評価（概略）

	質　問　内　容	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	平均
Q1	講座の満足度は？	3.9	3.9	3.7	3.7	3.8
Q2	講座の内容は、今後の日常生活や就職活動、働いていく上で役立つと思いますか？	4.0	4.1	3.9	3.9	4.0
Q3	講師の話は分かりやすかった	4.5	4.4	4.2	4.3	4.4
Q4	パワーポイントは理解しやすかった	4.4	4.1	4.0	4.5	4.2
Q5～	各種ワークの平均値	4.0	3.9	3.8	3.9	3.9
	平均	4.2	4.1	4.0	4.1	4.1

3．今後の課題点

アンケート評価の概略からは、おおむね 4 前後であり、多くの学生が講座の内容を理解し、メンタルタフネスへの意識付けも出来ていると考えられる。Q2 内容や Q3 講座の分かりやすさに対して Q1 講座全体の満足度や Q5 各種のワークの値が低い傾向がみられる事、第 1 回おもしろ村のような相互作用関連やボードゲーム関連は評価が高い様子である事等を考慮し各回のワークなどについては改善を行う必要がある。

以上の事から、メンタルタフネス育成講座については、講座の意味付けと評価の低いワークについて改善を行うとともに、スケジュールについては、インターンシップおよび就職ガイダンス、自己理解促進のための模擬面接講座と連携する形で、2 年 3 月から 3 年 9 月までの間に全 3 回の実施とする。就職ガイダンスと連携する事により、メンタルタフネス育成講座から始まり、インターンシップ、就職ガイダンス、自己理解促進のための模擬面接講座へと、学生の関心と行動をスムーズにつなげる事が出来る事を期待している。

(2)自己理解促進プログラムグループ活動報告

1．グループ事業の取組

自己理解促進グループでは、アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を擬似体験するバーチャル人事体験を行う「自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）」を計画している。このプログラムの大きな特徴は、学生が面接者と面接官の両者、特に通常経験することの出来ない面接官の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズの理解と、自己の職業観を理解することが可能となる事である。

言い換えると、学生に、面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させ、企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させる。この体験により、学生は、他学生の良い点や改善点を自分の立場に照らし合わせて学んでいくことになる。

H24 年度事業では、H25 年度の学生向けの自己理解促進講座（2 日版）の本格実施へ向けて、模擬面接講座の中から集団面接および個人面接のグループワークについて教員自身が学生の立場となり実際に面接ワークを体験する教員向け講習会の実施を行った。

また、本学では既に実施しているメンタルタフネス育成講座と自己理解促進講座を一体化し、将来的には正規科目化（単位化）を目指している。その中で受講前後の学生の成長度を把握することを目的に、PROG（コンピテンシーテストのみ）を導入した。情報ビジネス学部 2 年生については、2 月 22 日に受験、3 月 28 日に解説会を行い、自らが持つ現時点でのジェネリックスキルを理解するとともに、さらなる成長に繋げる方法を探った。講座の概要を以下に示す。

＜＜主なスケジュール＞＞

日程	実施事項
2 月	PROG 受験（学部 3 年生事後測定、2 年生事前測定）
3 月	自己理解促進講座　教員向け講習会 PROG 解説会（学部 2 年生）

＜＜主な行事＞＞

（1）PROG 受験

開 催 日：平成 25 年 2 月 22 日（木）
会　　場：豊橋創造大学　A24 教室
対　　象：情報ビジネス学部 3 年生（事後測定）40 名、情報ビジネス学部 2 年生（事前測定）60 名

（2）自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）　教員向け講習会

開 催 日：平成 25 年 3 月 11 日（月）
会　　場：豊橋創造大学　A24 教室
参 加 者：経営学部・情報ビジネス学部教員 12 名
　　協力企業担当者 5 名
講師：学研メディコン　宗村様

内　　容：協力企業の人事担当者に面接官として参加してもらい、学生向け 2 日日程の自己理解促進講座から集団面接および個人面接部分を中心に教員向け模擬講座として、実際に面接ワークを実施。

協力企業：

医療法人整友会　総務課長　伊奈昌宏　様

野島保険（ｱﾒﾘｶﾝﾌｧﾐﾘｰ生命保険代理店）　代表　野島啓　様

甲羅グループ（㈱甲羅）　人事総務部　中尾紘康　様

㈱エーアイエー（アイセロ化学グループ）　ドコモショップ豊橋店
店長代理　大羽良尚　様

医療法人豊岡会　部長代理　布村直人　様

（３）PROG 解説会

開 催 日：平成 25 年 3 月 28 日（木）

会　　場：豊橋創造大学　A22 教室

対　　象：情報ビジネス学部 2 年生 59 名

※ 情報ビジネス学部 3 年生対象については新年度（平成 25 年度）実施予定。

図 1 PROG 解説会の様子

2．活動成果

自己理解促進のための模擬面接講座では、協力企業人事担当者、学生と共に教員も面接官として参加し、集団面接と個人面接のワーク教材の質問シートと評価シートを用いて、人事担当者の立場を理解した上で、質問や評価をする必要がある。今回の教員向け講習会では学生の立場として実際に面接ワークを行う事により具体的に体験する事が出来、併せて、協力企業担当者から気が付いた点や意見等を述べてもらう事によって、自己理解促進講座で教員が果たすべき役割を理解することが出来たと考えられる。講座のアンケートの結果をまとめると以下の様になる。アンケートは 5 段階評価（5 役に立ちそう、4 やや役に立ちそう、3 普通、2 あまり役に立たなそう、1 役に立たなそう）で実施した。

表 1 アンケート評価（概略）

内容	評価
1コマ目：基礎講座編	3.9
2コマ目：採用面接の実際を知る	4.5
3コマ目：課題共有に向けたディスカッション	4.1
平均	4.2

アンケート評価の概略からは、協力企業担当者および教員が自己理解促進講座について理解、協力して貰えていると考えられる。模擬面接の講座については、教員と協力企業担当者ともに高い評価が得られている。

3．今後の課題点

今後の課題は、次年度からの自己理解促進講座の本格実施に向け、協力企業担当者との協働体制の整備と実施内容及び時間配分等についての検討である。また、自己理解促進プログラムは、メンタルタフネス講座と連携するものであるので、年間を通した全体スケジュールの調整が必要である。以上の事から、自己理解促進のための模擬面接講座については、実施内容、計画についての検討と共にスケジュールについてもメンタルタフネス育成講座から始まり自己理解促進講座、PROG による測定とフィードバックにより、学生の関心と行動をスムーズにつなげる事が出来るよう十分に実施内容の検討、内外に対する講座の意味付けの周知等について徹底するよう留意したい。

(3)地域企業連携プロジェクトグループ活動報告

1．グループ事業の取組

大学生の就業力育成支援事業においては、社会から求められる人材育成を行うため、これまでの学士課程教育に加えて地域産業界との協働事業の中で学生が自ら行動して就業力を学修することを目的としている。ここでいう就業力としては、社会人基礎力とも言われている能力を想定しており、

・多くの年代を含んだ企業人やグループ内メンバーとのコミュニケーション能力
・グループの中で役割を果たすことができる協調活動についての能力
・グループの中で事業を推進できる主体的に行動できる能力

を含む総合的能力の育成を目的としている。本事業では地域企業との協働プロジェクトにおいて、企業側の担当者と学生との協働作業をおこない、設定した目標が達成できるような活動の計画・実行・評価を繰り返し行う。プロジェクトにおけるミーティングは学生が上記に関する自らの能力を認識できる場となっており、その気付きを指導教員が促す。その気付きの中で、学生の自己成長やグループメンバーを模範として成長できるような学習環境の提供を目指している。本学では、実践教育としてインターンシップやビジネスプランコンテストへの参加を前提とし実践教育を正課授業の中で運営してきたが、本事業では、学年全員が外部企業との協働事業に参加することを前提に実施し、学生全体の就業力向上を目指す。

平成 24 年度は前年度に実施したプロジェクト活動の指導に係る方法や企業とのつながりの中で、上記目的を達成するための改訂を行いながら学生プロジェクトの推進体制を整備するとともに，学生の社会人基礎力の評価方法とそのフィードバック方法を定めて実践した。平成 25 年度は，整備した制度を踏まえて，学生の自律的成長を促進できるよう教員側のアプローチ方法を探究する．企業が求める人材像について，プロジェクト活動の評価を通して意見収集を行う．

プロジェクト活動では，種々の情報の収集，共有，それらの加工と意見形成に取り組まなければならないが，これらを効果的，効率的におこなうためには，ICT 活用が不可欠である．平成 25 年度は，プロジェクト・マネジメントシステムをはじめこれまで整備した ICT 活用支援システムの利用を通した情報活用能力の育成に努める．

＜＜主なスケジュール＞＞

日程	実施事項
4 月	キックオフ講演会 プロジェクトメンバーの決定
5 月から 7 月	プロジェクトテーマの決定 プロジェクト計画の策定 目的，協働企業の選定，確定，　プロジェクト計画書の作成
8 月	中間発表会（プロジェクトテーマ，目的，行動計画，春学期実施内容）をパワーポイントによる発表 配布資料（A4　1 枚　2 段組）の作成
9 月から 12 月	プロジェクトの推進
12 月	プロジェクト成果報告会 協力企業担当者による評価の実施

	パワーポイントによる発表 配布資料（A4　1枚　2段組）の作成　　ポスター形式
1月	社会人基礎力評価シートによる評価 社会人基礎力評価シートに基づく，教員面接と助言，自己行動計画の作成 成果報告書（学生）、成果報告書（教員）の作成
2月	成果報告書（教員）をもとに，プロジェクト活動の総括会議の開催 次年度計画の策定 　プロジェクト実施に関する改良 　自己内省支援方法の検討

＜＜主な行事＞＞

（1）キックオフ講演会「豊橋を知る」

開 催 日：平成24年4月24日（火）

会　　場：豊橋創造大学　A23教室

講　　師：豊橋市企画部政策企画課 主査　増田 明　様

参加人数：情報ビジネス学部3年生　42名、キャリアプランニング科2年生　55名

教職員　31名

内　　容：豊橋市政策企画課主査増田 明様を講師に迎えて、豊橋市における産業全体の特徴や推進事業についての講演を聴講した。また、「豊橋市のプロモーション」をテーマとしたグループ活動により、協働作業のために必要な主体性やコミュニケーション能力についての意義を認識した。

図1　キックオフ講演会の様子

（2）プロジェクト活動中間発表会

開 催 日：平成24年8月10日（金）

会　場　：豊橋創造大学　B14教室

参加人数：情報ビジネス学部3年生　41名

教職員　22名

内　　容：4月から始めたプロジェクト活動の目的や実施計画をプロジェクトグループ

内でまとめて発表することにより、今後の計画の確認とその意義を再認識した。自らのプロジェクトのプロモーションを行うことの重要性を考える機会とした。

図２　中間発表会の様子

（３）プロジェクト成果発表会

開 催 日：平成 24 年 12 月 18 日（火）

会　場　：豊橋創造大学　B14 教室

参加人数：情報ビジネス学部 3 年生　41 名

来賓　8 名

教職員　21 名

来　賓　：(株)アイエスエル　伊藤 弘尚　様

愛知県赤十字血液センター 豊橋出張所

事業課 推進係長　日比野 高仁　様

事業課 主事　平井 祐一　様

(株)シライ パッケージプラザシライ本店　代表取締役　白井 成明　様

豊橋市福祉部長寿介護課　主事　佐野 真司　様

豊橋信用金庫　人事部 次長　小宮山 豊　様

よしのベイカリー(株)　代表取締役　鈴木 雅晶　様

ワルツ(株)　代表取締役　片桐 逸司　様

内　　容：4 月から始めたプロジェクトのテーマや意義など全体像を要約して約 10 分で発表し、5 分の質疑を行った。協力企業の担当者や代表取締役にご参加いただき、講評をいただいた。優秀なプロジェクト活動に対して学部長賞と学生が互選するプロジェクト賞を選出し表彰した。

（４）社会人基礎力評価と学生へのフィードバックミーティング

開 催 日：平成 24 年 12 月から平成 25 年 1 月

図３　成果報告会の様子

会　　場：豊橋創造大学　プロジェクト室など

内　　容：プロジェクト活動では、グループで決定したテーマの遂行のために、協力企業担当者や学生メンバー間での意見調整を行い、行動計画や役割分担を決定した。他者との協力、意見調整などを適切に行い、自らの役割を遂行する自律性や主体性に就いての意義を理解した。そしてプロジェクト活動の中で、意見表出や役割分担どの程度成し得たかを自省して、自らの長所・短所について熟考する機会とした。指導教員から社会人基礎力の達成度に関するフィードバック与えて、改善行動についてのミーティングを実施した。

（５）プロジェクト実施総括会議

開 催 日：平成 25 年 2 月 13 日

会　　場：豊橋創造大学　本館３F 会議室

参 加 者：専任教員全員

内　　容：プロジェクト活動の対する成果報告書を教員がまとめた上で、学生の社会人基礎力育成

2．活動成果

(1)参加学生の社会人基礎力育成の観点における成果：平成24年度は、地域産業界と連携したプロジェクトとして11のテーマについてのプロジェクト活動を計画、実施した。その活動において学生が主体的、自律的、協調的にグループで行動して、テーマの決定、行動計画、作業の実施、進捗管理を行った。これらをグループの協議を通して決定し、役割分担して作業を進める体験をさせた。これらを効率的に進めるための必要な能力や行動について認識を深めさせた。

(2)教育充実に関する観点の成果：本補助事業においては、学生の社会人基礎力を養成できる教育体制の構築や充実が目的である。プロジェクト活動は、学生がグループで作業を進める中での気づきや行動改善を行うための活動である。本補助事業の中心的事業であり、これらをカリキュラムに組み込み教育の実施、評価方法などを推進させた。具体的に事業展開することにより実施方法の改善ならびに改良について意見交換を行った。

(3)産業ニーズ把握に関する観点の成果：人材育成に対する意見だけでは、抽象的で理解し

難い。そのため、育成すべき能力を容易な言葉で説明し、その理解を深める。

3．実施事業を踏まえた次年度の方策

3-1　総括会議（2 月 13 日実施）のまとめ

本会議では、主に次年度以降のプロジェクト運営についての議論がなされた。

＜提示意見＞

- （従来通り）ゼミ間での移動は可能とし、プロジェクトをゼミ単位で行う。
- ゼミ単位ではなく、カテゴリー分けして、学生に選択させる。
- 複数年にわたるプロジェクト運営を実施したい。
- プロジェクトテーマが決まっているゼミについては、所属するゼミ生に行わせる。しかし、プロジェクトテーマが決まっていないゼミについては、学生の希望で取り組むプロジェクトおよびプロジェクトチームを選択させる。

＜結論＞

様々な意見が提示されたが、結論としては、平成 25 年度のプロジェクト運営は現状の通りとし、平成 26 年度からプロジェクト体制を再構築することになった。

平成 26 年度からのプロジェクト体制を再構築するため、教務委員会に、各教員がプロジェクト体制についての案を提出することになった。

3-2　改善点の集約

次年度に向けた改善点として、次の事項が挙げられた。

- メンバーの意見等を重視し、新しいテーマを見つけることが必要である。
- 前半部分は、文献研究をしっかりと行い、ある程度内容を理解したうえで実態調査を進める必要がある。
- プロジェクト活動は、ジェネラルスキル養成の教育プログラムである一方で、学生の動機付けの機会と考えているが、できる限り外的要因ではなく、内的要因を誘発するものになるよう配慮したい。
- 社会人基礎力の構成要素を発揮するには、規律性とストレスコントロールが大きな鍵となるため、この点については次年度以降の課題としたい。
- 外部企業・団体との構築した協力関係を維持できなければ、信頼を失ってしまう。そのためには、上位学年と下位学年との交流が不可欠である。
- プロジェクト演習を進めるにあたり、専門ゼミナールとプロジェクト演習の線引きや、プロジェクト演習の運営体制を早急に決定する必要がある。
- プロジェクトを、その内容と方法によりカテゴリー化し、複数教員が指導すれば、学生の希望の反映と減少する学生への双方に対処できる。
- プロジェクトをどの単位で行うかについての再考が必要である。
- 大学教育の観点からすれば、プロジェクトにアカデミックの要素を取り込む必要がある。

- インタビューだけでなく、メンバー内での意見交換を通して発信力や傾聴力を養うことができるよう、指導を改善したい。
- 得意でない分野も苦手意識を克服できるよう、十分な時間的な余裕を持って取り組ませるような工夫が必要である。
- 特定の学生に仕事が偏ってしまっているところを改善したい。
- 主体性を養成するため、学生に課題設定を行わせる。

（4）３者間協働インターンシップグループ活動報告

1. グループ事業の取組

インターンシップは、学生が企業における就業体験を通して、①現場での実務から大学での学びの意味および意義を再確認して積極的な学びの姿勢を身に付けること（学びの往還）、②就業に対する意識を高めるとともに、職業・職種に対する理解を深めることを目的とした産官学連携の教育プログラムである。

2. 活動成果

インターンシップにより、学生には仕事上の問題点を自ら発見し、目的を設定して仮説を立て、創造的に解決する機会を提供する。また、就業体験に関する発表資料（報告会の実施）および報告書を教員・企業からの指摘をフィードバックしながら作成することで、アクティブラーニングを伴った主体性・創造性の育成を目指す。

これらのことを実現するために、平成 24 年度は以下の内容を表 1 のスケジュールにて展開した。

・事前指導（実習企業の事業概要の理解、インターンシップへの参加目的の明確化）

実習先企業の事業概要の理解を深めるとともに、インターンシップへの参加目的を明確にするために、発表とその内容に対する議論を中心としたグループワークを実施する。

・実習（就業体験）

各自が実習先に企業にて、1～2 週間の就業体験を行う。

・報告会の実施（発表資料の作成）

プレゼンテーション資料の作成を通して、実習内容を振り返りながら自身の設定したテーマの内容・発見した問題点に関する考察を教員および企業担当者の指摘をフィードバックしながら深める。また、発表練習をグループ単位で実施することにより、学生自身にどのような発表をすべきかを考えさせる。

・報告書の作成

報告会の実施同様、報告書の作成を通して、実習内容を振り返りながら自身の設定したテーマの内容・発見した問題点に関する考察を教員および企業担当者の指摘をフィードバックしながら深める。

表 1　事業月別実施内容

月	実施内容
6 月	事前指導（実習先のマッチング・自己紹介書の作成指導）（担当：キャリアセンター）
7 月	事前指導（自己紹介書の校閲指導）（担当：科目担当教員）
8・9 月	実習（1～2 週間） 実習先の訪問 （担当：キャリアセンター、就職委員会教職員）
9・10 月	インターンシップ報告会資料の作成指導・発表練習（担当：科目担当教員）
10 月	インターンシップ報告会の実施（10 月 25 日） 企業との座談会の実施（10 月 25 日）
10～12 月	報告書の作成指導（担当・科目担当教員） ※学内での校閲終了後、企業担当者による校閲を実施
3 月	報告書の印刷

平成24年度は、情報ビジネス学部からは13名（3年生：10名、2年生：3名）の学生が9企業・事業所のインターンシップに参加した。実習期間は、4事業所では2週間（10日）、5事業所では1週間（5日）であった。

従来、インターンシップの参加対象学生を、主に3年次学生としてきた。しかしながら、インターンシップに参加した学生からは、より多くの企業のインターンシップに参加するためにも、2 年次から参加する機会を提供して欲しいとの要望が出ていた。こうした意識の高い学生の要望に応え、より多くの学びの機会を提供するために、今年度は2年次学生に対してもインターンシップへの参加を呼びかけるとともに、一部の事業所に受入の協力を頂いた。

図1　インターンシップの実習風景

今年度のインターンシップ報告会は、10月25日（木）に本学にて2会場に分けて実施した（図2）。報告会には、次年度のインターンシップの参加対象となる2年生学生全員が参加し、実習学生の報告をメモをとりながら聞いていた。また、実習先企業・協力企業の8企業・事業所より8名の方にも出席頂き、学生の報告内容に対してコメントを頂くとともに、各社のインターンシップの取り組み、およびインターンシップに参加する際の心構えなどをお話し頂いた。

この報告会に引き続いて企業との座談会を実施した（図3）。座談会では、まず本学の今年度のインターンシップの実施状況を説明し、続いて企業・事業所の方よりインターンシップにおける学生の実習状況、問題点、今後の課題などについて様々な意見を頂いた。

図2　インターンシップ報告会における学生の報告風景

図3　企業との座談会

本事業の実施においては、受け入れ企業・事業所には、実習プログラムの立案や実習期間中の指導、実習報告書の校閲や評価に多大な御尽力とご配慮をいただいている。この場を借りて心より感謝申し上げる。

3.　実施事業を踏まえた次年度の方策

本事業の実効性を高めるために、次年度はこれまで以上に①インターンシップ活動を通した学生の気付き（考察）を深化させる、②教員・学生・企業の共同を活発化にする新たなインターンシップ・プログラムの構築を検討することを念頭に、事業を展開する。

これを実現するために、具体的に以下の取組を行う。

・科目担当教員と専門ゼミナール担当教員の責任の明確化

考察の深化のために、専門ゼミナール担当教員と学生の協働を深める。

・企業を組み合わせたインターンシップの検討

例えば、次のようなインターンシップの実施を検討する。

同業種　：　7日＋7日

異業種　：　川上企業7日＋川下企業7日

また、2 年次学生のインターンシップへの参加を本年度以上に促し、インターンシップへの参加機会を増やすことで、より多くの企業（職場）を体験する機会を確保する。

３．２　教育体制・産業界ニーズ把握体制整備

(1)連携事業推進グループ活動報告

1．グループ事業の取組

産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業では、中部地域 23 大学と連携して、「アクティブ・ラーニングを活用した教育力強化」と「地域・産業界との連携力強化」が行える教育プログラムを形成することになっている。豊橋創造大学では、社会人基礎力を養成すべき資質として位置づけ､そのための４つの教育プログラムを実施する｡そして、その成果や失敗を広く開示するとともに他大学と共有することにより、よりよい教育体制を構築する。連携事業推進グループは、このような実施事業の成果と失敗の公表と他大学との連携を図り、本学における教育体制の整備を進める。また、実施する教育プログラムを教育効果の高い教育プログラムに改善するために、連携事業推進グループでは、学生の社会人基礎力の評価方法と教育への展開方法を検討し実施する。さらに、社会人基礎力養成プログラムの実施成果を他の授業に展開して、学生に早期の意識付けや態度・志向の養成を進める。

以上のようなグループ活動を目的として、平成 24 年度は、連携事業の取りまとめ、学内教員への周知、教員の行事参加による意識や教育スキルの改善などに取り組んだ。社会人基礎力の評価については、プロジェクト活動やインターンシップなど学生の活動にもとづいて評価する仕組みと学生にフィードバックする方策を検討した。また、自己理解促進グループが実施する総合的評価（PROG：リアセック提供）によるアセスメントとの複合的評価方法を検討する｡これらの利用方法や科目への展開は平成 25 年度に検討実施する予定である。

＜＜主なスケジュール＞＞

日程	実施事項
10 月 26 日	第 1 回東海 A（教育力）チーム 時間：10：00～12：00 場所：名古屋商科大学大学院伏見キャンパス E21 教室 参加者：佐藤、三好、今泉、今井、村松東、遠山
11 月 17 日	中部地域大学グループ全体会議 時間：13：00～17：00 場所：名古屋商科大学大学院伏見キャンパス E31 教室 参加者：三好、今泉、村松東、若松 第 2 回東海 A（教育力）チーム 時間：14：50～15：50 場所：名古屋商科大学大学院伏見キャンパス E31 教室 参加者：三好、今泉、村松東、若松
12 月 7 日	第 3 回東海 A（教育力）チーム 時間：10：00～12：30 場所：名古屋商科大学大学院伏見キャンパス E21 教室 参加者：佐藤、今泉、村松東、遠山
1 月	社会人評価シートによる学生の社会人基礎力評価 評価者は学生自身、教員、他メンバー。 社会人評価シートに基づく，教員面接と助言，自己行動計画の作成

	指導教員による学生プロジェクト指導成果報告書の作成 （地域企業連携プロジェクトグループが実施）
1 月 17 日	第 4 回東海 A（教育力）チーム 時間：10：00～12：00 場所：名古屋商科大学大学院伏見キャンパス E21 教室 参加者：今泉、山口、村松東、中村
2 月 8 日	東海 A（教育力）チーム連携 FD 会議 時間：13：30～17：00 場所：椙山女学園大学 星ヶ丘キャンパス椙山人間交流会館 1F 講義室 参加者：三好、見目、三輪、野口、村松東
2 月 9 日	東海 B(産業ニーズ把握)チーム　連携 FD 会議 時間：13:30～17:00 場所：名古屋産業大学　文化センター大ホール 参加者：　見目
2 月 13 日	学内プロジェクト総括会議による指導方法の共有と考察 情報ビジネス学部全教員参加
2 月 19 日	中部圏産学連携会議 時間：13：00～17：00 場所：名古屋会議室プライムセントラルタワー13 階 参加者：佐藤、今泉、中野、遠山
3 月	プログを用いた学生の社会人基礎力の評価 （自己理解促進グループ実施）
3 月 2 日	大学教育改革フォーラム in 東海 2013 時間：10：00～18：30 場所：名古屋大学東山キャンパス　ES 総合館ほか 参加者：三好、見目、今井、山口、遠山

2．活動成果

上記のように、連携事業推進グループの役割は、実施される 4 つの教育プログラムの成果を踏まえて教育体制の整備と産業界ニーズの把握体制を構築することである。また、成果や失敗を他大学と共有することにより、学生事業の推進や改善を図ることが本グループのもう一つの役割である。

平成 24 年度は、連携事業推進グループの補助事業全体における役割が明確化した。その役割に基づいて、学内の成果および失敗を取りまとめ連携大学に報告するとともに、他大学の状況の報告を受けて学内事業の考察を進めた。連携 FD や中部圏産業ニーズ把握会議に専任教員が参加して、事業目的やその実施意義や方法についての認識を深めた。高い割合で、専任教員がこれらの事業に参加した。また、補助事業で展開する教育プログラムのみならず、他科目への展開方法や社会人基礎力の評価方法の検討を始めることが出きた。また、事業実施内容を大学教育改革フォーラム in 東海 2013 で発表報告した。

3．実施事業を踏まえた次年度の方策

連携事業推進グループの役割は、以下の 4 つを担うことになっている。

- 評価方法および指導方法の検討
- キャリア成果授業へ展開
- 学外へ公開
- 学外情報を学内へフィードバック

事業実施の内容や成功事例、失敗事例の公表を行うとともに、他大学と連携してこれらの事例を整理して、学内制度整備方法の検討を行う。地域企業連携プロジェクトや 3 者間協働インターンシップなど学生が実際に行う活動に対して評価する場合と総合的アセスメントである PROG による評価の関係性を明らかにして、評価方法の検討を行う。また、それらの評価に基づく指導方法を検討・実施する。また、これらの評価と指導方法を踏まえた他の科目での指導方法を検討する。

３．３　教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援

(1)ユビキタスキャンパスグループ活動報告

1．グループ事業の取組

本グループでは、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT 利活用環境の整備および推進のための以下の活動を行っている。

（１）学内 ICT 環境の整備・充実（設備等の維持や利便性向上の検討）

（２）携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進

（３）「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

（４）事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

平成 24 年度は、平成 23 年度の事業（「大学生の就業力 育成支援事業」『持続型職業人 SOZO プロジェクト』）の実施結果と課題、および、学生アンケート等の評価結果を踏まえ、改善活動を中心に上記事業を展開した。活動内容の一覧を表 1 に示す。

表 1　平成 24 年度ユビキタスキャンパスグループ活動一覧

日付	分類	内容	対象
4 月 12 日（木） 4 月 17 日（火）	（２）	プロジェクト管理アプリ導入説明会	情ビ 3 年
4 月 18 日（水）	（２）	プロジェクト管理アプリ導入説明会	キャリ 2 年
5 月 22 日（火）	（４）	Web サイト再構築・公開	
6 月 7 日（木）	（２）	就業力育成支援を目的とした一問一答アプリ・システム Sozo Platz 開発・公開（v1.0.0）	
6 月 13 日（水）	（２）	iPad 配布・説明会	経営 1 年
6 月 26 日（火）	（２）	アプリ導入説明会（Handbook, Sozo Platz）	経営 1 年
7 月 18 日（水）	（２）	アプリ導入説明会（Sozo Platz）	教員
7 月 30 日（月）	（２）	アプリ導入説明会（Sozo Platz）	情ビ 3 年
7 月 31 日（火）	（２）	アプリ導入説明会（Sozo Platz）	キャリ 2 年
8 月 2 日（木）	（２）	Sozo Platz 機能改善（v1.0.0 → v1.1.0）	
9 月 11 日（火）	（２）	iPad 配布・説明会	情ビ 2 年
9 月 12 日（水）	（２）	iPad 配布・説明会、アプリ導入説明会	キャリ 1 年
9 月 12 日（木）	（２）	Sozo Platz 機能改善（v1.1.0 → v1.2.0）	
9 月 20 日（木）	（２）	アプリ導入説明会（Handbook, Sozo Platz）	情ビ 2 年
9 月 24 日（月）	（２）	Sozo Platz に関する発表・意見収集（電気関係学会東海支部連合大会）	
12 月 28 日(金)	（１）	e ラーニングサーバ環境改善（ハードウェア増強）	
3 月 29 日（金）	（３）	プロジェクト管理アプリ・システム機能修正	
3 月 29 日（金）	（３）	スチューデントプロファイルシステム（Sozo Passport）プロトタイプ開発	

情ビ：情報ビジネス学部キャリアデザイン学科，経営：経営学部経営学科

キャリ：短期大学部キャリアプランニング科

2．活動成果

（１）学内 ICT 環境の整備・充実（設備等の維持や利便性向上の検討）

- 平成 23 年度末に無線 LAN 環境の充実化をはじめとする学内 ICT 環境の更新を行い、大学の一般教室・PC 教室のすべてにおいて携帯情報端末（iPad）から無線 LAN 接続ができる環境を整備した。平成 24 年度は、更新後の学内設備に対してシステムログ等の観察を通じて不具合発生状況を監視した。結果として、特に不具合の発生は確認されず、現状では安定した ICT 環境を提供できているといえる。
- D 棟 5 階共同ゼミ室に iPad を接続・管理できる PC 環境を追加整備し、学生の iPad 利用に関する利便性向上を図った。
- e ラーニングシステム（Handbook）の利用者増加に対応するため、該当サーバのハードウェア増強を行い利用環境の改善を行った。

（２）携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進

- 平成 23 年度は、プロジェクト活動に参加する学年の学生（情報ビジネス学部キャリアデザイン学科 3 年、短期大学部キャリアプランニング科 2 年）に iPad を貸与し、プロジェクト活動や e ラーニングに利用させた。しかし、iPad を持つ学年と持たない学年が混在したため、教員が授業等において積極的に iPad を活用できない状況であった。この問題に対し、平成 24 年度は、事業対象の学部・短期大学部の学生全員に iPad を貸与し、授業等での利活用を阻害する要因を排除した。
- iPad 貸与学生を対象に、iPad の基本操作、プロジェクト管理システム、および、e ラーニングシステム（Handbook、Sozo Platz）に関する説明会を実施した。

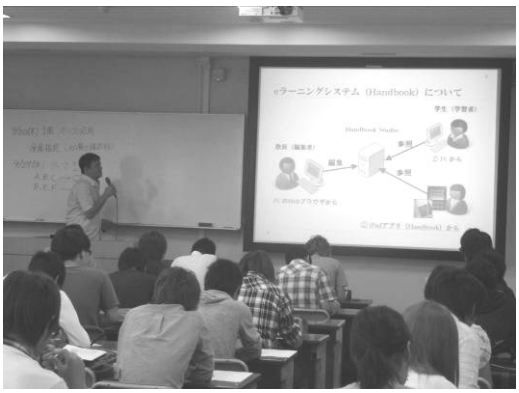


図 1　iPad アプリケーション導入説明会

- 教員に対して e ラーニングシステム（Handbook）利用ガイドを配布し、e ラーニングシステムの利活用を働きかけた。全学生に iPad を貸与した効果もあり、平成 24 年度秋学期以降は授業・演習での Handbook 活用が進んだ。結果として、全コンテンツ数：38、システムへの総年間ログイン数：5,288 と前年から飛躍的に増加した。
- 前年度に試作開発した就業力育成支援を目的とする一問一答アプリ（Sozo Platz）の正式公開、および、機能改善を行った。また、その導入方法や利用方法について、

学生と教員を対象にそれぞれ説明会を実施した。開発したアプリに関して学会発表（平成 24 年度電気関係学会東海支部連合大会）を行い、外部の教育者の意見収集を行った。

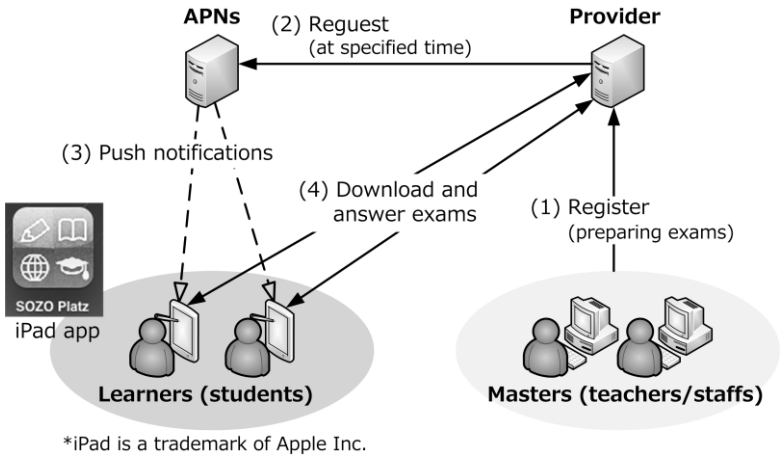


図 2　一問一答アプリ（Sozo Platz）

（３）「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

- 自己理解促進プログラムグループ、および、地域産業連携プロジェクトグループと連携し、それぞれのグループで使用する『スチューデントプロファイルシステム』（学修ポートフォリオシステム、Sozo Passport）の仕様策定を行い、システムの開発に取り組んだ。このシステムは、PROG アセスメント結果や社会人基礎力評価シート、その他制作物をアーカイブするシステムで、学生はいつでも自分の活動等について振り返ることができるようにしている。現在はプロトタイプが完成した段階であるため、平成 25 年度前半も継続して開発およびテストを行い、平成 25 年度秋学期から正式に運用を開始できるよう計画・準備する。
- 地域産業連携プロジェクトグループで利用する『プロジェクト管理システム』について、同グループと連携し、利便性を向上させるための問題点の洗い出しと具体的なシステム不具合に関する機能改善を行った。

（４）事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

- 平成 23 年度までに利用していた学内 Web サイト（内部関係者向け）について、事業成果を対外的に公開できるよう再構築を行った。また、学内向け（制限付き）のページを作成してマニュアル等の資料や FAQ 等の掲示を行い、学生・教職員向けの支援サービスを充実させた。

  サイト URL:　http://project.sozo.ac.jp/

3．実施事業を踏まえた次年度の方策

（１）継続して学内 ICT 環境の維持および改善活動を実施する。特に、学内ネットワークに接続する無線端末の増加に伴うインターネットトラフィックの増加に対応するため、対外接続回線の見直しを行い帯域確保に努める。

（２）新たに本学に入学する学生に対しても同様に iPad を貸与し、全員が iPad を所持し学習に利用できるよう準備する。また、そのための説明会等を随時実施する。

（３）平成 24 年度までに完成したスチューデントプロファイルシステム（Sozo Passport）のプロトタイプに対する試験や評価を通じて改善を春学期中に行い、秋学期から学生・教員で利用できるよう関係事業グループと連携して開発・準備を行う。また、プロジェクト管理システムについても利用教員から意見を収集して機能改善を行い、より学生指導に有益なシステムに進化させる。

（４）前年度に引き続き本事業の活動内容を Web サイトに整理して掲載し、連携大学向け情報共有および一般の学外向け情報発信を行う。

(2)大学コミュニティグループ

１．グループ事業の取り組み

大学コミュニティグループ活動は、『産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業』の補助金対象外で、費用は本学負担で行っているものである。目的は『教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援』としている。平成 24 年度は卒業後 3 年間における卒業生の離職状況調査を中心に以下の活動を行った。また、この活動は大学と短大が連携した形で行っている。

平成 24 年度活動内容

月　日	活　動　内　容	学部
4 月～5 月	平成 21、22、23 年 3 月卒業生　就業状況調査の集計、分析	○
5 月	就業状況調査未回答者追跡調査実施	○
6 月～3 月	卒業生就職先に企業訪問　求人開拓　在学生への教育指導依頼	○
10/27-10/28	創造祭同窓会ブース開設　創造祭へ来た卒業生にアンケート調査を実施	○
10/29（月）	学内企業説明会　OB 人事担当者参加による説明に実施	○
11/29（木）	短大 OG 交流実施（先輩の就職体験報告会に OG 参加）	
2 月	平成 22、23、24 年 3 月卒業生　就業状況調査の実施	○
2/9（土）	学内企業説明会　OB 人事担当者参加による説明の実施	○
3 月	就業状況調査未回答者追跡調査実施	○

２．活動成果

■　卒業生就業状況調査

本学では、過去 3 年間の卒業生に対して、就業状況を把握するアンケートを毎年実施している。アンケートは離職率を集計するだけでなく、離職に至った理由等を詳細に分析し、在学生の就職指導や各種対策講座へも反映し、安易な離職を防ぐためのノウハウ等の構築に役立てている。

また、このアンケートでは卒業生との大学コミュニティーを活用した社会人基礎教育を展開させ、在学生が交流できる仕組み作りに役立てることを視野に入れた項目も設けており、卒業後の早期離職を防ぐことに繋げている。

尚、アンケートの回収率は伸びず、②平成 25 年 3 月 31 日〆については、未回答の卒業生宅へ休日に電話を掛けて、個別に調査を行っているところである。

≪卒業生の就業に関する追跡調査≫　①

対象：2008～2010 年度卒業生　182 名　　（大学卒業生：95 名　短大卒業生：87 名）

実施期間：平成 24 年 4 月 20 日～平成 24 年 5 月 11 日

≪卒業生の就業に関するアンケート≫　②

対象：2009～2011 年度卒業生　283 名　　大学卒業生：123 名　短大卒業生：158 名）

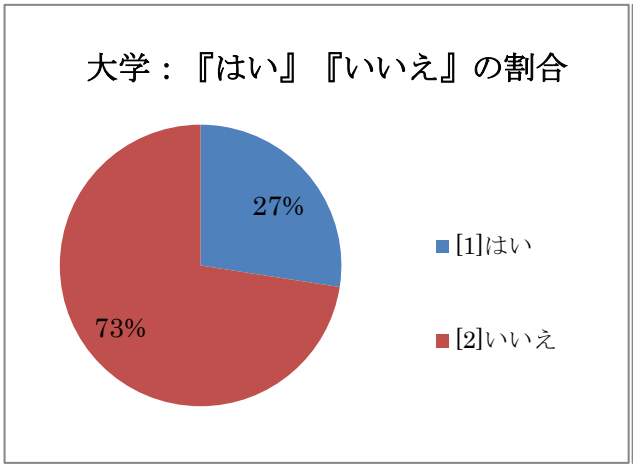
実施期間：平成 25 年 2 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日

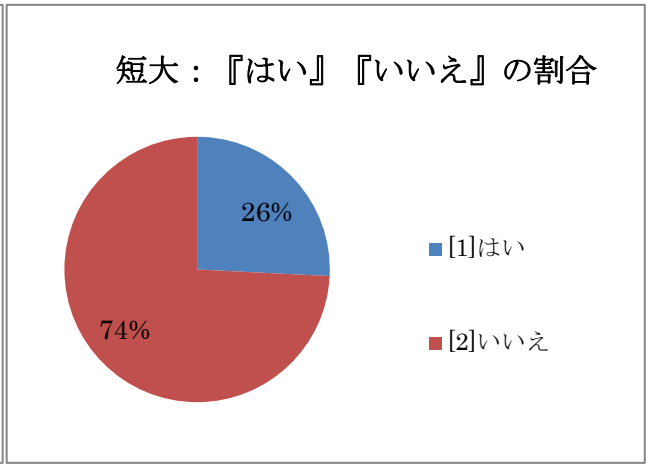
卒業生の就業に関する追跡調査　集計結果

対象：2008～2010 年度卒業生（大学卒業生：95 名　短大卒業生：87 名）

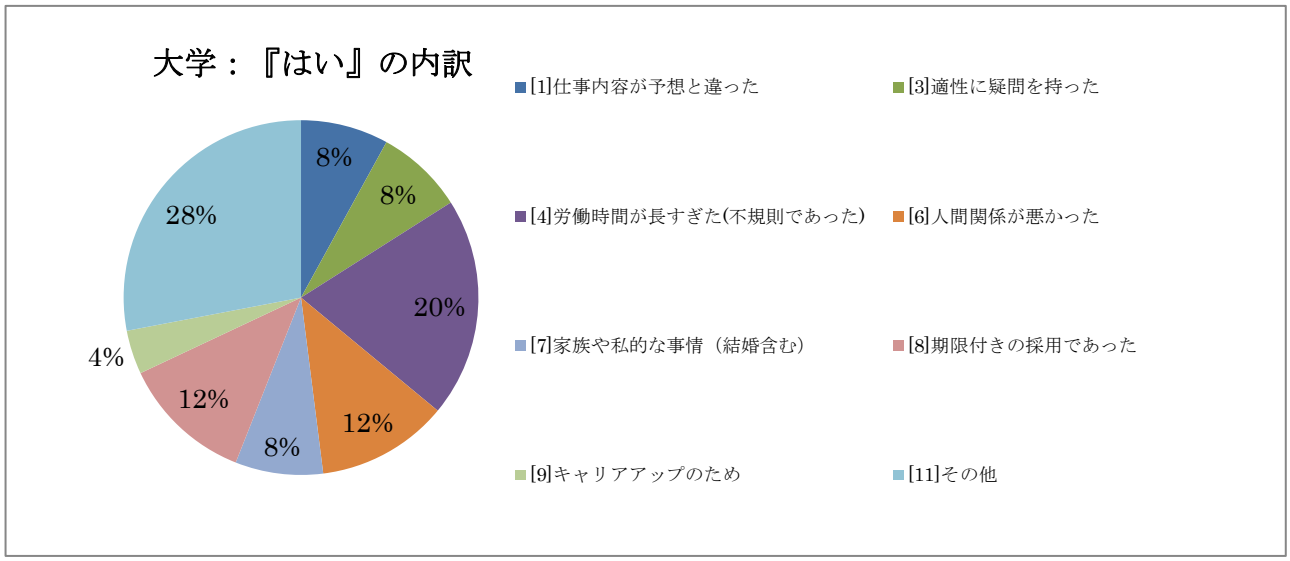
実施期間：平成 24 年 4 月 20 日～平成 24 年 5 月 11 日

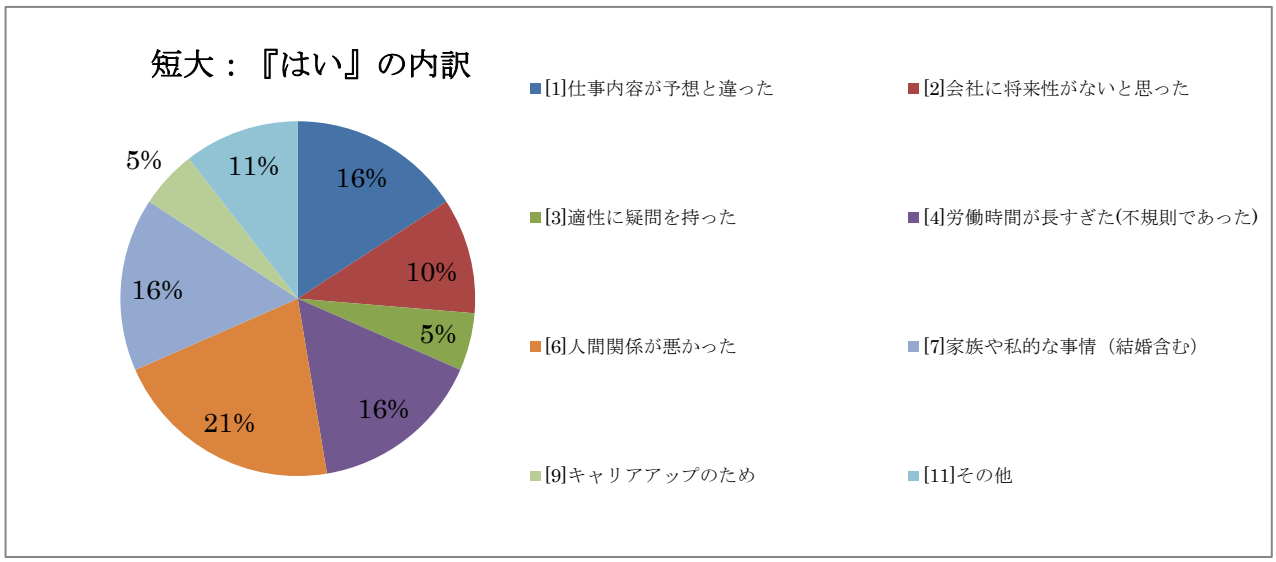
Q1. 大学卒業後、離職または転職をされましたか？





Q2. 大学卒業後、離職または転職をされましたか？『はい』の第 1 理由





離職率については、大学・短大とも概ね2割から3割ということで、平均的な数値といえる。辞めた理由は、大学卒業生では『労働時間が長すぎた（不規則であった)』、『人間関係が悪かった』、短大卒業生では『人間関係が悪かった』『労働時間が長すぎた（不規則であった)』、『仕事内容が予想と違った』というところが多く、人間関係、労働時間がポイントとなっているように考えられる。どんな仕事でも 3 年間は我慢して従事しないと仕事の本当の面白さ、充実感、達成感は味わえないと言われているが、早期に離職してしまうことは、本人にも企業にもデメリットであると考えられる。

これから就職超氷河期、景気の低迷からは脱していく気配の日本経済ではあるが、早期離職防止に向けて本学の教育改善につなげていくためにも本調査は継続していく。

■　創造祭学部卒業生同窓会ブース開設

本学では、毎年 10 月第 4 土曜日からの 2 日間にわたり、『創造祭』と呼ばれる学園祭を開催している。創造祭には多くの卒業生が来場することから、恩師や友人たちと旧交を温めたり、地元をはじめ社会で活躍する先輩と在学生の交流の場として学部卒業生を対象とした同窓会ブースを開設した。

同窓会役員はじめ卒業生有志により華やかに飾り付けられた会場では飲み物も提供されるなど、アットホームな雰囲気の中で在学中の思い出や近況報告等、会話に花が咲いていた。また会場の一角には歴代の卒業アルバムや来場者の記念写真（スナップ）が掲載され、両方を見比べながら談笑する卒業生グループの姿も見受けられた。

学部卒業生対象同窓会ブース開設

開 催 日：平成 24 年 10 月 27 日（土）・28 日（日）

会　場　：豊橋創造大学　B22 教室　　卒業生参加人数：57 名

創造同窓会ブースでは同時に、勤務先に関する就職のアンケート調査を実施した。有効回答者は 38 名　今の仕事で『満足・普通』で 30 名。『不満・多少不満』で 8 名であった。

勤務先の『良いところ』は、人間関係がよいが多く、『悪いところ』では、仕事量が多くとても忙しい、わずらわしい人間関係、休日が不安定となっており、今回の調査では人間関係で良し悪しが決定されるウエイトが多いように思われた。

そのほか、卒業生からの求人情報もあり、また卒業生を招聘する授業や就職ガイダンスへの協力賛同者が 10 名ほど発掘できたことは、今回の成果であった。

■　学内企業説明会　OB 人事担当者参加による説明

34 社が参加した秋の学内企業説明会（10 月 29 日開催)、春の『三河地区企業学内研究セミナー』（2 月 9 日）それぞれ、3 人の本学 OB 人事担当者が参加した。本学学生の目線に立った、現実的で身近な説明は大変親近感もあり学生自身に大変意義のあるものであった。これからは卒業生が在籍する参加企業数を増やしていくことが重要である。

また『三河地区企業学内研究セミナー』において、本学が取り組む GP について、参加企業の皆様に簡単なアンケートを実施したのでご紹介させていただく。

OB の人事担当者

秋の学内企業説明会

≪2 月 9 日参加企業に実施した GP アンケートより≫

・『産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業』の取り組みについては大変よい取り組みである、特にメンタル面での取り組みは先進的だと思う。

・学生さんが自ら立ち上げ運営までされることは、とてもよい学習になると思います。

・大学の講義を聞くだけでは学べないことを肌で感じられるよい機会である。

・最近の学生に不足している点は、個性、コミュニケーション能力、積極性、忍耐強さ。専門知識にこだわらず、幅広い知識、応用力が必要。

・10 年程前と比較すると、「どんどん出世したい」というガッツのある方が少なくなった。サラリーマン、社会人に対して夢を持てるようにすることが必要と考えます。

・本学学生に不足しているものとして、明るさ、元気さ（特に男性）、目的意識。

・面倒見がよい学校が多いですが、ある程度「不自由さ」を経験することで、自ら動き発見する力が養われるのではないかと考えます。わざわざ大人が手助けしなくても社会を堂々と渡り歩いて行ける強さを身に着けられるような教育をお願いしたいです。

■　企業訪問

企業訪問は、57 社（学部 23 社・短大 34 社）行った。特に短大では、昨年度卒業生が就職した企業を中心に訪問を実施し、採用した側の思惑や意見・配慮等を詳細な部分まで聴収することができた。また、訪問することにより卒業生が喜ぶ様子から状況を読み取り、また苦悩する表情に励ましの助言を行うこともできた。このことは、早期離職に至る防波堤となったことと言える。さらに卒業生に対するフォローアップ効果も大であった。

今後は、直前卒業生の就職先訪問に留まらず、過去・新規の就職先企業訪問に広げていきたい。

３．次年度に向けた改善

本活動は『教育体制・産業界ニーズ把握体制』の後方支援を行っているが、次年度は、メンタルタフネス講座受講生が対象の卒業生就業状況調査の集計が発表となる。結果を分析して教育改善を行うため学部、短大にフィードバックしていきたい。また、創造祭を利用した同窓会 OB ブースで参加を促し、交流人数を充実させ、さらなる OB、OG の協力を得ながら、様々な企画を実施していきたい。企業訪問については、卒業生の就業状況、情報収集先としても 80 社以上を目標としてゆく。

４．補助資料

①教員成果報告書

教員氏名	プロジェクトテーマ	掲載ページ
石田宏之	豊橋港のコンテナターミナルの機能と役割（発展可能性）に関する調査研究	53
今井正文	iPad,iPhone で利用できるアプリケーション作成	57
加藤尚子	ヨシノパンプロジェクト	60
川戸和英	SOZO ショップ開店・運営プロジェクト	62
見目喜重	豊橋エコタウンプロジェクト ～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～	65
五味悠一郎	診療情報管理士認定試験の学習環境構築 2012	68
中野聡	田原のウィンドファーム ―社会的企業の実証研究	71
野口倫央	豊橋からオレオレ詐欺をブッ飛ばせ！！	72
三好哲也	豊橋トップインタビュー2012 プロジェクト	74
三輪多恵子	のんほいパーク盛り上げ隊プロジェクト	76
山口満	豊橋献血促進プロジェクト	80

豊橋港のコンテナターミナルの機能と役割（発展可能性）に関する調査研究

石田宏之

1.プロジェクト活動の内容

(1)目的

調査研究の目的は、三河港豊橋コンテナターミナルの機能と役割（発展可能性）についてまとめることである。と同時に、この調査研究を通じて、「就業力（社会人基礎力）を高めること」である。

(2)方法

調査研究は、①文献研究および②実態調査(ヒアリング並びに現地視察)であり、調査した企業・箇所は以下のとおりである。

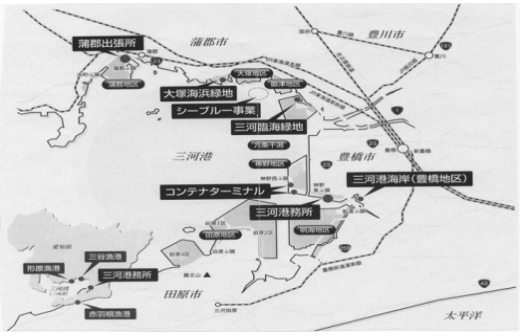
月日	調査対象箇所	協力者	調査内容
4月19日	日本通運株式会社　豊橋市店	次長:鈴木　敏道	・調査依頼(承諾してもらう。)
5月17日	日本通運株式会社　豊橋市店	次長:鈴木　敏道	・メンバーの自己紹介
		管理課長:尾崎　慎	
6月7日	日本通運株式会社　豊橋市店	管理課長:尾崎　慎	・調査全体に対するアドバイス・注意事項
			・豊橋支店の業務内容
6月8日	日本通運株式会社	課長:嶽見　典男	・海運営業所の業務内容
	海運営業所		・三河港豊橋コンテナターミナルの業務内容
			・貿易の実務、港の機能
7月6日	・豊橋市産業課港湾活性課	金出　紀之	・港湾活性課の業務内容
	・三河港コンテナターミナル株式会社	専務取締役	・自動車コンプレクスについて
		伊庭　雅裕	・三河港豊橋コンテナターミナルの概要説明
7月6日	愛知県三河港湾事務所	総務課主幹	・三河港豊橋コンテナターミナルの現状報告
		山本　真至	
		総務課主査	
		鈴木　和貴	
8月1日	三河港豊橋コンテナターミナル	海運営業所	・三河港豊橋コンテナターミナルの現地視察、
		課長:嶽見　典男	税関及び検疫に関するヒアリング
8月16日	日本通運名古屋国際輸送支店	係長:伊原　浩之	鍋田埠頭コンテナターミナルの現地視察

(3)内容

全国の港は平成 23 年 3 月 31 日に港湾法を改正により、特定重要港湾を国際戦略港湾、国際拠点港湾の二つと重要港湾、地方港湾の４つに分けられた。また、前年には重要港湾から 43 港を「重点港湾」として選定し、三河港は重点港湾になった。

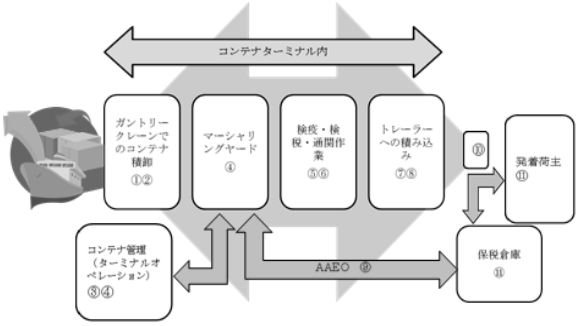
三河港は右記の図の通り、６つの地区から構成され、神野地区と明海地区を合わせて「豊橋港」と呼んでいる。

豊橋港は隣接する田原地区とともに、国内の完成自動車の輸出基地であるとともに、輸入完成自動車の基地(三河港全体で全国１位の取扱量を誇っている)となっている。また、公共ふ頭では、自動車と並んで、「コンテナターミナル」の取り扱い割合は、自動車に次いで約 14%を占めており、拡大傾向を示している。



コンテナターミナルのオペレーション(作業の流れ)は下図の通りとなる。

輸出入コンテナの発着から荷主までの流れ



(4)結論

コンテナターミナルの機能と役割(発展可能性)についてまとめると以下の通りとなる。

三河港は「重点港湾」として、「国際拠点港湾」である愛知県の名古屋港及び三重県の四日市港との連携を図りながら、輸出入完成車の拠点であるとともに。「アジア向けコンテナターミナル基地」機能を果たす役割を担っている。

豊橋コンテナターミナルの後背圏は広く、立地している企業も多いため、コンテナ貨物の潜在量はかなりあると推測される。また、現状のコンテナターミナルの能力は、現状の２倍の量を取り扱うことができる。今年度(24 年)には、ロシア向け

の自動車関連商品等の航路が開設され、約 1.8 倍の取扱量となる。

数量拡大に伴い寄港の数を減らすことによりリードタイムの短縮と 1 個当りコンテナの輸送費の削減を図ることができる。また、数量拡大は、アジア地区への直行便の開設も今後考えられる。

以上、豊橋コンテナターミナルが有するメリットは、①低廉性、②通関の迅速性、③緊急時対応の迅速性、④インターナショナルモーダルシフトが可能などであり、今後の発展が期待されている。

そのための課題を列挙すると以下の通りである。

名古屋港、四日市港、豊橋港間の内陸フィーダーサービスを充実させ、アジア向けコンテナ輸送拡充のための連携を図ること。そのための方法の一つとして、コンテナ単位にならない貨物（LCL 貨物）を対象とした LCL サービスの拠点港として豊橋コンテナターミナルを位置づけること。

豊橋港の後背圏に立地する荷主に対して、アジア向け貨物だけで分離して引き受けるのでははなく一括して貨物を引き受け、アジア向け以外の貨物については、フィーダー輸送により名古屋港あるいは四日市港に輸送するシステムを構築すること。

数量拡大に備えて、コンテナヤード内の ICT 化の促進とヤード内のより一層の機械化を図ること。特に、オペレーション業務をコンピューターで管理すること。

ヤード内の作業の効率化を図るために、7 号岸壁、8 号岸壁の統合を図ること。

ダメージコンテナの修理のために、船会社をターミナル内に設けること。

三河公務所、三河振興会および豊橋コンテナターミナル株式会社などの連携のもとにコンテナ貨物の拡大のためのポートセールスの充実を図ること。

2.プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本プロジェクトでは、経済産業省が推進している 3 つの能力 12 の能力要素のなかから、「チームで働く力から、『発信力』および『傾聴力』、「前に踏み出す力」から『主体性』、「考え抜く力」より『計画性』の 4 つの能力要素を選択し、プロジェクト活動を通して、それぞれ以下の 7 項目により指導してきた。

『発信力』・・・チームで働く力

- **文献調査や実態調査を正確に理解する。**
- それぞれで理解したことをチームで議論し、統一した意見にまとめる。
- ヒアリング調査において、積極的に意見を述べ、正しいかどうかを確認する。
- 事例や客観的なデータを用いて、具体的に分かり易く伝える。
- 聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝える。
- 自分の意見や判断を相手に分かり易く伝えるために、話そうとすることを自分なりに十分に理解する。
- 相手の表情、態度を見て、それに応じた話し方をする。
- 発表の際には、ポイントと話す順序を事前に考えておき、話す。

『傾聴力』・・・チームで働く力

- メモを取る際に不明な点をチェックし、後で確認をする。
- メモを取り、みんなでそれを確認し、議事録を作成する。
- ヒアリング調査の際、相手が分かり易いように事前に質問事項をチームでまとめる。

・先入観にとらわれることなく、相手の話を素直に聴くことができる。

・ゼミで提出するレポートについてのアドバイスを求められたら、一から説明してもらい、疑問点や明確化すべき点について質問する。

・友人から相談事を持ちかけられたら、友人の話をできるだけ客観的にとらえ、偽日しい意見であっても伝える。

・レポートの分担を決める際、一人の話が長く脱線した際には、発言が長くなる原因を考え、相手の話を要約し、分担の話題に戻す。

・相手に積極的に話してもらうには、話題のポイントを話してもらうようにする。

『主体性』・・・前に踏み出す力

・演習で、毎回リーダーを交代でやり、その日の学習の先導役を果たす。

・ヒアリング項目を率先して提案する。

・訪問先で積極的に質問する。事前に準備する。

・分担して任された作業が早く終わったので、チームの仲間に見てもらい、さらに良いものにする方法を考える。

・作業分担を決めるとき、自分の強みを活かせると思ったら、多少困難な作業でも引き受ける。

・発表会で直接関係ない学生の発表を聞きながら、自分の研究への新しい視点を考えてみる。

・用事ができてレポートが期日に間に合わないとき、限られた時間で何ができるかを考え、期日にまでにできるよう工夫する。

『計画力』・・・考え抜く力

・プロジェクトの内容を理解する。

・プロジェクトのスケジュールを作成する。

・実行計画書（アクションプラン）を作成する。

・グループ研究が思ったように進まない場合、まずは、計画や進捗状況、問題点等を確認する。

・テーマに沿った調査を行い、レポートをまとめるには、内容や手順を考え、調査、整理、執筆などを分けて予定を立てる。

・調査レポートを作成する場合、期限を考慮し、よいレポートを書くための作業プロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てる。

・進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正する。

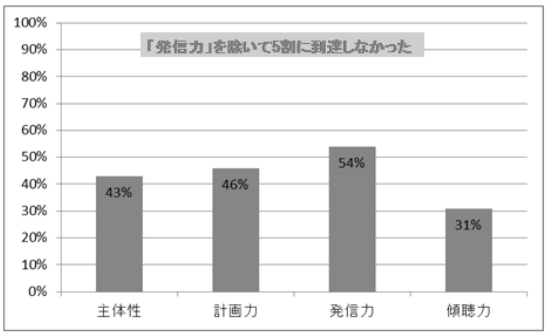
3、 プロジェクト活動の効果に関する考察

メンバー4 人の各能力要素の達成度を出すために、上記で掲げた 4 つの能力要素の各 7 つの項目について、それぞれ、7 項目に分け、それぞれ 5 段階で評価した。

できた「2 点」,少しできた「1.5 点」,やれた「1 点」,できなかった「0.5 点」,やってない 0 点

その結果をグラフにしたものが下記の図であり、残念ながら、「発信力」を除いて、いずれも 50 点に達しなかった。この点については、3 月までに作成する「調査報告書」を完成させるまでに、各能力要素を高めるよう指導している。

4つの能力要素達成率



4.本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

(1)プロジェクトの内容

メンバーの意見等を重視し、新しいテーマを見つけることと、「就業力（社会人基礎力）」のアップを今年度以上に高め、少なくとも 6 割程度の達成度を目標とする。

(2)プロジェクトの進め方

前半部分は、もう少し「文献研究」をしっかりやり、ある程度内容を理解したうえで実態調査を進めていきたい。

また、就業力の能力要素も、もう少し増やして進めたい。特に「チームで働く力」に重点を置いて進めていく方針である。

(3)プロジェクト運営の制度

従来通り、ゼミ単位で、ゼミの指導者の専門性を活かすテーマの発掘に努めたい。

iPad、iPhone で利用できるアプリケーション作成

今井正文

１．プロジェクト活動の内容

経営学部では全学年にiPadが無償貸与され、教材として使うだけでなく、レポート作成のための情報収集やゼミナールでのプレゼンテーション作成、就職活動などのあらゆる場面に利用されている。また無線 LAN 環境も完備されおり、学内どこからでもインターネットを利用することができる。本プロジェクトは、iPad の特性を活かした学習支援アプリの作成を行った。アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに、学習ツールとしての効率的な活用について考えながら活動した。

本プロジェクトは、iPadの特性を活かした学習支援アプリの作成を行い、アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに学習ツールとしての効率的な活用を考える事を目標として活動した。具体的には、授業での利用を目的とし、テスト問題の製作・配信、解答の機能を備え、学籍番号や名前等の項目表示、キーボード及び手書き文字入力、データベース接続（データ送受信）の機能を有する学習支援アプリの開発を行う事とした。制作方法や開発環境の検討ににいては、協力先企業様への企業見学で得た情報や協力先企業様から得たアドバイスを参考にした。なお、協力先企業は、株式会社 インターネットイニシアティブ名古屋支社と株式会社アイエスエルの 2 社様である。最終的には、2 チームに分かれて FileMaker、HTML+CSS+JavaScript、PhoneGap 等を用いて実際に学習支援アプリの制作を行う事を通して、チームによるアプリ開発の基礎を学ぶことができたと考えている。

２．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

社会人基礎力では、前に進む力、考える力、チームで働くことのできる力の3能力12分類の資質が取り上げられている．本プロジェクトでは、iPad の特性を活かした学習支援アプリの作成という制約から、実際にはどのようなアプリを作るのか、どのようにチーム分けするのかあるいは分担するのか、開発を実行するかという活動がある事から、3能力すべてが求められる

本プロジェクトでは、作成するアプリの機能について集約し、アプリ作成方法については学生個々のスキルや役割分担を含めての議論が必要になる。この段階では、考える力、チームで働くことのできる力が主に必要となる。スキル別、アプリ作成方法別にチーム分けしてからは、考える力、チームで働くことのできる力はもちろんであるが、さらに前に進む力が必須となる。協力企業との関係としては、情報提供、意見を貰うレベルから、外部である企業とのチーム作業までの発展が目標となる。

３．プロジェクト活動の効果に関する考察

本プロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる事とし、毎週のミーティング時間の調整と中間発表および成果発表等のスケジュール伝達以外は、特段の指導はせずにおいた。ただし、プロジェクト活動のための技術的な質問等があった場合や必要機材・試験環境については出来る限り対応した。見学時の各種の配慮やプロジェクト進行上必要となるライセンス購入、開発したコンテンツの iOS Developer Program のアカウント名義等については相談に応じ、支障の無いよう心がけた。

初期段階の作成するアプリの機能についてはブレーンストーミングや図形表現による意見集約法によって集約し、アプリ作成方法については学生個々のスキルや役割分担を含めての議論に時間をかけていた様子である。会議法については適宜ヒントを与えたが、この段階では、考える力、チームで働くことのできる力ともに様子をうかがいながら各自できていたように見えた。

初期の段階より、プロジェクト進行等も含めて学生に任せたため、作業分担から始まって、個別作業、チーム作業のスケジュールまで、全ての段階で遅延等、色々とあったようだが最終的にはチーム作業を出来ていた様子であったので学生の活動としては評価できると考えている。また、独自アプリケーション開発は 2 チームに分かれて作業していたが、それぞれのチームにおいて技術的な意味でも相応の学習効果もあったようである。プロジェクト本来のテーマから少し外れるが、メンタルタフネ

ス講座のボードゲームに用の簡単な計算プログラムページ等も同様にアプリにすることが出来ていた点等も評価できるものであると考えている。

以上の点については、学生の活動報告書や評価シートからも各自の達成度には違いがあるもののチームとしての活動はおよそ同様の前向きの評価をしているようである。一方、問題の発見や創造力、実行力では各自反省点を挙げている。これらの項目については、教員としては途中で思いはしたが各チーム作業に追われているようであったので意見収集の場の設定をする事をしなかったが、学生の活動報告から改めて振返ってみると、担当教員としては反省すべき点である。

対外的な評価については、協力企業からは学生の活動に対して一定の評価を頂けている様子であり、学生自身の印象も興味深いとの意見を頂いた。一方、対外的なスケジュール遅延等については、前に進む力に該当するがまだまだ改善点が多く見受けられる。また、協力企業との関係としては、外部である企業とのチーム作業まで発展できれば理想的であるが、情報提供、意見を貰うレベルから脱していない様子であった。学生のアプリケーション開発に関する知識的技術的な問題でもあるので仕方がない面もあるが、指導教員として今後の課題としたい。

プロジェクト専用アプリの使用に関しては、議事録とファイル管理については使いこなしていた様子であるが、チャットは他のアプリで代用しており、また、タスク管理についてはあまり使いこなせて無い様子であるので改善点としたい。

４．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

プロジェクト活動は、ジェネラルスキル養成の教育プログラムである一方で学生の動機づけの機会と考えているが、できる限り外的要因でなく内的要因を誘発するものになるよう配慮したいと考えている。そのためできる限り教員の関与を意識させないようにしているつもりであるが、関与度合いについては常に悩ましい部分である。

（1）プロジェクト内容について

プロジェクト内容については、上記理由により特定することなく行いたいと考えている。

（2）プロジェクトの進め方について

同様にプロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる方向で対応したい。教員の関与については議論の余地があり、今後も考慮しつつ運営したいと考える。

（3）プロジェクト運営の制度について

制度的なものについては特にない。あえて言えば、3年次の学生の動機づけと達成できる目標については、学生個々の知識的な問題もあり、一考の余地があるように思う。理想としては2年から4年あるいは各学生個々それぞれに実行可能なレベルがあるため、前後に導入的、実践的プロジェクト等があれば、さらなる効果があるように考えられる。

表　プロジェクトにおける体験項目

３つの能力	１２の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	◎　チーム開発では必須 ○　チーム開発では必須 ◎　アプリ開発では必須
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	○ ◎ ○
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性 情況把握力 規律性 ストレス･コントロール	○ ○ ◎　チーム開発では必須 ○ ○ ◎　開発では必須

（4）

社会人基礎力

３つの能力	１２の能力要素	
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	物事に進んで取り組む力 他人に働きか巻き込む力 目標を設定し確実に行動する力
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 新しい価値を生み出す力
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性	自分の意見をわかりやすく伝える力 相手の意見を丁寧に聴く力 意見の違いや立場の違いを理解する

		力
	情況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレス・コントロール	ストレスの発生源に対応する力

ヨシノパンプロジェクト

加藤　尚子

１．プロジェクト活動の内容

本学に設置されているヨシノパン自動販売機の売上向上に貢献するため、様々な活動を行った。具体的には、AIDMA モデルというモデルをもとに、Attention（注意）及び Interest（興味・関心）を向上させることで、売上向上に貢献する活動である。具体的な取り組み内容は以下のとおりである。

（１）プロジェクト活動開始に向けた活動

①事前調査（学内購買横にあるパン自販機の売れ行きを観察）

②活動内容に関するプレゼンテーション

学生らはプロジェクト対象となる企業に対し、活動協力を求めるため、よしのベイカリー株式会社代表取締役社長の鈴木雅晶氏に本プロジェクトについてのプレゼンテーションを行った（プレゼンテーションの結果、鈴木氏よりプロジェクト活動許可を得ることができた）。

（２）紙面掲示（３号分）に向けた活動

①紙面作成にあたっての複数回にわたるインタビュー

②学生へのアンケート

③パン作り体験（よしのベイカリー株式会社にて）

④紙面作成作業

⑤紙面掲示依頼（学内の３ヵ所：購買横、B14 教室横、D 棟２階の掲示板に掲示）

（３）Attention 及び Interest の変化をとらえる活動

①学内アンケートの実施

学内で学生に対してアンケートを配布した。アンケートは学生一人ひとりに手渡しをし、回答してもらう方法をとり、約 1300 名の学生（のべ人数）から回答を得ることができた。

②インタビューの実施

協力企業であるよしのベイカリー株式会社代表取締役社長鈴木氏へのインタビューにより、本プロジェクトの売上貢献について確認をした。

（４）結果及び考察

上述したアンケート及びインタビュー結果より、本学学生の学内パン自販機に対する購買行動に変化が見られ、本プロジェクトでの取り組みが売上向上に貢献できた可能性が考えられた。

２．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本プロジェクトにおいては、協力企業へのプレゼンテーション、インタビュー、紙面作成、のべ 1300 名にもおよぶ学生へのアンケート実施や分析等、多岐にわたる活動に学生たちは取り組んできた。これらの取り組みには社会人基礎力の３つの力である「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」が必要となる。例えば、学生へのアンケートは直接学生にアンケートを依頼し、回答をしてもらう形を取っている。この行動には「前に踏み出す力」の構成要素である「働きかけ力」、「チームで働く力」の構成要素である「発信力」（アンケート協力依頼）「傾聴力」（アンケート内容以外の生の声を聞く等）「情況把握力」（アンケートに協力してもらえる情況かどうか）「規律性」（依頼時には規律や礼儀が必要）、人によっては「ストレスコントロール力」（アンケート協力依頼，生の声を聞く等）も求められる。さらに 300 枚、500 枚といったアンケート分析に必要な回答枚数を決められた期間に実施するためには

「前に踏み出す力」の構成要素である「実行力」も必要となるのである。

３．プロジェクト活動の効果に関する考察

本プロジェクトでは、協力企業へのプレゼンテーション、インタビュー、紙面作成、のべ 1300 名にもおよぶ学生へのアンケート実施や分析等、多岐にわたる活動に学生たちは取り組んできた。

このような活動の中、学生それぞれがそれぞれの時期に力を伸ばす場面がみられた。例えば、ある学生は自分から何かをする姿勢が足りないところがあったが、プロジェクトが進むにつれ、「自ら動く」力を伸ばしてきた。また、ある学生は社会人基礎力の能力要素のうち「規律性」に欠けていたが、プロジェクトメンバーらでの活動報告書作成が上手くいかずに何度も修正がかけられていた場面において、「前に踏み出す力」を発揮し始めることができていた。

学生たちはお互いの行動を観察しながら、少しずつ自分の力を伸ばしていく力を持っている。ただし、その力を発揮しようと自らが立ち上がる場がなければ発揮しないまま過ごす学生もいるであろう。本プロジェクトは学生自らその力を出そうと頑張ることができる（あるいは頑張らなければならないと状況が思わせる）場であったと考えられる。

４．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

（1）プロジェクト内容について

本プロジェクトでは、協力企業へのプレゼンテーション、インタビュー、紙面作成、のべ 1300 名にもおよぶ学生へのアンケート実施や分析等、多岐にわたる活動に学生たちは取り組んできた。このような取り組みにより、学生自らその力を出そうと頑張ることができる（あるいは頑張らなければならないと状況が思わせる）場を実現できたと考えている。

（2）プロジェクトの進め方および運営制度について

プロジェクトの早い段階から ML を導入、また public フォルダを用いて情報共有を進めた。さらに、後半からは作業報告書を提出する形をとった。さらには当初計画に加え、プロジェクト活動日毎に作業計画書を作成する形をとった。しかし、プロジェクト開始時からこのような形式を採用していなかったため、PDCA サイクルの見直しを学生自ら行うまでには時間がかかったといえる。次年度は、この点について改善していきたい。

また、プロジェクト運営側から、PDCA の Plan の変更が行われたため、学生側にとっては予期せず自分たちの Plan 変更が求められることとなり、当初の計画通りに行かない場面が何度かみられた。この点については次年度改善を望みたい。

（3）社会人基礎力を発揮するには何が必要か

今回の活動を通じて、社会人基礎力の構成要素を発揮するには、「規律性」と「ストレスコントロール力」が大きな鍵となることがみえてきた。この点については次年度以降の課題としたい。

SOZO ショップ開店・運営プロジェクト

川戸　和英

１．プロジェクト活動の内容

本プロジェクトでは、豊橋市広小路の「コーヒー豆」を販売してきたSOZOショップを更新し、新たに店舗企画から開店・運営に携わることを目的として、昨年 4 月から取り組んだ。

SOZOショップを「学生たちが運営するショップ」にするためには、学生たちがそれまで全く体験したことのない「具体的な事業」に取り組むという高いハードルが課せられたことを意味した。そのために学生たちに求められたのは、マーケティングと店舗経営に関する理論と実際の学習、及び具体的な店舗企画を一から開始することの二本立ての取り組みであった。具体的な取り組みは下記のとおりである。

①理論学習：文献購読による知見蓄積

・D.シュルツ「統合マーケティング」
・F.コトラー「マーケティング 3.0」
・野口智雄「店舗戦略ハンドブック」
・P.F.ドラッカー「マネジメント」
・栗木　契「マーケティングコンセプトを問い直す」

＊理論研究は、店舗を企画・開店する際にその知見ベースとなる。店舗企画、運営、マーケティング、コンセプトを柱に学習

②基礎調査：

・商店街視察：
–平日・土日の状況、立地、環境
・ヒアリング調査・関係性構築
a.広小路商店街 1 丁目
b.広小路発展会連合会
c.愛知県商店街振興組合連合会
d.豊橋商工会議所
e.ほの国百貨店
f.御油どんぐり工房
g.豊川 NPO パルク
・全学学生アンケート調査実施：
–回収標本数；600、
－設問数；Q1(7),Q2(5),Q3(9),Q4(3)；大小 24 項目

③店舗企画：

・店舗内容：販売商品洗出し
・開催イベント
・仕入れ先洗出し
・店舗レイアウト
–ヒアリング先企業、団体からのアドバイスと閉店中の店舗を視察しつつ、具体案企画を進めた

④店舗広報計画：

・店名企画
・店舗スローガン
・広報ツール；看板、店内グッズ、広告、開店イベント、大学提携イベント
・スタッフ体制・連絡網整備

⑤店舗運営：共同経営者募集

・大学事務局と調整の上、売り上げに基づく一定の報酬を支払うことで、学生との共同経営者を募集する。
・条件的にはかなり苦しく、なかなかボランティア的に、かつ学生への指導ができる人材確保を目指すが、あと一息。

⑥付随事業：店内整理・清掃

・2013 年1月に実施
・電飾サインのデザインを店舗名変更に合わせ改訂予定

これらの取り組みにおいて、育成すべき学生たちの資質は、取り組み内容が広範にわたるため 3 つの能力と 12 の要素すべてに高水準の成果を収めなくてはならないことになる。しかも「学生の店」となるためには、学生たちの自立性が何よりも重要であり、教員としては、自分が主体となって進められないというジレンマを常に感じながら、粘り強く自主性を確立するための環境づくりに取り組んだ。

２．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

上述のように本プロジェクトは、学生たちに産業界から求められる資質のすべてを育成するには、実際は、学生たちにとってはかなり高いハードルが待ち受けていることでもある。

①社会人基礎力：

「学生の店」といっても、学生は社会人でなければならないことが当然である。この力がなくては店舗企画を進めることができない。個別に見てみると、まずは「前に踏み出す力」の３要素、主体性、働きかける力、実行力が、「学生の店」にするための基本中の基本となる。やるべきことは何かが、言われなくても議論の中から学生たちが組み立てられるようになることが求められる。

また就業力は、自ら就業する力なない限り「店舗企画・運営」は成り立たない。その力をプロジェクトというカリキュラムの中でどう養成してゆくのかは、相当難しいかだいである。

②職業観：

店舗企画・運営は、そして特に店舗企画は「考え抜く力」の課題発見力、計画力、創造力なしに成し得ない。一から店舗を立ち上げるには、豊かな考え抜く力を「粘り強く」持ち続けることが必要である。それでなくとも基礎力が圧倒的に不足している学生たちに取り組ませるには、より強い指導力が求められる。

またチームで働く力は、店舗に限らず、現在の学生たちに大きく不足している能力である。チームや外部の人たちの声をよく聞き、それを基にチームで店舗内容を構築するためには、チーム力が決め手となる。

３．プロジェクト活動の効果に関する考察

本年度は，メンバー４名に、夏休み直前に五味ゼミから1名の参加希望者があり、合計5名で取り組んだ。

とはいえ、5 名の学生とも、店舗企画をどのように進めるべきかが全く理解できておらず、理論学習＝文献購読と実際の企画・設計を指導教員の指導ものと、一から進めざるを得なかった。プロジェクト演習と専門ゼミナールをセットとして、精力的に取り組んだ。幸い本プロジェクトのメンバーは、積極性を十分持ち合わせていて、参加するよう促さずとも、また文献購読についても、教員から言われなくとも自主的に取り組むパワーを持っていたため、プロジェクトを重ねるうちに次第に能力を身に着けることができたといえる。開店告知ポスターの企画に取り組んだ時も、モチベーションが高められたこともあって、想像以上の力作を作り上げることができた。

そして、店舗概要が見えてくるに従って、学生たちを、を店長、総務・経理、仕入れ、マネジメント、広報の５つの業務担当に振り分けてから、各自の遂行すべき任務について、自覚とモチベーションが高まっていった。学生たちの所見を見ても、最初は何をどうしていいかわからなかったものが、次第にメンバーの性格や役割を見ながら、自らの進めることを自覚していったように思われる。

更に、学生たちに刺激となったのが、商工会議所はじめ、連携先の実業者たちとの接触であり、このことも実社会の風に触れることができ、モチベーション向上に寄与することができたといえる。

とはいえ、一口に店舗といっても、まだわからないことが多く、夫々の活動について、順序立てて計画を立てたり、夫々の計画立案をどう進めるかについて積極的に課題を抽出したりということはなかなか進んでいないのが実情である。やるべきことは何か、その次は何をやるのかを計画し実行に移すには、まだまだ訓練が必要だと思われる。

４．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

本プロジェクト活動は，ジェネラルスキル養成の教育プログラムであるだけでなく、店舗の企画・運営というきわめて実践的な能力を養成しないと進めることができないプロジェクトでもある. これらの観点から，各プロジェクトを考察した結果を踏まえて，改善点や来年度の課題、そのための提言などを提起してみる。

（1）プロジェクト内容について

本プロジェクトは，ビジネス実践のプロジェクトである。現在３月開店に向けて店舗設計が大詰めを迎えていている。

来年度は開店した店舗の円滑な運営体制を確立するとともに、当初の店舗から更に発展させる課題が、プロジェクト実践の柱となる。

ショップは、金、土、日の3日間営業で、地元の食品販売と、試食コーナー併設、及び不定期なイベントなどを織り込んだ「人の集まるスペース」を目指している。その店舗の売り上げと品揃えの拡大、イベント開発など、常に発展させていく必要がある。従って、それらの課題に取り組むために、来年度の4年生と新たな3年生の協力が必要となる。

（2）プロジェクトの進め方について

新3年生には店舗運営のための理論学習と実行能力養成がまず求められる。言い換えれば、まずは社会人基礎力と就業力を向上させることである。

4 年生については、店舗運営円滑に進め、さらなる店舗発展のための計画力、創造力、傾聴力、状況把握力、柔軟性が求められる。折しも就活時期でもあり、就活にこのプロジェクト体験が生かせればと期待している。

（3）プロジェクト運営の制度について

このように、SOZO ショッププロジェクトは、3年生と4年生の協力体制を築くことが最大の課題となる。そのためには、営業中の店舗で担当業務を有効にシェアして、3年生も4年生もそれぞれが3つの力と 12 の要素を向上させるような制度を構築する必要がある。役割分担をどう進めるかがカギとなろう。

豊橋エコタウンプロジェクト
～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～

見目喜重

１．プロジェクト活動の内容

太陽光発電の大量普及とともに、システムの長期信頼性が問題となっている。本プロジェクトでは、豊橋市内小中学校に設置されたシステムの稼働状況を調査し、故障の有無、年間発電量を調べることで、システムの長期信頼性評価の基礎となる情報を収集する。また、環境教育の現状を聞き取り調査し、各校に設置された太陽光発電システムを活用した環境教育コンテンツの開発を検討するための基本情報とする。

一連の活動を通して、就業力を育成するとともに、エネルギー・環境問題に関する基礎知識を習得する。また、現場を見ることにより、自身のエネルギー・環境問題への認識を深める。

プロジェクトの実施にあたっては、以下のような作業を行う必要がある。

・豊橋市教育委員会への調査実施の依頼
・各小中学校への調査実施の依頼
・訪問調査の担当校の分担
・日程調整
　（電話により、担当者と日時を調整）
・調査項目の検討
・訪問調査の実施
・各小中学校への調査協力のお礼（お礼状の送付）
・調査情報のとりまとめと分析
・報告書の作成
・調査結果の報告（豊橋市教育委員会）

なお、本プロジェクトは前年度からの継続プロジェクトである。

２．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本事業では、社会人基礎力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）の育成が求められている。

これらの力の育成に対して、本プロジェクトでは次のような効果を想定している。

(1)　前に踏み出す力

各自が調査分担校と日程調整を行い、訪問調査を実施することで、主体性・実行力を育成する。

(2)　考え抜く力

訪問調査の結果から、現状とその問題点を考察することで、課題発見力と創造力を育成する。

また、調査校の予定、各自の受講スケジュール、プロジェクトのスケジュールを念頭に入れて、効率的に訪問調査を実施しなければならない。このことから、計画力を育成する。

(3)　チームで働く力

各小中学校の担当者によって太陽光発電システムに関する知識は大きく異なる。こうした状況で、調査の際に自分が何を聞きたいのかを相手にわかりやすく伝える必要が重要である。ここでは、発信力が必要となる。また、相手の意見を丁寧に聞き出すことにより、傾聴力を育成する。

訪問調査の実施にあたっては、決められた日時に訪問することは絶対である。また、調査結果のとりまとめ、報告書の作成などグループでの作業には、やはり日時を決めて作業を協働で進める必要がある。こうした活動を通し、規律性が育成できる。

これまでに実際に自身で日程調整をし、また訪問を行うという行動をしたことがない学生にとって、これらの作業を行うことは非常に大きなストレスである。こうしたことから、ストレスコントロールが育成できる。

３．プロジェクト活動の効果に関する考察

本年度は、市内小中学校の全 74 校を訪問し調査を実施した。これにより、実行力、主体性、計画力の育成には効果があったのではないかと思われる。

また、訪問調査によって計画していた情報を収集で

きており、こうした結果を見ると発信力・傾聴力の育成にもそれなりの寄与があったと思われる。

さらに、訪問調査にあたり、日程調整の困難さ、訪問時の様々なプレッシャーを経験したことで、ストレスコントロールの育成も行えたと思われる。

一方で、得られた情報の十分な分析は行えていない。より高度・専門的な分析を大学生としては求められるべきであるが、そのための基礎知識や実施時間に十分な余裕をとることができなかった。こうしたことから、課題発見力、創造力については十分に育成することができなかったように思われる。

また、規律性については、例えば訪問調査ではしっかりと守られたとしても、日常生活にそれが反映されているとは必ずしも言い切れない。学生が状況に合わせて使い分ける面があり、そうした意味では必ずしも身についているとは言い難い。

４．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

本事業は、学生の就業力を大学教育だけではなく、地域（企業）の協力を得ながら育成することを目的としている。しかし、地域からの協力を得るためには、その前提条件として、地域社会に貢献し、信頼関係を築くことが必要である。

大学の地域貢献は、本来は、地域への文化の発信（研究、教育、その他の活動）、人材の育成・輩出である。一方で、必ずしも良いことではないが、地域はまずは無償の労働力を求めているという現実もある。

こうしたことから、次年度以降の本事業のあり方について、以下のようなことを検討課題としてあげた。

(1)　プロジェクトへの取組姿勢

プロジェクトの計画･実施にあたっては､地域貢献、地域からの信頼を得ることを念頭に活動する。信頼がなければ、地域社会の協力は得られない。

(2)　プロジェクトの継続性

継続を念頭に、プロジェクト活動を立案・計画・実践する。折角構築した協力関係を維持できなければ、信頼も失う。

そのためには、上位学年と下位学年との交流が不可欠である。この交流によって、学生主導でプロジェクトを進めることも実現できる。

(3)　プロジェクトのテーマ設定

地域の協力を得るには、地域のニーズと本学（学部）の強みが上手くマッチするテーマを探し出すことも重要である。すなわち、本学部の強みである「経営学の基礎」と「ICT の活用」が結びつくようなテーマを探し出すことが重要である。

しかしながら、これは非常にむず開始ことである。

そのため、いろいろなテーマを設定して活動し、上手くマッチングしたら、そのテーマを継続するということも必要である。

また、イベント参加型のプロジェクトもある程度必要であると思われる。当初はボランティア化する恐れもあるが、活動を続けることで、ボランティアからの脱皮を図る。テーマによっては、学部の枠組みを超えたプロジェクトへの発展も考えられる。

(4)　プロジェクトの実施体制

プロジェクトのテーマの継続性という観点からは専門ゼミナール主体が望まれる。上位学年と下位学年との交流をよりスムーズに行うことが期待できるためである。

一方で、イベント参加型のプロジェクトや、プロジェクトの発展性を考えると、専門ゼミナールの枠組みを超えた組織での活動も考えられる。

(5)　本プロジェクトの次年度以降の取組

本プロジェクトは、長期的には研究成果の発信という形での社会貢献を目指している。また、環境教育コンテンツが構築できれば、地元小中学校の教育活動への貢献という形で、より近い地域貢献を実現できる。

これまでの 2 年間の活動を通して、いくつかの小中学校とは意見交換がスムーズに行える環境を構築できている。

次年度以降も継続して取り組み、関係を深めることでより大きな目標の実現に向けて進める予定である。

表 1　プロジェクトにおける体験項目

3 つの能力	12 の 能力要素	プロジェクト実施に 必要な能力
前に踏み 出す力	主体性 働きかけ力 実行力	◎ 〇 ◎
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	◎ ◎ ◎
チームで 働く力	発信力 傾聴力 柔軟性 情況把握力 規律性 ストレス・ コントロール	◎ ◎ 〇 〇 ◎ ◎

診療情報管理士認定試験の学習環境構築 2012

五味　悠一郎

1．プロジェクト活動の内容

診療情報管理士認定試験（以下、認定試験）合格を目的に、学内を対象とした自主勉強会の企画運営、学内外を対象とした診療情報管理士認定試験対策講座（以下、対策講座）の企画運営および宣伝活動、診療情報管理士のデジタル問題集の作成を行なった。

昨年度との大きな違いは、以下の通りである。

1）自主勉強会の企画運営

共同学習による効果をねらい、一昨年度まで実施していたが、昨年度は学内受験者が2名と少なかったため共同学習による効果があまり期待できず、学生と相談の上実施しなかった。今年度は学内受験者が5名となり、共同学習による効果が期待できたので、学生と相談の上実施することとした。

2）対策講座の企画運営および宣伝活動

昨年度は、講師や学外受講者との連絡や調整を担当教員が行ったが、今年度は学生と相談の上、学生が行うこととした。学生指導やフォローアップのため、学外に公開するメールアドレスはメーリングリストを用いて送受信内容を共有できるようにした。FAX についても、受信 FAX が PDF 形式でメール配信されるサービスを利用し、メーリングリストに配信されるようにすることで、共有できるようにした。

近隣で関連学会が開催されていたため、昨年度のプロジェクト内容を報告し、学会参加者との意見交換や宣伝活動も行った。

運営費（講師費用等）に充てていた補助金が昨年度で終了したため、今年度から参加費を受講者から徴収し、運営費に充てることにした。プロジェクトメンバーのモチベーション向上や学内受講者の費用負担軽減を目的に、学外受講者の参加費合計が運営費を上回った場合は、学内受講者の参加費を無料とする枠組みも構築した。

3）診療情報管理士のデジタル問題集の作成

作問学習による効果をねらい、学生と相談の上、診療情報管理士のデジタル問題集を作成することにした。ベースとなるアプリケーションを学生が企画・開発・運営するのは困難であったため、企画・開発・運営は担当教員が担当し、学生はコンテンツ作りを担当することになった。作問へのモチベーションや地域貢献、運営費用、問題数の確保、著作権問題の回避、診療情報管理士の学習環境の確保などの面から、1 問作問する事に1回模擬試験が受けられ、学外の人も無償で利用できるブレンディッドラーニングも視野に入れた CBT システムとした。

2．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本プロジェクトでは、学生の就業力および社会人基礎力養成という大きな目標を達成するため、「主体性」「社会人スキル」「メンタルタフネス」を育む指導を行った。また、大学の存在意義の一つである「地域貢献」が行え、本学が抱える課題の一つである「知名度の向上」も可能な内容とした。具体的には、以下の通りである。

1）主体性

プロジェクトのテーマをプロジェクトメンバー自身に考えさせるようにした。時間的な制約上、一から考えさせることは困

難であったので、教員側でテーマを五つ用意し、プロジェクトメンバーに選ばせた。テーマはプロジェクトメンバーのメリットにもなるものとし、モチベーションが高まるようにした。例えば、プロジェクトメンバーが認定試験に合格することを目標としていたため、合格率の向上にも繋がる対策講座の実施を内容に取り入れた。

プロジェクト運営中は適宜必要なキーワードを与え、具体的な内容はプロジェクトメンバー自身に考えさせるようにした。また、学内の教職員をプロジェクトメンバーに紹介することで、プロジェクトメンバーが学内で主体的に動ける環境を構築した。

2） 社会人スキル

対外的な文章の書き方や連絡の取り方、イベントの企画運営方法、報連相などを、プロジェクト運営を通して自然と見に付けられるような指導を行った。また、プロジェクトがPDCAに則って行われているかも、適宜確認した。

3） メンタルタフネス

学生のメンタルタフネス育成には、成功体験と失敗後のリカバリー体験が有効であると考えている。教員が提示した課題は地道に行えば必ず成功するものとし、プロジェクトメンバーが考えた課題は失敗する流れであってもしばらく様子をみて、大きな失敗になる前にフォローするようにした。

4） 地域貢献

連携先団体にもメリットがある内容とした。例えば、対策講座や「診療情報管理士のデジタル問題集」を学外に公開することで、地域のニーズに応えられるようにした。

5） 知名度の向上

大学の知名度を向上させる内容を取り入れた。例えば、近隣の医療機関に対策講座の案内を発送し、インターネットのWebサイトやブログで告知することで、診療情報管理士に興味がある人達に、本学を知ってもらえるようにした。「診療情報管理士のデジタル問題集」も、診療情報管理士関連 ML や学会で宣伝活動を行った。

3．プロジェクト活動の効果に関する考察

プロジェクトメンバーは昨年度よりも増えたものの、新たな取り組みが増えたことから、各プロジェクトメンバーの負担も大きかったようであるが、プロジェクトの終盤では期待以上の働きをしてくれるようになった。

プロジェクト活動成果発表会は、残念ながら表彰されなかった。本プロジェクトは認定試験の合格発表が行なわれる3月末まで実施されるため、プレゼン資料にあまり力を入れる余裕が無かったこと、発表会の評価基準が不明瞭であったため専門性の高い取組みが評価されにくかったことなどが要因として考えられる。プロジェクト演習という授業の目的は、成果発表会の評価ではないことをプロジェクトメンバーに正しく理解させ、社会人に必要なスキルを高める指導を今後も継続して行っていきたい。

対策講座の学外受講者は18名程度と、知名度を向上させ、地域貢献することもできた。今年度から参加費（全15回の講座で2万円）を徴収して運営費に充てることとしたため、昨年度より学外受講者が減ることが予想されたが、プロジェクトメンバーの頑張りにより、昨年度と同程度の学外受講者を集めることができた。一般的に、大学の教育目的で実施するプロジェクトは連携団体の負担が大きく、WIN-WIN の関係をつくれないことが多いが、本プロジェクトにおいては WIN-WIN の関係が構築できたと評価できる。九州地方や中国四国地方からも受講者を集めることができたのは、大きな収穫であった。

昨年度のプロジェクトの成果を、昨年度のプロジェクトメンバーである学生が日本診療情報

管理学会で発表したところ、学会参加者から多くの問い合わせがあり、新たな繋がりも生まれた。発表学生のモチベーションも高まったようである。

本プロジェクトは、3月末に行われる認定試験の合格発表後、受講生にアンケートを実施し、集計・検証を行って終了となる。本報告には間に合わないので、本プロジェクトの成果は今後も学会等で広く伝えていく予定である。

4．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

他のプロジェクトに参加しているゼミ生がいたので、専門ゼミナールおよびプロジェクト演習の運営に支障がない様に、他のプロジェクトを運営している教員と実施時間などの調整を行った。専門ゼミナールとプロジェクト演習の線引きや、プロジェクト演習の運営体制（テーマありきか教員ありきか、ゼミ単位なのか、主目的は何か、地域のニーズと学生の主体性のどちらが優先か、など）を早急に決める必要がある。

プロジェクト演習を進める中で、大学側都合で何度か計画が変更になり、PDCA について学生を混乱させる場面が多々生じた。次年度以降は全体的な Plan は変更しないでいただきたい。

プロジェクト自体は良い取組みであるが、経営学部には診療情報管理士関連のカリキュラムが無いため、今年度をもって終了する。

田原のウィンドファーム――社会的企業の実証研究

中野 聡

１．プロジェクト活動の内容

田原市の風力発電の現況と将来について調べる。特に、風力発電システムの電力供給に関して考察し、そのメリットとディメリットを検討する。その際、① 震災と原発事故に繋げる、② 世界に繋げる、③ 丁寧なコストベネフィット分析を目標に据えた。

今年は、テーマ設定からリサーチプランの作成まで、できるだけ多くを学生に委ねた。結果として、試行錯誤の連続となった。テーマに関しては、トヨタの環境技術から有楽製菓の企業インタビューへ変遷した後、このテーマにに落ち着いた。枠組みの作成やリサーチの組織に際しても、助言だけではなく、担当教員が手を加えるケースが多くなった。

２．育成すべき資質への教育効果

学生が、共同作業を通して学ぶことをそれなりに楽しんでいた点が良いと思う。田原市役所の人々が丁寧に対応して下さったこともあり、時間が経つにつれ、自分たちで自然に作業を行う傾向が見られるようになった。こうした活動は、確かにこれまでの教育に欠けていた点かと思う。

３−４．効果に関する考察と次年度以降の進め方

① 学生が日ごろから新聞などに接していないため、情報のインプットに欠ける。結果として、枠組みの設定や個別リサーチテーマの特定が、自立的に進んで行かない。

② グループ作業のため、参加者(4 人)全員の関心が一致するテーマを選択することが困難。関心のない学生には、初めから妥協を強いることになる。

③ われわれのゼミでは、今年はプロジェクト演習とゼミナールを分離す形式に変更した。ゼミナールの時間がプロジェクト演習に援用される場合、個人作業ベースの専門科目の学習時間が大方消失してしまう。大半の学生にとっては構わないかも知れないが、知的好奇心と創造性のある少数の学生には、大きなマイナスとなるかも知れない。

④ プロジェクト組織は多様で良いと思うが、学部 3 年次での設定にもかかわらず、社会科学のリサーチの基礎を学ぶ形態からは程遠い。つまり、対外折衝に重心が置かれ過ぎている。

⑤ 上記④に関係して、昨年から違和感を感じているのだが、異なる目的と方法を用いた活動(そうなるよう奨励すべきだが)の成果を投票で選ぶのは、民主主義ではなく、衆愚主義だと思う。良いライバルリーの存在は学生を伸ばすが、競争主義的な教育方法には賛成しない。

プロジェクトを、その内容と方法によりカテゴリー化し、複数教員が指導すれば、学生の希望の反映と減少する学生数への双方に対処できると思う。14 年度までに、新たな枠組みを工夫する必要がある。

豊橋からオレオレ詐欺をブッ飛ばせ！！

野口　倫央

1．プロジェクト概要

野口ゼミナールでは，大学が位置する豊橋市への地域貢献を行うことを目的として活動を開始した。まず，豊橋市の特徴を調べてみたところ，前期高齢者と後期高齢者を合わした高齢者割合が，愛知県で3番目に高いことが明らかになった。次いで，豊橋市に在住する高齢者のために何が出来るか検討した。インターネットを中心として，種々の社会的な問題を列挙し，検討したところ，近年オレオレ詐欺が増加傾向であり，かつその検挙率が低下していることが明らかになった。そこで，活動の実現可能性等も踏まえ，豊橋市からオレオレ詐欺を撲滅することをプロジェクトの目的とした。

2．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

豊橋創造大学が取り組むプロジェクト活動の目的は，メンタル面・スキル面の強さを備えた職業人育成であった。これが何を意味するか検討した結果，野口ゼミナールでは，「社会人に不可欠な能力の具備」と結論付けた。加えて，社会で求められることは何かという検討を重ねた結果，『社会貢献能力』を養うことを野口プロジェクトの意図とした。

さらにプロジェクトの実施に際して，重視したことは，ゼミ生の自主性を育成することであった。そのため，教員としての介入をできる限り避けようと注意した。教員の活動になってはいけないからである。

そのため，紆余曲折は所与のものとして受け入れていた。しかしながら，活動当初は特に，ゼミ生に過度に多くの意見や指導を求められるなどした。その際は，ゼミ内で話し合いを持ち，その時の司会をゼミ生で順番に回すなどした。

3．プロジェクト活動の効果に関する考察

プロジェクトのテーマ選定に始まり，12月の活動報告に至るまでにおいて，ゼミ生は大きく成長した。当初は，教員に助けを求めることが非常に多かった。たとえば，テーマ選定や豊橋信用金庫様とのアポイントを採る際は，教員が多く介入せざるを得なかった。

しかしながら，夏以降，特に 10 月あたりから老人クラブを訪問するようになってからは，成長が顕著に見られた。ある老人クラブに訪問し，そこで別の老人クラブの訪問日を自身で決めてきたり，老人クラブの代表者の連絡先を教えてもらい，自ら訪問するなど，積極性が生まれた。

プロジェクト活動報告についても，スライドに工夫を凝らしたり，発表の練習を何度もするなど，努力を積み重ねることができたことは評価に値する。

4．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

本年度のプロジェクトの結果，明らかになった問題点に，「責任と役割の極度な集中」を挙げることができる。すなわち，3 人のゼミ生による活動であったため，各自が責任感を持ち，それぞれ役割分担を行って活動を行う必要があった。しかしながら，実際には，一人の優秀な学生に依存という傾向が時折観察された。当初から責任と役割が特定のゼミ生に集中することは予想されていた。その中で，役割を分担するなどの対策は採ったが，最終的な責任と役割は常にその特定のゼミ生に帰属していたように思われる。

原因は，個人の能力がかけ離れていたこと，および過度に少人数のプロジェクト活動であったことにあると思われる。良くも悪くも，ゼミ内におけるゼミ生の能力が近ければ，このような問題

は起きないし，メンバーが多ければこのような問題は起きづらいと考えられる。そのため，プロジェクトをどの単位(ゼミ単位もしくは全く別のグループを組織するかなど)で行うかについての再考が必要であるかと思われる。

加えて，もう 1 点問題を挙げるとすれば，プロジェクトにアカデミックの要素が少なかった点にある。これは大学教育という観点からすれば問題として捉えるべきである。これについては，次年度以降テーマ選定の段階から考慮したい。

豊橋トップインタビュープ 2012 プロジェクト

三好哲也

１．プロジェクト活動の内容

本プロジェクトでは，豊橋にある企業のトップに経営方針や経営ビジョンをインタビューしそれをＷＥＢページまとめることを目的としている．企業が求める人材についても合わせて伺い，自らの就業に対する考え方をまとめる．トップインタビューを行うために，以下の作業をメンバーと分担して処理しなければならない．

- 訪問企業の選定
- インタビューの依頼とその可否の確認（手紙，メール，電話による調整）
- 日程調整（手紙，メール，電話による調整）
- インタビュー内容の検討・企業についての調査
- インタビュー当日の準備（持参物や役割分担など）
- インタビュー協力のお礼
- 写真，記録，音声データの整理
- 報告書の作成（用紙とＷＥＢ）
- 校閲依頼
- 全体のスケジュール管理
- 業務分担の決定と日程調整

これらの処理をインタビュー対象ごとに効率よく，メンバーで話し合いながら進めなければならない．

２．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本補助事業は，産業界から求められる資質として社会人基礎力に代表されるジェネラルスキル（総合力）を取り上げている．本プロジェクトでのどのような場面や業務の中で，これらの資質養成がなされているか考察する．

社会人基礎力では，前に進む力，考える力，チームで働くことのできる力の３能力 12 分類の資質が取り上げられている．本プロジェクトでは１節にまとめたように，インタビュー対象の決定やインタビュー内容の決定などの計画部分では，「考えぬく力」と「チームで働く力」が求められる．また，計画が策定され後にそれをこなすために，「前に踏み出す力」と「チームで働く力」が求められる．作業の困難性や複雑性によって，対処方法をチームで共有しながら進めなければならない．

本プロジェクトでは，事業の企画やインタビュー遂行にあたって対立するような意見は少なく，それぞれが役割分担してその役割を十分果たすことが多い，役割分担を決めた後の活動では，各自が分担する作業を責任持って行うことが，全体のプロジェクト推進につながる．そのため，「働きかけ力」，他者との意見調整ができる「柔軟性」などについては，他の能力に比べてそれほど高度に求められることは少ない．ただし，実際のインタビューでは，それぞれの役割を踏まえて，インタビューアのフォローアップやインタビューの流れを理解した対応が必要であり，「働きかけ力」や「柔軟性」を意識する場面も多い．また，プロジェクトの内容がインタビューであるため，傾聴力は，必須であり，聞いた内容を整理しながら傾聴し，随時レスポンスが必要である．このことも繰り返しながら養成できる．

企業選定などの時間が掛かるために，インタビュー活動は 9 月以降に実施される．そのため，複数のインタビューの準備が，重複することもあり，スケジュール管理を確実に行い，準備処理を進めなければならい．なれない作業が多く，また，企業人との対応が必要である，学生にとってはストレスを感じる作業が続くが，継続して繰り返し活動することにより，対処方法を体得できるようである．このように，インタビューを複数回（5 回）のインタビューを計画して実施し，それを取りまとめる活動では，社会人基礎力のすべてを発揮する場面が多く繰り返して含まれている．そのため，プロジェクトへ積極的に参加すれば，そのような場面に遭遇して体験できることになっている．

３．プロジェクト活動の効果に関する考察

本年度は，メンバーが 1 名であり．指導教員とのミーティングで，実行計画を策定し実施した．マンパワーの不足のため，５つの企業のインタビューを計画指定いたが，3 回のインタビューを行った．インタビューには昨年度経験した 4 年生の協力を得た．ワルツ株式会社のインタビューでは４年生の都合により協力者が１名のために，教員もインタビューに付き添うことになった．メンバーが 1 名であったため，すべての活動を 1 名の学生で処理を行った．学生の繰り返しいろいろな業務に接すること

ができたため，企業で就業において最低必要とされる能力について，理解できたと思われる．

「前に踏み出す力」を養成できたかについて考察する．他のメンバがいないために，先輩の情報を元に自ら計画，実行する環境であったため，主体的にせざるを得ない環境であり，学生にとっては，体験的に学習ができたと思われる．その中で，メンバー不足のため，働きかけ力については，先輩への依頼などを除いて，不足していたと思われる．

「考えぬく力」を養成できたかについて考察する．活動目的や活動内容を学生自身に実行させたが，本プロジェクトは昨年度のプロジェクトの継続であるため，前年を参考に進めたところも多く，その意味で「課題発見力」の養成においては，体験する部分が少なかったかもしれない．計画力，創造力では，新しい自ら興味を持てる企業を選好する作業においては，種々の情報収集から意思決定していたようなので，一定の経験はできたのではないかと思われる．

「チームで働く力」を養成できたかについて考察する．先にも述べたようにメンバーが少なく，グループ内での協議する場面が少なく，また，ミーティングでは，教員と１対１の場合が多く，学生自身が他者との協調の中で意思決定や意見調整をする場面が少ない状況であった．そのため，教員に依存する場面も多く，学生自身が主体的に取り込みにくい環境であったと思われる．インタビューを行う中で，他者の意見を傾聴する場面は多く，その傾聴内容に即して質問もせざるを得ないので，発信力や傾聴力など，緊張した状況で行うことも多く，一定の経験はできていると思われる．また，規律性や，ストレスコントロールについての経験も踏まえている．ただし，メンバー間の協議など仲間と意見を調整する場面は少なく，この点は運営方法などを含めて改善すべきである．

４．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

プロジェクト活動は，ジェネラルスキル養成の教育プログラムである．併せて専門教育への導入などの位置づけにもされているプロジェクトもある．これらの観点から，各プロジェクトを考察した結果を踏まえて，運営方法や指導方法の改善点や改良点について考察する．

（1）プロジェクト内容について

前節で考察したように，本プロジェクトは，ビジネス社会で対処すべき事項が多く含まれている．学生が直接企業にコンタクトする場面も含まれており，養成しようとする社会人基礎力の要素能力の育成の場面も多い．学生の希望があれば，継続的して実施する．

（2）プロジェクトの進め方について

メンバーが極端に少ないと，すべての作業を１人で処理しなければならず，学生の負担が増加する．学生の対応力によっては，インタビューの回数が減少する可能性もある．また，他者との調整や意見交換が行えないので，本プロジェクトを実施する場合は一定人数の参加者を確保が必要である．

（3）参加メンバーの対応力

地元有力企業へ直接学生が接する機会であり，キャリア教育の意味でも重要である．一方で，企業の大学のイメージを直接決めかね無い状況が考えられるので，対応出来る学生を選出してインタビューを実施する必要がある．

以上のように，運営上の対応について考察した．

表　プロジェクトにおける体験項目

３つの能力	１２の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	◎ 〇 ◎
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	△　作業手順は事前にわかっている ◎ ◎
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性 情況把握力 規律性 ストレス・コントロール	◎　インタビューでは必須 ◎　インタビューでは必須 〇 〇 ◎ ◎　作業が混みあった時の対象方法

のんほいパーク盛り上げ隊プロジェクト

三輪　多恵子

１．プロジェクト活動の内容

本プロジェクトでは、豊橋総合動植物公園（通称のんほいパーク）について、主に Web を通じて様々な情報を発信することで、活性化を図る目的で活動を行った。

のんほいパークは、日本でも珍しい市営の動植物公園である。パークには自然史博物館や遊園地等が併設されている他、駐車場が無料、入場料が安価（大人 600 円）、等の優位な点が数多くあるにも関わらず、知名度が低く、地味な印象を受ける施設である。

プロジェクトメンバー同士で意見を出し合い、「どのような情報を発信すれば、パークに興味を持ってもらえるか」という観点で活動を開始し、その後、「Web でこのような情報を発信すれば、来園者にとって便利ではないか？」という形に発想を広げ、近隣の飲食店を含めた大規模な取組へと発展した。

具体的な活動は、以下の通りである。また、表１に本プロジェクトの全体スケジュールを示す。

（1）関連情報の収集

国内には数多くの動物園があり、それらの施設がどのような情報を発信しているか、主に Web サイトを中心に調査を行った。その後、「のんほいパークの Web サイトに足りない情報は何か」等を議論し、後述の Web サイトの設計を行った。

（2）施設見学・事前準備

パークの方へ本プロジェクトの主旨を説明すると共に、パーク内の施設や動物の展示方法等について事前調査を行った。調査後に、積極的に外部に発信すべき点、情報発信の頻度、などの今後の活動の方針を決定した。

（3）Web サイトの開設

「見て楽しい」「見ておくと便利」をコンセプトとして、Web サイトの設計・開設を行った。主なターゲットを“子供のいる若い母親”に設定し、イラストや写真を多用して、見る人を楽しませることのできるサイトを目指してデザインを行った。

（4）インタビュー

Web で発信する情報の収集を目的として、以下の方々へのインタビューを行った。

表１　全体スケジュール

	内　容	
5 月	・計画 ・情報収集（Web）	
6 月	・施設見学（27,28 日）	Web サイト 計画・設計
7 月	・インタビュー計画	作成
8 月	・飼育担当者インタビュー①② （ﾊﾞｰﾄﾞｴﾘｱ，極地ｴﾘｱ） ・みどりの協会インタビュー① （売店、ｵﾘｼﾞﾅﾙ商品、等） ・近隣店舗インタビュー① （うどん勢川） ※※　中間報告会　※※	更新 ↓ ↓ ↓
9 月	・シール制作 ・パネル制作　　⇒　学園祭準備 ・写真展準備	↓
10 月	・飼育担当者インタビュー③ （なかよし牧場） ・近隣店舗インタビュー②③④⑤ （Loquat、福ちゃん、ぼてこ、 うずらﾌﾟﾘﾝ） ・学園祭における広報活動	↓ ↓ ↓
11 月	・飼育担当者インタビュー④ （郷土の動物） ・みどりの協会インタビュー② （売店、ｵﾘｼﾞﾅﾙ商品、等） ・近隣店舗インタビュー⑥ （サークルK）	↓ ↓ ↓
12 月	※※　成果報告会　※※	↓
1 月		↓

①　飼育担当者

動物の裏話、活動時間帯、等の「来園前に知っておくと、より楽しい情報」を収集。

②　みどりの協会（売店運営）

パーク内売店で取り扱っているオリジナル商品、売れ筋商品、等の情報を収集。

③　近隣飲食店

近隣の飲食店について、駐車場の有無、お勧めメニュー、等の情報を収集。

④　コンビニエンスストア

近隣のコンビニ（前売り券を発売している場所）について、情報を収集。

（5）その他の広報活動

学園祭において、パネル展示、写真展示、チラシ配布、等の広報活動を行った。

これらの活動を通して、主に以下の項目について理解を深めるとともに、コンテンツ制作のための様々な知識・技術を習得することとした。

- タスク管理、スケジュール管理
- 共同作業、役割分担、計画
- インタビュー内容の検討、事前調査
- Web サイトの設計、作成、管理
- イラスト、写真素材の作成

２．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本補助事業は、産業界から求められる資質として、社会人基礎力に代表されるジェネラルスキル（総合力）を取り上げている。本プロジェクトにおける活動の場面で、どのように資質が養成されるかを、以下に説明する。

社会人基礎力では、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力、の 3 能力）（12 分類）の資質が取り上げられている。本プロジェクトでは、既に一定の広報活動がなされている“のんほいパーク”について、他施設の Web サイト等と比較することで、不足している情報、広報活動の課題点等を見つけ出し、その改善に向けて取り組むことから、『考え抜く力――特に“課題発見力”、“創造力”』が必要となる。

表２　プロジェクトにおける体験項目

3 つの能力	12 の能力要素	ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性	◎物事に進んで取り組む
	働きかけ力	○
	実行力	◎目標を設定し実現する
考えぬく力	課題発見力	◎現状を分析し、問題点を発見
	計画力	◎具体的な計画立案
	創造力	◎課題解決策を見つける
チームで働く力	発信力	◎インタビュー
	傾聴力	◎インタビュー
	柔軟性	○
	状況把握力	◎作業全体の状況を把握する
	規律性	◎連絡・報告・記録を遂行する
	ｽﾄﾚｽ･ｺﾝﾄﾛｰﾙ	○

また、情報発信のためのコンテンツ制作においては、各学生の技術力に依存する部分が多いため、計画の具体化・実現に向けては、『チームで働く力――“状況把握力”、“規律性”』、『前に踏み出す力――“主体性”』が必要である。さらに、継続的な Web サイトの運営や、定期的な情報発信のためには、『考え抜く力――“計画力”、“実行力”』等が不可欠である。

また、今回のプロジェクトの性質上、外部との接触（インタビュー、取材）が非常に多く、学生は多少のストレスを感じていたように見えたが、メンバー同士で助け合い、上手く気持ちを切り替えていたようである。

表２に、本プロジェクトにおける体験項目をまとめる。

３．プロジェクト活動の効果に関する考察

（1）関連情報の収集

プロジェクト開始に先立ち、様々な動物園の Web サイトを調査することで、のんほいパーク Web サイトの課題を明らかにした。Web ゲーム等のお遊び的な要素や、Web アルバム、ムービー等が充実しているサイトが多い中、のんほいパーク Web サイトの“地味さ”、“情報量の少なさ”を指摘する学生が多かった。

一方で、ICT スキルのある学生は、Web ゲームの構築や動画編集、等にはそれなりのコストが必要であることを把握しており、一定の議論の後、市営の施設には資金面で限界があることをメンバー全員で理解するに至った。また、自分達が活動できる範囲にも（スキル、設備の面で）制約があることを認識し、その後の具体的な計画へと行動を移すことができた。

これらの点から、『考え抜く力』について、能力の高い学生を中心に、程度の差はあるものの、メンバー全員が身に付けることができたと考えている。

（2）施設見学・事前準備

具体的な活動に入る前に、パーク事務局にて事務長補佐の寺部氏に活動の主旨について説明すると共に、協力を依頼した。また、その後、パーク内を見学させて頂き、どのような情報を発信していくか、どのような情報が必要か、等を議論するための調査を行った。

意識の高い学生は、特に何も指示しなくても、積極的にメモを取ったり、写真を撮影したりすることができていたが、その場にいるだけで何もできていない学生もい

た。『前に踏み出す力』について、元々持っている能力の違いが顕著に表れた事例だと考えている。この問題については、その後、後述のインタビューを経験するうちに改善が見られ、全員が積極的にメモをとる姿が見られるようになり、「主体性」や「実行力」について一定の能力が養成できたと考えている。

（3）Web サイトの開設

カリキュラムにおいて、Web デザインの授業と並行してプロジェクト活動が行われたため、活動当初は、学生自身に Web サイトを構築する技術が不足していた。そのため、デザイン案とイラスト素材のみを学生が考案・作成し、サイトの“ひな型”は教員が作成することからスタートした。その後、ページ制作のスキルを身に付けた学生が中心となって、Web の更新作業を行えるようになった。

一方で、Web デザインを受講しておらず、ICT スキルの低い学生は殆どコンテンツの制作には関わらない体制ができてしまい、一部の学生に負担が集中してしまったことは反省点である。

図１に、作成した Web サイトを示す。

(a) top ページ

(b) 売店情報ページ

図１　作成した Web サイト

なお、コンテンツ制作に携わらなかった一部の学生には、教員主導で、原稿の量やインタビューの回数を増やす等の作業分担を課すことで、学生の不公平感を無くすよう心がけた。このような作業分担について、本来であれば学生主体で行うことが望ましいと考えるが、その意味では「状況把握力」の養成について、不十分な点があったと感じている。

（4）インタビュー

作成した Web サイトに掲載する情報を収集するために、関係各所にインタビューを行った。事前にインタビュー項目を考えるように指導したが、上手に相づちを打ちながら話を聞き出せる学生と、紙にメモした質問項目を読み上げることしかできない学生とで、大きな差があった。この点については、苦手な学生に過度にストレスをかけることを避けるため、特に表立って指導はしなかったが、他のメンバーの質問の様子等を見聞きするうちに、徐々に改善が見られるようになった。「発信力」や「傾聴力」について、一定の成長が見られたと考えている。

なお、インタビューの記録については、Web 更新に使用するため、メンバー全員が iPad や共有フォルダを利用して情報共有するように行動できており、「規律性」についても成長が見られた。

また、他のメンバーのインタビューを積極的に記録する学生や、写真撮影をする学生など、特に指示しなくても学生同士で役割分担ができており、「主体性」についても養成できたと感じている。

インタビューの様子を図２に示す。

図２　のんほいパーク（バードエリア）での取材

（5）その他の広報活動

本学の学園祭には子供連れが多く来学するため、パークを宣伝する機会だと考え、どのようにすれば効果が得られるかを学生自身に考えさせた。パンフレットにシール（Web サイトへ誘導するための QR コードを記載）を貼ったり、廊下に動物園の写真を飾ったりする、等のアイディアが出され、それを手分けして具体化するまでの作業を学生主体で行うことができた。

活動を通して「計画力」や「創造力」また、「実行力」等について成長が見られたと考えている。

４．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

（1）プロジェクト内容について

パーク来園者数の増減等、実際の効果についての検証が難しいため、自己満足に陥ってしまいがちであり、また、学生の ICT スキルに依存する面が大きいことから評価が難しいテーマだったと感じている。しかしながら、連携先の方々からは非常に好意的な反応を頂いており、学生も楽しんで活動できていたように思える。

まだまだ発信できてない情報が多く、連携先からも継続して欲しいとの意見も頂いていることから、次年度の継続も考えている。

（2）プロジェクトの進め方について

広報活動という性質上、アイディアを形にする際に、どうしても ICT スキルが問題となる。HTML の知識が無くても Web 制作が可能な CMS 等のツールを導入するなど、教員側で十分な計画・準備が必要であると感じている。また、学生に不公平感が生じないような作業の配分や、課題の設定等、活動前半については教員側の誘導が不可欠であると考える。

また、雑談の際には非常に活発な意見交換がなされており、柔軟な意見が多く出されていることが多かったが、「今から議論せよ」と指示を出した途端に黙ってしまう学生が多かった。インタビューだけでなく、メンバー内での意見交換を通して「発信力」や「傾聴力」を養うことができるよう、指導を改善したい。

（3）プロジェクト運営の制度について

今年度は特にリーダーを決めずに教員主導で進めたが、次年度は学生中心に運営を進めていけるよう指導したい。また、Photoshop や illustrator 等の特定のソフトウェアのファイルを多く使用したため、プロジェクト管理システムより共有フォルダでの情報共有の割合が多くなってしまった。スケジュール管理等に、もっと管理システムを活用していきたいと考えている。

また、今年度はメンバーに転学部生が２名含まれており、受講科目等の関係から全員でインタビューに行ける時間が非常に少なく、スケジュールの管理に多大な労力を要した。プロジェクト活動を円滑に進めるため、学部の時間割の調整等に改善を求めたい。

豊橋献血促進プロジェクト

山口　満

１．プロジェクト活動の内容

近年，若年層の献血離れが深刻な社会問題となっている．本プロジェクトでは，献血に関する広報活動を通じて，豊橋市における若年層（本学学生含む）の献血率向上に貢献することを目的として活動を行った．本プロジェクトテーマは，学生間の話し合いの中，学生自身の希望により決定したものである．

具体的な活動内容は以下のとおりである．表 1 に，本プロジェクトのスケジュールを示す．

（1）献血イベントの広報

ボランティアとしてこれまでに活動経験がある学生がプロジェクトメンバーに含まれていたため，この学生の主導のもと，市内で企画されている献血のイベント等の情報を広報し，実際に献血呼び掛けボランティア活動を行った．この活動を通じて，実際の現場の状況に関する理解を深めた．なお，イベント日時や場所の事前案内は，後述の Web サイトを通じて行った．

（2）献血意識調査（アンケート）

若年層の献血に関する意識や実態を調査するため，本学の学生を対象として，献血意識調査（アンケート）を行った。結果を分析して、献血率を高めるための方策を検討し，実施計画を立案した．

（3）ヒアリング

献血に関わる方々（愛知県豊橋赤十字血液センターのスタッフ）にヒアリング（意見交換）を行い，日々献血呼びかけ活動をされている方々の実際の状況や既存の取り組み等について伺った．

（4）献血に関する情報の発信（Web サイト構築）

プロジェクト Web サイトを構築し，献血に関する各種情報（数値データ等）をまとめ発信した．

上記のプロジェクト活動の実践を通じて，主に以下の項目について学び，理解を深めることとした．

- タスク管理、スケジュール管理、共同作業
- 情報の収集および整理・分析方法
- 目上の方との接し方（依頼の方法など）
- アンケートの作成方法・集計方法の理解
- データ処理（Excel など）を通じた情報リテラシの習得
- Web サイトの設計ほか情報発信に関する知識・スキルの習得

２．プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本補助事業は，産業界から求められる資質として，社会人基礎力に代表されるジェネラルスキル（総合力）を取り上げている．本プロジェクトにおいて，前節の知識・スキルの他に，どのように社会人基礎力の養成に繋がるかを説明する．

社会人基礎力では，前に踏み出す力，考え抜く力，チームで働く力の 3 能力（12 分類）の資質が取り上げられている．本プロジェクトでは，社会問題として認知されている「若年層の献血離れ」という，既に多くの団体によって取り組まれていながらも有効な改善策を見いだせていない困難な問題に取り組むことから，「考え抜く力」

表 1　プロジェクトのスケジュール

5月	6月	7月	8月
プロジェクト始動	献血イベントへ参加① 17日：イオン豊橋南店	献血イベントへ参加② 22日：豊橋駅南口（サマー献血）	中間報告会
学内アンケートの作成----------	学内アンケートの配布----------	学内アンケートの集計------→	
	WEBサイトの作成----------	----------	----------→

9月	10月	11月	12月
名刺カード作成 ポスター作成	26・27日：創造祭にて 名刺カード配布 意見交換会のための アポ取り・資料送付	1日：意見交換会 三角柱POP作成の計画	献血イベントへ参加③ 16日：イオン豊川店（クリスマス献血） 三角柱POPの作成・設置 （教員インタビュー） 成果発表会
WEBサイトの作成----------	----------	----------	----------→

表２　プロジェクトにおける体験項目

３つの能力	１２の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	○ ○ ◎　考えた施策を実行に移す
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	◎　現状分析、問題点の発見 ◎　具体的な実施方法等の計画 ◎　課題解決のための案の創造
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性 情況把握力 規律性 ストレス・コントロール	◎　施策の議論 ◎　施策の議論 ○ ○ ○ ○

（課題発見力、計画力、創造力）が重要となる．計画の具体化の段階では，「チームで働く力」（発進力，傾聴力）をもってメンバー間での議論が必要となる．さらに，計画した内容が正解であるかを事前に確かめるすべはないため，まずは「前に踏み出す力」（実行力）をもって実行に移さなければならない．以上のとおり，本プロジェクトの遂行にあたっては3つの能力のすべてが必要とされ，活動を通じてそれぞれが養成されることが期待される．表2に，本プロジェクトにおける体験項目をまとめる．

３．プロジェクト活動の効果に関する考察

（１）献血イベントの広報

本プロジェクトでは，計 3 回，商業施設等における献血バス運行の「呼びかけ」ボランティアに参加した．初回はモチベーションを高く保ち積極的な動きがみられたものの，プロジェクトリーダーが参加困難となった後半にはメンバーのモチベーション低下が見受けられ，特に3回目に参加した学生は1名のみで2名は不参加であった．これは，土曜日や日曜日における活動であったことが原因であると考えられる（活動自体には否定的ではなかった）．学生個人の都合は理解できるものの，連携先団体との関係（期待）を考えての責任ある行動を取ったとは言い難いものであった．

以上の観点からは，「チームで働く力」における規律性が十分ではなかったといえる．

図１　意見交換会の様子

（２）献血意識調査（アンケート）

メンバー間での十分な議論を経て，学生向けアンケート用紙を完成させた．また，回収後の集計作業についても，作業分担をうまく行い速やかな仕事を実現できていた．集計後の内容分析についても，学生間の意見交換が活発に行われていたため，この活動については，チームで働くことの効果を学生自身も実感できていたように思われる．

アンケート結果から課題を見つけ出し次の計画を立案する力については，教員のフォローが無ければ踏み出せなかったため，「考え抜く力」についてはまだまだ不足していると言わざるを得ない．（本年度については，スケジュールの都合もあり，指導教員から複数案を提示する等のフォローを行った）

（３）ヒアリング

（２）で集計したアンケートについて，赤十字血液センターの方々と意見交換を行った．意見交換会のセッティングについては，電話によるアポ取り，事前の資料送付のための依頼状の作成（国語教員による添削指導依頼も実施），アンケート結果の文書化などの活動を行った．特に，アポ取りについては，そのような行為を苦手としている学生にチャレンジさせ，面識のない方とのコミュニケーションを実現させることができた．この点については，学生自身も自覚しているとおり，よい体験をさせることができたと考えている．図 1 に，意見交換会の様子を示す．

（４）献血に関する情報の発信（Web サイト構築）

プロジェクト Web サイトの構築にあたり，掲載内容や如何に注目を集めることができるか（記事を読ませるか）がポイントとなる．本来，掲載内容の検討については ICT の専門知識は不要のはずであるが，「Web サイト」という

URL: http://projectweb.sozo.ac.jp/myamaproj2012/

図 2　プロジェクト Web サイト

だけで，自然と得意な学生が Web 担当者に決まり，またその学生に記事（原稿）作成作業の負荷が集中する結果となってしまった．共同で記事を編集できる仕組み（WordPress）を導入したにも関わらず，一人に学生に負荷が集中してしまったことについては，指導教員の誘導の仕方に問題があったと考えられるため，今後は改善する必要がある．図 2 に，本プロジェクトで構築した Web サイトを示す．

なお，Web サイトへ誘導するための仕掛け（学園祭における Web サイトの紹介を記載したカードの配布，および，三角柱 POP の学生ホール等への設置）については，メンバー間でアイディアを出し合い，共同で作業できたと評価できる．これについては，3 つの能力をうまく発揮できていたといえる．

学生の活動全体を振り返ると，共同して作業できたことと，そうでない活動があり，順調に進行したとは言えない．活動後半には，実行力があり，責任感が強く，規律性を重んじる特定の学生に負荷が集中する結果となった．本プロジェクトはまだまだ途中であるものの，現時点でこのようにまとまりのあるものを形成できたのは，その学生の力によるところが大きい．学生の自己評価においても，本人およびプロジェクトメンバーも自覚していることがわかる．活躍できなかったメンバーについては，自らを振り返ってまとめた反省点や課題を再確認し，日常の活動を通じて改善できるよう，意識して努力してもらいたい．

４．本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

（1）プロジェクト内容について

テーマが難しく成果（効果）を体感しづらいものであったが，連携先の方々から評価をいただき，最終的には学生もそれなりの達成感を得たようである．継続して取り組んでほしいという要請もあることから，次年度のテーマ設定では考慮したい．

（2）プロジェクトの進め方について

学生の得意・不得意で安易に分担が決定される傾向にあり，実際に今年度は Web サイト構築や発表スライド作成等において ICT 系に抵抗の無い学生に負荷が集中する結果となった．個々の得意な部分で能力を発揮させるためのバランスのよい作業の設定・与え方を，教員が誘導しなければならなかったと感じている．あるいは，得意でない分野も苦手意識を克服できるよう，十分な余裕（時間）を持って取り組ませるような工夫が必要である．時間的な配慮は，「考え抜く力」を養成するためにも十分に確保したい．ただし，外部団体と連携して活動している都合上，進捗状況にあわせて都度最良の方法を採らなければならない．

今年度は，途中でプロジェクトリーダーが参加できない状況になり，後半はリーダー不在のまま進行してしまった．これは，制作物の完成の遅れなどの一因であったと考えられるため，次年度は改善したい．

「プロジェクト演習」時間内での口頭の議論は活発であったが，プロジェクト管理システムによる情報共有等は効果的に実施することが出来なかった．システムの効果的な利用方法の検討についても，今後の課題である．

②学生成果報告書

教員氏名	プロジェクトテーマ	掲載ページ
石田宏之	豊橋港のコンテナターミナルの機能と役割（発展可能性）に関する調査研究	85
今井正文	iPad,iPhone で利用できるアプリケーション作成	89
加藤尚子	ヨシノパンプロジェクト	93
川戸和英	SOZO ショップ開店・運営プロジェクト	99
見目喜重	豊橋エコタウンプロジェクト ～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～	103
五味悠一郎	診療情報管理士認定試験の学習環境構築 2012	110
中野聡	田原のウィンドファーム ―社会的企業の実証研究	114
野口倫央	豊橋からオレオレ詐欺をブッ飛ばせ！！	116
三好哲也	豊橋トップインタビュー2012 プロジェクト	120
三輪多恵子	のんほいパーク盛り上げ隊プロジェクト	124
山口満	豊橋献血促進プロジェクト	128

豊橋コンテナターミナルの機能と役割（発展可能性）に関する調査研究

石田プロジェクト

Ⅰ．プロジェクトメンバー

メンバー:宇野尊英　影山裕紀　杉浦功尚、松田一輝

指導者：石田宏之

Ⅱ．プロジェクト概要

ゼミの研究のなかで増大しているアジアとの貿易において「港湾（コンテナターミナル）」の果たす役割が重要であることを学び、その中でも拡大している対アジア貿易におけるコンテナターミナルの役割と機能に興味を持った。

大学が立地している豊橋には三河港があり、そこでは完成自動車の基地となっていることと並び外貿コンテナターミナルの取扱量が増加しており、今後も発展する可能性があることが分かった。

今回の調査研究の目的は、三河港豊橋コンテナターミナルの機能と役割（発展性）についてまとめることである。と同時にこの調査研究を通じて、「就業力を高めること」である。

Ⅲ．連携先企業・団体

・日本通運株式会社豊橋支店、海運営業所・名古屋支店
・豊橋市産業部港湾活性課
・愛知県三河港務所
・三河振興会
・豊橋コンテナターミナル株式会社

Ⅳ．活動内容

１．港湾の種類と三河港の位置づけ

平成 23 年 3 月 31 日に国土交通省が港湾法を改正し、特定重要港湾を国際戦略港湾と国際拠点港湾の二つに分け、重要港湾、地方港湾を加え、港湾の種類を 4 つに区分した。

三河港は 2010 年 8 月に重要港湾から「重点港湾」に格上げになった。

２．豊橋コンテナターミナルの特徴

三河港コンテナ取扱量は、1998 年より 2007 年まで右肩上がりで伸び、2008 年、2009 年はリーマンショックを要因に減少している。その後 2010 年にはリーマンショック以前の 2007 年よりものび、今後も増大が予想される。

コンテナターミナルが立地している、公共ふ頭外貿貨物の品目別割合は、輸出入とも大部分を自動車が占めているが、コンテナ取扱量も 14%をしめ、今後も発展の余地があると思われる。なぜなら、外貿コンテナ貨物の取扱品目をみると、輸出、輸入とも自動車部品以外にもさまざまな品目を取り扱っており、その他の貨物をコンテナへの拡大余地があるからである。

３．豊橋コンテナターミナルのオペレーション

① 岸壁での本船発着作業

・コンテナをコンテナ船に積み込み、下ろす作業

・ガントリークレーンを使用し、コンテナを動かす

・ 船内荷役(4 人)

・沿岸荷役(4 人)

② ヤードからの移動

ストラドルキャリアでの移動。

コンテナの移動位置は、出入り貨物、空コンテナで分けている

③ 移動指示

豊橋コンテナターミナルでは基本的に無い

④ コンテナの置き場

⑤ 検数チェック

⑥ 通関

⑦ トレレーラー系の積み込み(取り下ろし)作業

⑧ 貨物チェック

⑨ 保税上屋への移動

トレーラーでの移動

⑩ バンニングとデバニング

保税上屋にてこの作業を行う。

バンニングとは、コンテナに貨物を詰め込むことをいい、デバニングとは、コンテナから貨物を取り出すことをいう。

⑪ 荷主への(からの)移動

４． 三河港の機能と役割(発展性)

・ 三河港は「重点港湾」として、「国際拠点港湾」である愛知県の名古屋港及び三

重県の四日市港との連携を図りながら、輸出入完成車の拠点であるとともに。「アジア向けコンテナターミナル基地」機能を果たす役割を担っている。

- 豊橋コンテナターミナルの後背圏は広く、立地している企業も多いため、コンテナ貨物の潜在量はかなりあると推測される。また、現状のコンテナターミナルの能力は、現状の 2 倍の量を取り扱うことができる。
- 豊橋コンテナターミナルが有するメリットは①低廉性②通関の迅速性③緊急時対応の迅速性④インターナショナルモーダルシフトである。
- 完成自動車の海外生産が続いていることを考慮すれば、今後コンテナターミナルの役割は重要となってくる。
- 数量拡大に伴い寄港の数を減らすことによりリードタイムの短縮と 1 個当りコンテナの輸送費の削減を図ることができる。
- 数量拡大は、アジア地区への直行便の開設も今後考えられる。

～課題～

- 名古屋港、四日市港、豊橋港間の内陸フィーダーサービスを充実させ、アジア向けコンテナ輸送拡充のための連携を図ること。そのための方法の一つとして、コンテナ単位にならない貨物（LCL 貨物）を対象とした LCL サービスの拠点港として豊橋コンテナターミナルを位置づけること。
- 豊橋港の後背圏に立地する荷主に対して、アジア向け貨物だけで分離して引き受けるのでははなく一括して貨物を引き受け、アジア向け以外の貨物については、フィーダー輸送により名古屋港あるいは四日市港に輸送するシステムを構築すること。
- 数量拡大に備えて、コンテナヤード内の ICT 化の促進とヤード内のより一層の機械化を図ること。特に、オペレーション業務をコンピューターで管理すること。
- ヤード内の作業の効率化を図るために、7 号岸壁、8 号岸壁の統合を図ること。
- ダメージコンテナの修理のために、船会社をターミナル内に設けること。
- 三河公務所、三河振興会および豊橋コンテナターミナル株式会社などの連携のもとにコンテナ貨物の拡大のためのポートセールスの充実を図ること。

5. 就業力達成度

メンバー4 人の各能力要素の達成度を出すために、『発信力』、『傾聴力』、『主体性』、『計画性』の 4 つの能力要素の各 7 つの項目について、それぞれ、7 項目に分け、それぞれ 5 段階で評価した。その結果を、残念ながら、『発信力』を除いて、いずれも 50 点に達しなかった。この点については、3 月までに作成する「調査報告書」を完成させるまでに、各能力要素を高めるよう努力したい。

V. 所見

学生 A(400 字程度)

プロジェクトを通して私は、多くの事を学び、反省することができました。

私たち、石田ゼミで行ったプロジェクトでは、三河コンテナターミナルの発展可能性を見出すために活動を行ってきました。文献調査、企業ヒアリングを通し、内容の理解・問題に対する改善、就業力の向上をはかりました。文献調査では、期限内での成果報告ができない、学習不足などが浮き彫りになりました。企業ヒアリングでは、ヒアリングメモの不足により、要約に時間がかかってしまいました。文献調査、企業ヒアリングでの反省点、不足があったため、内容の理解に苦しんでしまった事もありました。1 年間のプロジェクトを通し、自分の問題点が理解する事ができました。今後は自己の成長を目指すと共に、プロジェクトでのより良い成果を報告できる様頑張りたいです。

学生 B(400 字程度)
石田ゼミで一年を通して、物流とはどのようなものか大きく学ぶことができました。最初は右も左もわからない、物流業とはそもそもどのようなことを主に行っているかということも、大きくは配送しているしかわからない状態からのスタートでした。ですが、日数が経つことにいろいろな知識をつけさせていただきました。

また、日本通運豊橋支店をはじめ、日本通運海運営業所、日本通運名古屋支店、港務所、カモメリア、名古屋コンテナふ頭などと様々なところへヒアリング及び調査をさせていただくことにより、知識の向上とともにヒアリング方法、メモの取り方、調査後のまとめ方や整理の仕方も学ぶことができ、今後社会に出るにあたり、大きく役立つ知識を少しでも得ることができました。来年も卒論を進めるにあたり、不足内容のヒアリング調査などを実施し、さらに大きく自分として成長していけたらいいと思います。

学生 C(400 字程度)
私はこのゼミのプロジェクトで三河港のコンテナターミナルの発展可能性について勉強してきたのですが、最初は右も左もわからず調べ学習を続け知識をつけていくという状態でした。ですが、少しずつわかっていくにつれて理解する楽しさがでてきました。このプロジェクト演習は企業の方に直接会ってお話を聞くことができ、社会人として最も重要とされているコミュニケーション能力を養うことができました。報告会ではあんな大勢の人の前で発表させてもらうという貴重な体験をさせてもらい自分にとってもプラスになりました。このプロジェクト演習は自分にとってプラスになることばかりで、社会人にならないとできない経験をたくさんさせてもいらいました。これから社会人になる身としてこの経験は大きな強みになっていくと思うので、就職活動などで堂々と発言したいと思います。ですがまだ、研究の中で不十分なところも多々あるので足りない知識を補い、しっかりと卒論を完成させたいと思います。

学生D(400 字程度)
なぜ石田ゼミに入ったのかそれは　私が石田ゼミを選んだ理由は流通・物流について興味があったからです。流通や物流は人が文化的に生活していくうえで重要なことであり、基本的に無くなることはないとかんがえたからです。そのため、これらについての知識を得ておくことで、これからの社会にも役に立つと考えたからです。

入ってからの活動はこのゼミでの目的は三河港の発展可能性を見つけることになりました。

ゼミに入ってからの活動は主にヒアリング調査でした。日本通運豊橋支社や豊橋コンテナターミナルなど 7 社を回り、そこでガントリークレーンや実際に使われている倉庫の様子を見学させていただいたり、会社で使っている物流のシステムやサービスなどについて質問させてもらいました。

ゼミに入ってできたことできなかったことは、　企業に訪問するときにあらかじめ質問することをみんなで出して、当日にその回答を悔いたり、訪問先と連絡を取ってスケジュールを決めたりなどできたと思います。

できなかったことは、自分のやりたいとおもっとことなどを実行しなかったことにあります。そのため周りとも協力できず、自分の役割も果たせませんでした。

iPad, iPhone で利用できるアプリケーション作成

今井プロジェクト

Ⅰ．プロジェクトメンバー

幸田紘樹（21023109）、伊藤脩（21023202）
田口聖也（21023214）、山本宜輝（21023221）
若松優子（21223301）

Ⅱ．プロジェクト概要

経営学部では全学年に iPad が無償貸与され、教材として使うだけでなく、レポート作成のための情報収集やゼミナールでのプレゼンテーション作成、就職活動などのあらゆる場面に利用されている。また無線 LAN 環境も完備されおり、学内どこからでもインターネットを利用することができる。本プロジェクトでは、iPad の学内でのさらなる有効活用に取り組むこととした。

本プロジェクトは、iPad の特性を活かした学習支援アプリの作成を行った。アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに、学習ツールとしての効率的な活用について考えながら活動した。

Ⅲ．連携先企業

プロジェクトにご協力いただいた連携先企業は、以下の通りである。

株式会社アイエスエル様
株式会社　インターネットイニシアティブ　名古屋支社様

Ⅳ．活動内容

プロジェクトの内容は、授業での利用を目的とした学習支援アプリの開発を行う。学習支援アプリは、テスト問題の製作・配信、解答の機能を備え、学籍番号や名前等の項目表示、キーボード及び手書き文字入力、データベース接続（データ送受信）の機能を有する。iPad アプリの制作方法は主に以下の通りとなる。

(a) Xcode
iPad,iPhone のアプリ制作に最もよく利用され、柔軟性の高いアプリを作成することができる。Objective-C のプログラミング知識が必要となる。

(b) HTML/CSS/JavaScript
Web 制作用の言語、Xcode よりも難易度は低い。

(c) FileMaker
プログラミング不要で、データベースやアプリケーションを作成することができる。

前述した iPad アプリの制作に必要な環境は以下の通りとなる。

(a) ハードウェア Mac 端末、Windows 端末、iPhone/iPad（実機テスト用）

(b) ソフトウェア
OS X Mountain Lion、Xcode、PhoneGap 、FileMaker Advance Pro、FileMaker Go（iPad/iPhone 展開用）

学習支援アプリの制作方法や開発環境の検討にあたり、協力先企業様への企業見学で得た情報や、協力先企業様から得たアドバイスを参考にした。企業見学の様子を図 1 に示す。

図 1 企業見学の様子（メンバーと IIJ の皆様）

学習支援アプリの開発には、主流な Xcode を用いる方法も候補に挙がったが、初めての試みであるため、初期の開発は扱いやすい FileMaker を用い、その後、他の開発手法へ移行する事とした。開発環境の構築と学習支援アプリのプロトタイプ作成を済ませ、レイアウト、ボタン配置、仕様の確認を行った。FileMaker での開発画面例を図 2 に示す。

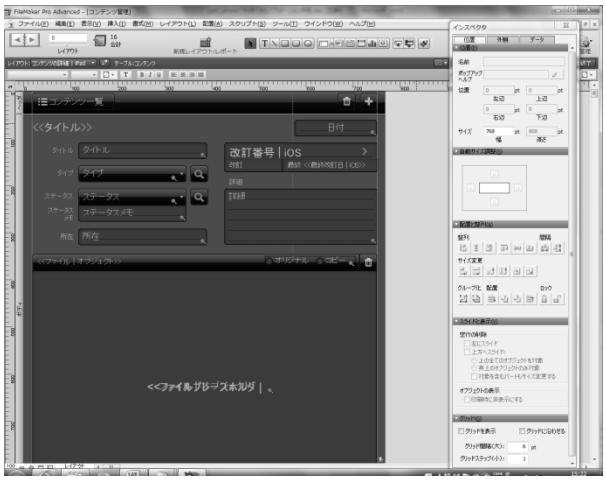


図 2 FileMaker での開発画面例

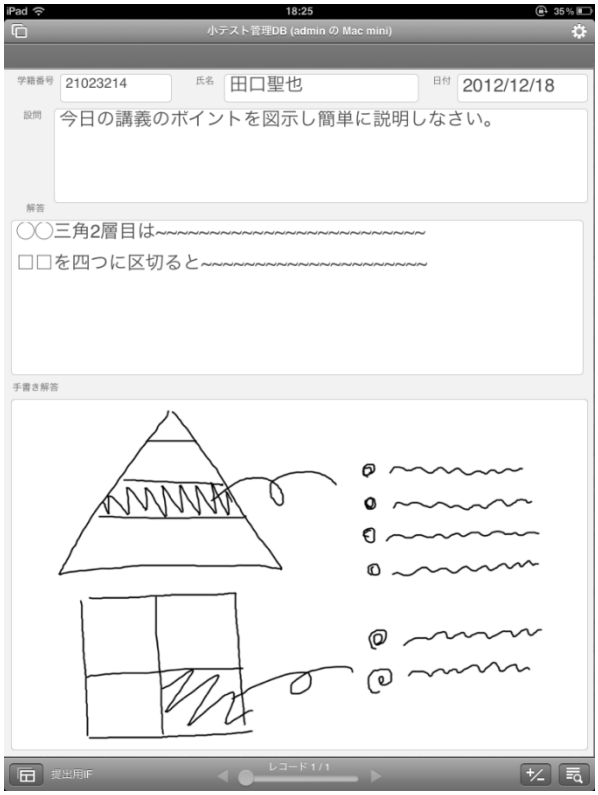


図 3 FileMaker 版　学習支援アプリの例

FileMaker を用いて制作した学習支援アプリのイメージを図 3 に示す。FileMaker を用いた学習支援アプリは、iPad 側では FileMaker Go で動作し、ホストコンピュータの FileMaker のデータベースと連携して動作する。学習支援アプリに実装した機能は、学籍番号と氏名の表示と設問に対してキーボード及び手書きで解答を入力するものである。

次に HTML/CSS で制作した画面を、PhoneGap を用いて変換することにより、iPad 等に対応したモバイル用アプリを制作することを子試みた。PhoneGap は、HTML5 と CSS および JavaScript などの Web 標準の技術で作成した Web アプリケーションを、iPhone や Android などのデバイスにインストール可能なネイティブアプリケーションへと変換するフレームワークである。ターゲットとなるモバイル OS は、iOS、Android、WebOS、Windows Phone 7、BlackBerry、Symbian など多彩である。 HITML/CSS を用いて制作した学習支援アプリの画面イメージは図 4 の通りとなる。

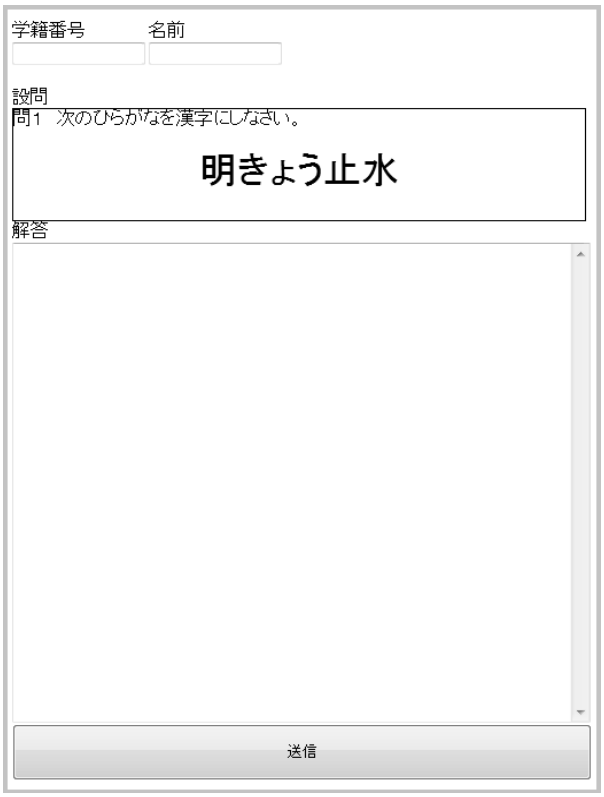


図 4 HTML/CSS 版　学習支援アプリの例

また、メンタルタフネス講座で使用した HTML+ CSS+ JavaScript で実装されたアプリケーションも同様に PhoneGap を用いて変換することができた。Web アプリケーションの画面イメージを図 5 に示す。この様に Web アプリケーションを実装するのと同様の技術で、モバイル向けのアプリケーションを開発することが可能である。

図 5 Web アプリケーション　画面例

今回のプロジェクトでは、企業の方にも協力して頂き学習支援アプリを制作するための開発環境や制作方法を決定することから始め、アプリ開発の基礎知識を学ぶことができた。またネットワークサービスを提供しているインターネットイニシアティブ（IIJ）名古屋支社のデータセンターを見学する機会も設けて頂き、ネットワークの仕組みや運用方法について学び関心を深めた。反省点としては、アプリ開発に関する役割分担が明確化できず作業がスケジュール通りに進まなかったことである。今後は、テスト運用やマニュアル作成を含む残作業の分担と全体のスケジュールを調整し、制作した学習支援アプリの実用化および X-code による Objective-C を用いたプログラミング知識の習得に取り組んでいきたい。

Ⅴ．所見

本プロジェクトを通して各メンバーが実感したことを、以下にまとめる。

・幸田紘樹

今回のプロジェクトで私はプロジェクトの発表を担当とし、中間発表と成果発表の発表者という活動をしてきた。発表要旨を試行錯誤しながらした結果、予定より完成までに時間がかかってしまうアクシデントがおきたため、前日に読んでそのまま発表などという過酷なスケジュールになってしまったりもしました。それでも発表順位は噂では割と良かったらしく、好成績をおさめることができたのではと個人的には思いました。それもこれもプロジェクトメンバーの皆が連携を取り、協力、努力した結果だったのだと考えています。

反省点として、私自身の発表のレベルをもっと上げていれば、もっと評価されたプロジェクト内容だったのではないかと思いました。今後社会に出たときには、この反省点を活かし、もっと聞き手にわかりやすいプレゼンをできたらと考えています。

・伊藤 脩

今回のプロジェクトで私はHTMLで手書き入力ソフトのサンプル画面を作成する作業を行った。もともとは File Maker を使ってサンプルを作成していたがどうしても手書き入力の部分を再現することができずに HTML でサンプルを作成する形になってしまった。File Maker というソフトを触るのは今回が初めてで教本を読みながらの作業だったため作業の進み具合は遅く完成させることができなかったがデータベースについての理解を深めることができた。HTML の方も授業で学んだことを活かせる場面だったが着手したのが遅かったため、そちらの方も中途半端な出来で終わってしまった。

私はこのプロジェクトには途中参加で、テーマを決めるときに入ってきてしまったためテーマがなかなか決まらず、役割分担も決めずにやっていたため作業がなかなか進まなかったが、役割分担をすることで作業の進み具合が早くなり少しずつ形になっていった。今回のプロジェクト

ではチームで作業する際には役割を決めてそれぞれで作業をすることで作業の効率が上がるということ学ぶことができた。

・田口聖也

今回の iPad、iphone で利用できるアプリケーションの作成プロジェクトで私は、HTML、CSS を使ってアプリケーションのサンプル画面の作成を担当しました。手書き入力することができるアプリケーションの作成だったのですが、私は、もともと他のプロジェクトメンバーよりも知識が少なく、File Maker を用いたアプリケーション制作には協力できる場面が少なかったように感じています。しかし HTML は、授業で学んでいたのでそれを生かしてアプリケーション画面のサンプルを作りました。それに合わせ CSS を使ってより iPad らしい画面のデザインに近づけることができました。

今回は、自分の知識のなさを実感しました。これからは、知識を増やしていくとともに HTML と CSS を使ったアプリケーションを、今後、実際に手書き入力アプリケーションとして活用できるように試行錯誤しながら作成していきたと考えています。

・山本　宜輝

プロジェクトの初めに、目的を決定するためにブレーンストーミングとマインドマップと呼ばれる方法を用いた。結果的にマインドマップはあまりうまく扱うことができなかったが、ブレーンストーミングで多くのアイディアを出した結果、ソーシャルネットワークや iPad、プログラミング等の単語が浮かび上がった。機械は分からないと反対するメンバーもいたが、分かる人が分かる部分を進めることで合意し、3 年生全員に配布された iPad を使って大学の生徒に役立つようなアプリを開発することとなった。それぞれ役割分担を簡単に決めて開発を行ったが中々思うように事が進まず、一人もしくは二人だけでほとんど進めてしまう場合もあった。私にとって初めてのプロジェクトは規模が小さかったためなんとか終えることができたが、各メンバーには負担をかけてしまったと反省している。本プロジェクトを終えて、メンバーと共に一つのプロジェクトを遂行するにあたり、協力すること、役割を分担することの大切さを学ぶことができた。

・若松優子

今回のプロジェクトは、配布された iPad を活用し大学で役立つものを制作したいというテーマで取り組んだが、アプリの制作に関しては授業の範囲外でほぼ知識がなく環境の準備やアプリの制作方法に至るまで全てが初めての試みであった。アプリの制作では、全体の概算スケジュールを作業工程に落とし込めず、メンバー内の役割があいまいになってしまった。そのため各自が力を出し切れず、当初予定していたアプリの評価と実運用の段階には至らず満足な結果を出すことができなかった。後半から制作方法を2種に分け作業分担したが、早い段階で各自の特性を活かし分担することで効率を上げることができたと思う。以上のような反省点はあるが、1 年間に亘るプロジェクトに取り組む機会を与えて頂いたことで、リーダーシップ、協調性、モチベーションの維持、責任感等の重要性を体感的に学んだ。また、この体験を通して社会人として大切なことが何かを考えることができたことは大きな収穫であった。

【謝辞】

本プロジェクトの実施にあたり、ご協力いただいた株式会社アイエスエル様、株式会社インターネットイニシアティブ名古屋支社様には大変お世話になりました。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

ヨシノパンプロジェクト

加藤尚子プロジェクト
プロジェクトメンバー：櫻井駿・鈴木葉月・高木駿・山内孝紘

１．プロジェクト概要

本プロジェクトでは、プロジェクトメンバー４名が協働し今回の活動に取り組むことで、学内購買横に設置しているよしのベイカリー株式会社ヨシノパン自販機の売上向上に貢献することを目的としている。

２．連携先企業

よしのベイカリー株式会社

３．活動内容

本学に設置されているヨシノパン自動販売機の売上向上に貢献するため、様々な活動を行った。具体的には、AIDMA モデル（表１参照）をもとに、Attention（注意）及び Interest（興味・関心）を向上させることで、売上向上に貢献する活動である。具体的な取り組み内容は以下のとおりである。なお、Attention 及び Interest を向上させるための主な活動内容・日程については図表２を参照されたい。

図表１　AIDMA モデル

AIDMAモデル	
認知段階	A：Attention（注意）
感情段階	I：Interest（興味、関心）
	D：Desire（欲求）
	M：Memory（記憶）
行動段階	A：Action（行動）

出典：嶋口・和田・池尾・余田（2004 年）「マーケティング戦略」より抜粋

（１）プロジェクト活動開始に向けた活動

①事前調査（学内購買横にあるパン自販機の売れ行きを観察）

②活動内容に関するプレゼンテーション

プロジェクト活動に協力得るためによしのベイカリー株式会社代表取締役社長の鈴木雅晶氏にプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの結果、鈴木氏よりプロジェクト活動許可を得ることができた。

（２）紙面掲示（３号分）に向けた活動

①紙面作成にあたっての複数回にわたるインタビュー

②学生へのアンケート

③パン作り体験（よしのベイカリー株式会社にて）

④紙面作成作業

⑤紙面掲示依頼

学内の３ヵ所（購買横、B14 教室横、D 棟２階の掲示板）に掲示した。

（３）Attention 及び Interest の変化をとらえる活動

①学内アンケートの実施

学内で学生に対してアンケートを配布した。アンケートは学生一人ひとりに手渡しをし、回答してもらう方法をとった。約1300名の学生（のべ人数）から回答を得ることができた。

②インタビューの実施

協力企業であるよしのベイカリー株式会社代表取締役社長鈴木氏へのインタビューにより、本プロジェクトの売上貢献について確認をした。

図表２　活動内容と日程

日程	活動内容			
	A:Attention（注意）	I:Interest（興味・関心）	購買行動	その他
4月11日～5月10日			ヨシノパン自販機の利用者事前調査（ヨシノパン自販機写真撮影）	
6月22日				プロジェクト活動の協力を得るためのヨシノパン社長鈴木雅晶氏へのプレゼンテーション
6月27日～7月13日	□	学生への第1回アンケート、集計		
7月26日	紙面第1号掲示			
8月10日				学内中間発表
8月21日				連携先企業へパン作り体験
10月9日	紙面第2号・第3号作成の為の連携先へのインタビュー			
10月20日				学園祭展示用資料作成
10月24日～11月21日		学生への第2回アンケート、集計		
11月13日	紙面第2号掲示			
11月27日	紙面第3号掲示			
12月11日				連携先企業への売上調査インタビュー
12月18日				学内最終発表会
12月18日～1月11日			学生への第3回アンケート、集計	

４．結果

アンケート及びインタビューより、AIDMAモデルにおけるAttentionについては向上が確認できなかったが、Interest（興味・関心）についてはその効果が売上へ貢献している可能性が認められた。以下、結果について詳しくみていくこととする。

（１）Attentionに関する分析結果

購買横にあるヨシノパン自販機に対する在学生の認知度調査（１回目、３回目のアンケートにて実施）からは、向上が認められなかった（図表３参照）が、向上が認められなかった３回目アンケート結果においても認知度は男女ともに８割を超えているという回答が得られた。

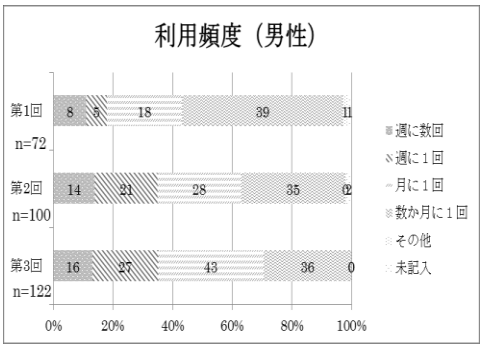
図表３　項目：自動販売機でパンが販売されていることを知っていますか

□	全体		男性		女性	
	知っている	知らない	知っている	知らない	知っている	知らない
第1回(n=291)	281(97%)	10(3%)	114(96%)	5(4%)	167(97%)	5(3%)
第3回(n=497)	409(82%)	88(18%)	206(82%)	44(18%)	203(82%)	44(18%)

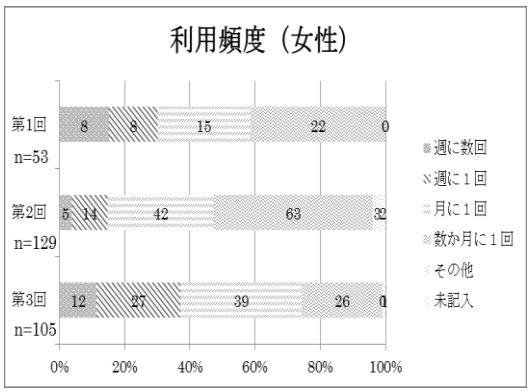
（２）Interestにおける分析結果

利用頻度については図表４のような結果が得られた。、男性の場合、週に数回・週に１回利用をする人が増加傾向にあり、数か月に１回利用が減少傾向にある。女性の場合は、週に数回利用に変化はないものの、月に１回利用が増加傾向にあることが読み取れる。

図表４　利用頻度の比較（男性）



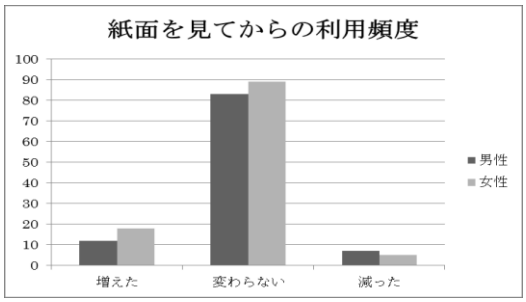
図表５　利用頻度の比較（女性）



（３）購買行動の変化

2012 年 12 月 11 日に協力企業であるよしのベイカリー代表取締役社長鈴木雅晶氏にインタビューを行った結果、ヨシノパンの売上の推移については、12 月上旬からパンの売上が向上しているとのことだった。また、紙面掲示を見た後、学生の購買行動にどのような変化があったかについてみてみると、男性については１割強、女性については２割弱の学生が利用頻度が増えていると回答している。このことから、本プロジェクトでの取り組みが売上向上へと貢献できた可能性が考えられる。

図表6　紙面を見てからの購買行動変化

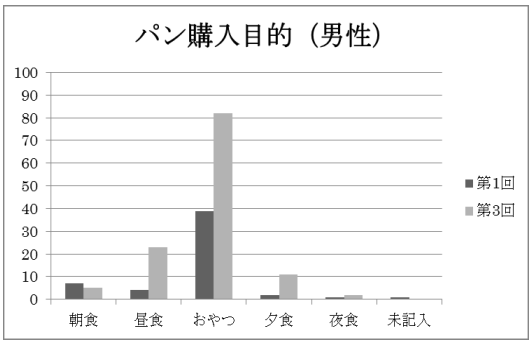


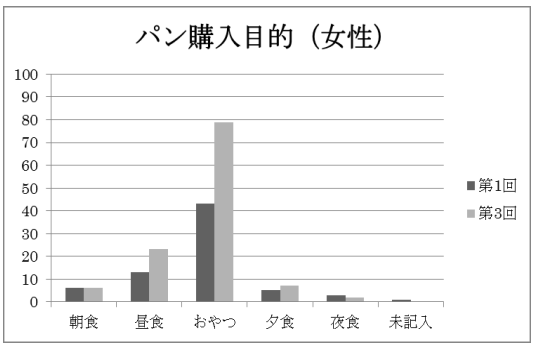
（４）その他

①購買目的について

図表７をみると、購入目的では、男女それぞれの分野で多少の増減はみられるが、第１回及び第３回アンケート時ともに、学生は朝食･昼食･夕食といった時間よりも、おやつとしてパンを購入する人が大多数を占めることがわかる。また、第３回アンケート時には昼食またはおやつとして購入する学生が増えていることがアンケート結果からわかった。

図表７　学内自販機におけるパンの購入目的



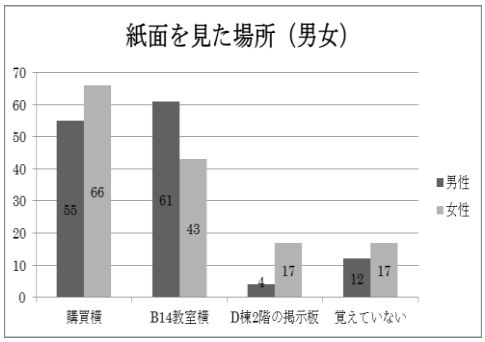


②紙面掲示場所について

紙面を見た場所について第３回アンケートにて回答してもらったところ、男女ともに購買横、B14 教室横の紙面を見ている学生が大多数を占めていた。しかし、D 棟２階の掲示板では男女ともに紙面を見ている割合は低いため、掲示物などを貼り出す場合は、購買横や B14 教室横の掲示板の方が、目に入りやすい場所であるということが考

えられる。

図表８　紙面を見た場所



５．今後の課題

今回、前述した結果より本プロジェクトでの取り組みが売上向上へと貢献できた可能性が考えられることがわかった。また今後の課題として、紙面掲示場所についての検討が考えられる。一つは紙面掲示場所を増やすことである。たとえば、カフェテリアや学生ホールなどの場所にポスターや紙面などを掲示し、購買横にあるヨシノパン自販機に対しての注意、興味・関心を持たせ購買行動を起こさせる取り組みが考えられる。もう一つはアンケートについての反省がある。アンケートに関しては、アンケート収集方法の検討、質問項目の内容(解釈しやすいかどうか)、複数回答の対策（複数回答でも回答しづらい項目）について検討していきたい。

６．所見

学籍番号　21023121　氏名　山内孝紘

今回のプロジェクト演習を通じて、私はコミュニケーション能力と責任感と計画性の重要性に気づくことが出来た。コミュニケーション能力という点では、インタビューを行う機会があり、インタビュー時の質問を正確に伝える、質問に対しての返答がある際に、相手の顔を見る、話を聞くなどのコミュニケーション、インタビュー時に必要な、ボイスレコーダーやカメラを学生課の方に借りるために会話をするのも、大事なコミュニケーション能力であることを知った。

責任感の点では、最終報告会のための発表資料作り、小さな修正箇所を修正、最終報告会用のポスターを作成など、期限までに完成をさせなければいけない責任感。

計画性では、いつどこでアンケートを配布し回収するのか、またアンケート分析を行う、時間などの細かい計画性はプロジェクトを行う中で重要な点だと感じた。計画性があればあるほどミスの少ないプロジェクトになったのではないかと考えた。

学籍番号　21023210　氏名　鈴木葉月

4 月から 12 月までこのプロジェクトに携わって学んだことがいくつかある。　1 つ目は、積極性である。自分はなかなか人前で自分の持っている意見をなかなか言えないことが多々あった。しかし、プロジェクトが進んでいくうちに自分の意見が少しずつではあるが言えるようになった。その他にもアンケートデータ集計も自分から進んで行う様にもなった。2 つ目は、コミュニケーション力である。友達やゼミ仲間と進んで会話する時間が増える様なった。その原因となった出来事は、企業の社長様とのインタビューである。緊張しやすい自分の性格からしたら絶対自分は会話の中に入ることは難しい。しかし、仲間のフォロー

もあってか、自然に社長の鈴木様とも会話が出来る様になった。意外な形とはなったが、自分の心が何か吹っ切れた感があった。こういう機会を増やすことで自分自身のコミュニケーション力も増していくと思う。学んだことも多かったがまだまだ改善点もある。それは計画性である。自分の体のことも考慮しつつ、仲間のことも考えながらプロジェクトの計画を立てる。それが一番大切だと感じた。本当は、先生が言われる前に自分達で計画を立て、それを実行することが大事だった。

学籍番号　21023208　氏名　櫻井駿

今回のプロジェクト演習のこのヨシノパンプロジェクトに関わり、自分自身が学んだと思うのは「コミュニケーション能力」だと思う。コミュニケーション能力は前々から多少はあると思っていたのだが、ヨシノパンの方や学生課の方に様々なコンタクトを取る際に、自分が思っているより足りていないと痛感した。相手に自分が思っていることが伝えきれてない場面などがあり、苦労した時があった。今は前より良くなりちゃんと伝えることが出来ているので、向上が見られてよかったと思う。ただ、最終報告会のプレゼンテーションを行う際には緊張のあまり、自分でも何を話しているのかが分からなくなってしまいちゃんと聞いている方々に伝わっているのか心配になったのだが、友達に聞いたところよく分からなかったということだった。これもコミュニケーション能力の一部だと思うので、緊張してもちゃんと相手にわかるように伝えることが新たな課題だと思うのでこれを改善していき、よりよくしていきたいと思う。

学籍番号　21023801　氏名　高木駿

このプロジェクトにおいて私には大きな反省点と小さい成長した点がある。

まず、最初は話し合いに積極的に参加する等、計画に協力的であったのだが、自分の中にある「つまらない」「興味がない」等の個人的感情を優先していたため、アンケート、分析、インタビュー、発表等の時にあまり協力することができなかった。

そのため私以外のメンバーに多大なる負担と迷惑をかけてしまった。実際、私が発表用の原稿を書く等の数少ない頑張っている場面で他のメンバーが PPT をなかなか完成させないことだけでもストレスを感じていたため、メンバーがいくら優しいとはいえ、私があまりアンケートに協力的でなく、インタビューに行かないなどの場合にもそれと同等、またはそれ以上のストレスがあったに違いない。その点に関しては深く反省しなくてはならないと思う。

しかし、私はいつまでもみんなに任せて自分だけ何もしないという身勝手な行動に後ろめたい気持ちもあったので終盤には何かできることを、と思い行動自体は遅くなってしまったのだが、アンケートの収集や、データ打ちこみ、プレ原稿の作成等できる限りの事で自発的に、積極的に行動するようになったのである。

その部分(積極性・自発性・協調性)においては多少なりとも成長できたのではないかと思われる。

学生生活や社会人として生活していく中で、このように一つのチームとして協力して物事を進めていくことがあると思う。そ

のチーム内で行動していくにあたり、チームの計画に沿って行動できるように、しかし自分自身の気持ちも尊重できるように改善していきたいと思う。それが、このプロジェクトで学んだことである。

謝辞

今回のプロジェクト実施にあたりましては、よしのベイカリー株式会社代表取締役社長である鈴木雅晶様にご協力いただくことができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

プロジェクトテーマ:「SOZOショップ開店・運営」

川戸プロジェクト

Ⅰ. プロジェクトメンバー

21023110 小林克希
21023118 平松愛子
21023205 大橋宏平
21023219 兵頭康貴
21023122 渡辺大祐（五味ゼミから本プロジェクトのみに出向）

Ⅱ. プロジェクト概要

1）目的：

豊橋市広小路商店街にSOZOショップを開店・運営する

－前任者の「コーヒー豆ショップ」を終了し新規ショップを一から企画・開店

2）概要：

①理論学習：文献購読による知見蓄積

・D.シュルツ「統合マーケティング」
・F.コトラー「マーケティング 3.0」
・野口智雄「店舗戦略ハンドブック」
・P.F.ドラッカー「マネジメント」
・栗木　契「マーケティングコンセプトを問い直す」

＊理論研究は、店舗を企画・開店する際にその知見ベースとなる。店舗企画、運営、マーケティング、コンセプトを柱に学習

②基礎調査：

・商店街視察：
－平日・土日の状況、立地、環境
・ヒアリング調査・関係性構築
a.広小路商店街１丁目
b.広小路発展会連合会
c.愛知県商店街振興組合連合会
d.豊橋商工会議所
e.ほの国百貨店
f.御油どんぐり工房
g.豊川 NPO パルク
・全学学生アンケート調査実施：
－回収標本数；600、
－設問数；Q1(7),Q2(5),Q3(9),Q4(3)

③店舗企画：

・店舗内容：販売商品洗出し
・開催イベント
・仕入れ先洗出し
・店舗レイアウト
－ヒアリング先企業、団体からのアドバイスと閉店中の店舗を視察しつつ、具体案企画を進めた

④店舗広報計画：

・店名企画
・店舗スローガン
・広報ツール；看板、店内グッズ、広告、開店イベント、大学提携イベント
・スタッフ体制・連絡網整備

⑤店舗運営：共同経営者募集

・大学事務局と調整の上、売り上げに基づく一定の報酬を支払うことで、学生との共同経営者を募集する。
・条件的にはかなり苦しく、なかなかボランティア的に、かつ学生への指導ができる人材確保を目指すが、苦戦中

⑥付随事業：店内整理・清掃

・2013 年1月に実施

Ⅲ. 連携先企業・団体（2012 年 12 月現在）

a.広小路商店街１丁目
b.広小路発展会連合会
c.愛知県商店街振興組合連合会
d.豊橋商工会議所
e.ほの国百貨店
f.御油どんぐり工房
g.豊川 NPO パルク

Ⅳ. 活動内容

1）4月
- ・文献購読①(D・シュルツ『統合マーケティング』)開始
- ・豊橋商工会議所ヒアリング

2）5月
- ・文献購読②（野口『店舗戦略ハンドブック』）開始　※①と並行で
- ・豊橋発展会連盟　岡会長訪問
- ・広小路商店街１丁目２区長　真野氏訪問

3）6月
- ・店舗企画スタート
- ・広小路商店街視察
- ・学生アンケート開始（～25日）
- ・アンケート集計作業開始
- ・文献①(D・シュルツ『統合マーケティング』)購読終了、文献③（F.コトラー『マーケティング 3.0』購読開始

4）7月
- ・アンケート集計作業終了
- ・ほの国百貨店ヒアリング

5）8月
- ・豊橋商工会議所ヒアリング

6）9月
- ・取扱商品、連携・仕入れ先と予算計画
- ・学生の店舗役割決定
  - －店長；小林、仕入れ；大橋、広報；平松、総務経理；兵頭、営業；渡辺

7）10 月
- ・広報計画立案－店名、スローガン
- ・どんぐり工房訪問・商談
- ・豊川NPOパルク来学、商談

8）11月
- ・店舗大掃除実施
- ・店舗レイアウト案企画

9）12月
- ・ポスター制作
- ・共同経営者募集開始

10）1月
- ・業者による店舗清掃完了
- ・店舗レイアウト、広報計画立案スタート

Ⅴ. 所見

学生 A:21023110　小林克希

私は、プロジェクト活動を通して、マーケティングやマネジメントなどの経営知識や専門知識だけでなく、コミュニケーション能力や協調性、責任感などが以前にも増して向上したのではないかと思います。プロジェクトでは、チャレンジショップの立ち上げから運営までをするという今まで経験したことのないことでしたが、持ち前の明るさとゼミのメンバーに助けられながらプロジェクトを進めることができました。

この川戸ゼミに入る前の私は何事にも積極的になれず、責任感も欠けていました。ショップでは店長を任され、メンバーを引っ張っていけるか不安でした。しかし、プロジェクトを進めていく中で、メンバーや先生、協力者の方たちとコミュニケーションをとっていくうちに自分がすべてを背負う必要はないのだと少し肩の力を抜くことができ、今では自分らしさを出しながらプロジェクトに取り組むことができています。プロジェクトは現在も継続中ですが、成功がすべてではなく、やることに意味があるのだと自分に言い聞かせ、積極的に取り組んでいきたいと思います。

学生 B:21023118 平松愛子

店舗の企画・運営は、何もかもが初めてのことばかりで、ほとんど何をすればよいのかわからず大変だった。話し合いのときには、アイデアが思い浮かばずとても苦労した。しかし、店名や店舗スローガンの決定、ポスター制作などプロジェクトに参加しなければ経験できなかったことばかりで、多くのことを学ぶことができた。また、活動していく中で、何をしなければならない

か、何が必要なのかわかるようになったと思う。プロジェクトでは豊橋商工会議所や広小路商店街など様々な団体の方々に協力していただき、社会人の方と関わるっていく中で、自分のビジネスマナーが足りないことや考えの至らなさについて考えさせられた。今後は、開店に向けてまだまだやらなければならいことも多く、様々な問題も生じてくると思う。しかし、プロジェクトと並行して行ってきた文献購読で得た知識とこれまでのプロジェクトで学んだことを活かし、これからも多くの事を学び、頑張りたい。

学生 C:21023205 大橋宏平

今回一年間を通しプロジェクト活動をしてきて、いかにショップ経営が難しいかが身にしみた。すぐに行動を起こすのではなく、まずは文献購読を行いメンバーの全員の経営知識を高め、次に共同経営者やパートナーを探す。　文献購読は毎週行い、これにより本を読み重要な点を見つけるスキルが高く備わったことが後半になるにつれ実感していった。共同経営者募集やパートナーの発見については、こちらは皆人生初体験なので、先生を頼りにしながら試行錯誤をし、徐々に会話能力が高まり、さらにショップ経営においてパートナーや共同経営者がいかに重要で大切な存在であるかが理解できた。ショップ経営とは全てを個人で判断、個人で行動と思っていたが、他の業者や周りの関係がいかにショップ経営を行う上で影響するかも分かった。我々のプロジェクトは他のプロジェクトと違い、長期目標である。それにより失敗は許されない。よってこれからも知識を高めよりよいショップ経営が実現できるよう力を注ぎたい。

学生D:21023219 兵頭康貴

プロジェクト演習を通して多くのことを学び、また多くの課題を発見した。まず、店の開店から運営ということ自体普通の学生のできないことなのでそれ自体が自分たちの学びに経験という形で蓄積されていっていると思う。一つの店を開店するまでにしなければならないことや自分たちで考えなければいけないことなど、このプロジェクトをするまでは知らなかった下準備など私が考えていたよりも多くあったことに驚いた。そしてそれを一つ一つこなすことで店を開店する楽しさ、大変さ、を知ることができた。また、店の開店準備をする上で社会人の方と意見を交換する場や意見を聞く場があり、社会人の方の考え方などを知れ就活前の勉強にもなった。そして私達と社会人の方の違いを比較するなど、プロジェクトを進行していくことで私達に足りない「行動力」「積極力」に気が付くことができ今後の自分たちの課題を発見することができ、自分自身を成長させる上でもプロジェクト演習は大きな力となっている。

Ⅵ. 完成物

①店名：SOZO ショップ「笑　　輪」
（しょうわ）

②店舗スローガン：「笑顔、見つかる」

③商品仕入れ協力者・社（2012/12 現在）

- 御油・どんぐり工房
- 豊川・NPO パルク
- 平松農園
- 豊川ゼリー

④販売商品リスト

商品名	販売期間			
	春	夏	秋	冬
地元産の大葉（青じそ）	↔	↔	↔	↔
地元産のみかん	↔	↔	↔	↔
地元産のトウモロコシ	↔			
地元産のゼリー	↔	↔	↔	↔
NPO製造パンケーキ	↔	↔	↔	↔
駄菓子（昔懐かしいお菓子）	↔	↔	↔	↔

⑤開店予告ポスター（予定）

豊橋エコタウンプロジェクト
～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～

見目プロジェクト

Ⅰ．プロジェクトメンバー

教員：　見目喜重

学生：　青木優

古野優輝

高畑広恵

高藻惇史

Ⅱ．プロジェクト概要

近年、資源の枯渇化、地球温暖化といったエネルギー・環境問題への対応から、再生可能エネルギーの普及拡大が求められている。その中でも太陽光発電は、クリーンであることをはじめ、どこにでも設置が容易である、可動部がなく静穏であるなどの利点があるために、注目を集めている。

その一方で、太陽光発電システムの導入量の増大に伴い、システムの故障発生や長期的な性能劣化といったシステムの長期信頼性の評価が重要な課題となっている。

太陽光発電の長期信頼性の評価には、ある地域において複数のシステムの長期的なデータ収集・分析が望まれる。しかしながら、民間施設に設置された太陽光発電のデータを長期的に収集することは困難である。一方で、公共施設に設置されたシステムについては、データの提供・収集が比較的容易であると思われる。

こうしたことから、本プロジェクトでは、豊橋市において平成22年3月末に市内全74小中学校に太陽光発電設備の設置が完了していることに着目し、太陽光発電システムの長期信頼性を評価するために市内小中学校のシステムの状況調査を行う。

Ⅲ．連携先企業

豊橋市教育委員会教育政策課

Ⅳ．活動内容

(1) 太陽光発電の基礎知識の習得

(1-1) 太陽光発電システムの原理と構成

太陽光発電システムは、太陽光エネルギーを私達が利用しやすい電気エネルギーに変換するシステムである。システムは、主に太陽電池、接続箱、パワーコンディショナで構成される

発電の流れは次の通りである。

① 太陽からのエネルギーをパネルで受け､直流電力が発生

② 直流電力を接続箱で集約

③ 集約した直流電力をパワーコンディショナにより交流電力に変換

④ 分電箱/配電盤を経て家庭に交流電力を供給

以上の流れにより、私達は発電した電気を使用できるようになる。

(1-2) 太陽光発電の特徴（長所・短所）

太陽光発電は、次のような長所や短所を持つ。

〇長所

・可動部分がほとんどなく、メンテナンスが不要

・日中に発電をするので、電力消費量の削減に効果的

・発電時に化石燃料を使わない

・屋根や壁等の未利用スペースを利用可能

・送電設備のない遠隔地の電源としても利用可能

〇短所

・導入時のコストが高い
・発電が天候などの自然条件に左右される（夜間は発電不可）
・施設の屋根に設置した場合、屋根に負荷がかかる
・現状では発電コストが高い（一般家庭で導入コスト分の電力を発電するには、平均で 20 年かかると言われている）
・設置方法によって発電量が大きく異なる　（方位・角度、日陰の影響（障害物・ビル））
・長期信頼性の問題が指摘されている（パワーコンディショナーの耐用年数は 10 年であるが、その故障率が1年以内で10%以上との報告もある）

(1-3) 発電システムの製造・販売メーカー

太陽光発電の累積導入量は、2011 年度は1位：ドイツ、2位：イタリア、3位：日本、4位：スペイン、5位：アメリカとなっており、日本は比較的太陽光発電の普及が世界の中でも進んでいる国である。

太陽光発電システムの国内外の製造・販売メーカーには、主に次のような会社がある。

＜国内＞シャープ、京セラ、パナソニック
＜海外＞サンテックパワー、カナディアンソーラー、トリナ・ソーラー

(2) 太陽光発電量の影響要因の検討

(2-1) 日射 / システムによる要因（パネルの設置方法など）

太陽光発電システムの発電量は、日射量に変換効率を乗じて求められる。この変換効率は年間を通してほぼ一定であることから、年間日射量が発電量に大きく影響する。

年間日射量に影響する要因は大きく分けると、①天候、季節、温度となどの気象要因、②システムの設置位置、太陽電池パネルの設置方位・傾斜角度、影の発生などといったシステムの設置状況による要因の二つに分けることができる。

(2-2) 設置状況による発電量への影響分析

前述したように、方位・傾斜角度などのシステムの設置状況により、太陽光発電の発電量は大きく変化する。この変化がどの程度なのかを検討するために、日本気象協会の計算ソフト（METPV11）[1]により、方位・傾斜角度による豊橋の年間日射量の変化を計算した。

図１にはその結果を示す。同図から、豊橋で年間日射量が最大となるのは方位が南、傾斜角度が 35°であることがわかる。また、方位が南の場合と南西および南東とを比較すると、年間日射量の最大値に 6%の開きがあることが分かる。

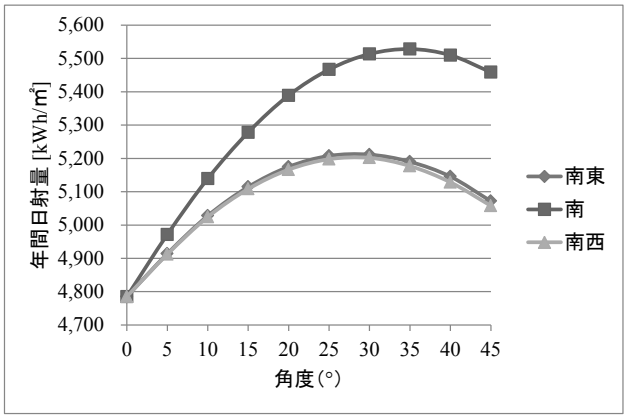


図１　方位・傾斜角度による豊橋の年間日射量の変化

次に、小中学校のシステム設置状況を分析するために、豊橋市教育委員から提供いただいたデータを集計した。その結果を表１および図２に示す。

市内小中学校の設置方位は南東、南、南西の３方向であり、また傾斜角度：30°で設置されている場所が多いことが分かる。結果として、年間最大日射量となる条件（方位：南、傾斜角度：30°）での設置が 70%に達した。しかしながら、全ての学校で同じというわけではなかった。

表１　豊橋市内小中学校の太陽光発電システムの設置状況（方位および傾斜角度）

		方位			合計（校）
		南東	南	南西	
角度	0				0
	5				0
	10				0
	15	1			1
	20		2		2
	25				0
	30	8	54	9	71
	35				0
	40				0
	45				0
合計（校）		9	56	9	74

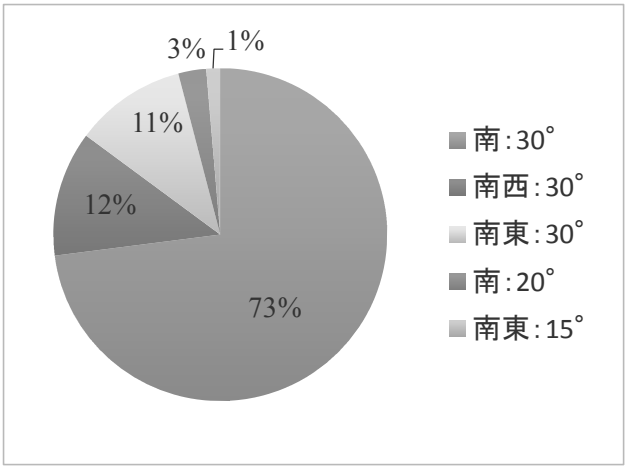


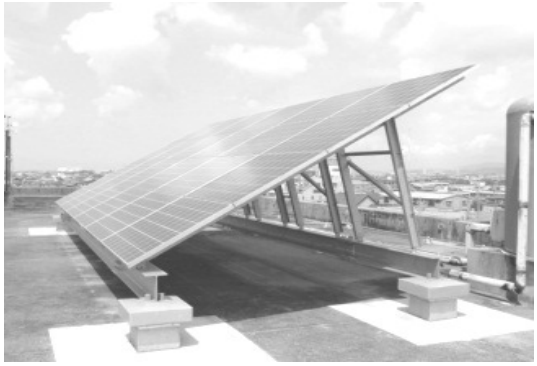
図２　豊橋市内小中学校の太陽光発電システムの設置状況（方位および傾斜角度）

(3) 豊橋市の太陽光発電の現状調査・研究

豊橋市では、平成22年３月末に市内全小中学校74校に太陽光発電設備の設置が完了している。

図３には実地調査を行った羽田中学校および吉田方中学校の太陽光発電システムの設置状況を示す。このように、方角・傾斜角度、設置方法、障害物の有無等が小中学校毎に異なる。

なお、豊城中学校と吉田方中では、発電量と日射量・気温の計測がパソコンにより連続して自動的に行われている。



(a)　羽田中学校

(b)　吉田方中学校

図３　小中学校へのシステムの導入例

豊橋市では、小中学校への太陽光発電システムの導入だけではなく、様々な環境活動に取り組んでいる。

その一つが環境に配慮した電力調達契約の導入である。2011 年度の豊橋市の電力購入額の合計は1,004,836（千円）である。その内の電力購買実績は244,037（千円）であり、合計の内の電力購買実績の占める割合は約24.3%となる[2]。主な電力の使用先としては豊橋市庁舎、豊橋競輪場、私立小中高等学校、豊橋市保健所があげられる。

また豊橋市の地球温暖化対策室では新エネルギー導入促進事業にも取り組んでいる。その概要は、「化石燃料から持続的利用が可能なエネルギーへの転換を図るため、太陽光発電の設置者への補助や公共施設への導入及びその環境勝ちを活用するとともにメガソーラー発電の導入を促進する。」というものである。

今後３年間の取組として、次のことがあげられている。

・太陽光発電システム設置・整備事業補助金
・穂の国とよはし芸術劇場等への設置
・グリーン電力証書の発行
・メガソーラー発電の促進

(4) 市内小中学校の太陽光発電の稼働状況訪問調査

秋学期は、市内小中学校の訪問調査を本格的に行った。太陽光発電の長期信頼性を評価するためには、故障状況と性能劣化の両面からシステムを調査する必要がある。今回は、故障状況を確認する訪問調査を行った。また、一部の小中学校からは発電データを提供いただき、そのデータをもとに性能劣化の分析を行った。

(4-1) 訪問調査の流れ

訪問調査は、以下の流れで実施した。

①豊橋市教育委員会から各小中学校の担当者に依頼状を送付
②本学より各校に依頼状を送付
③メンバー各自が各校に訪問のアポイントメントを取る
④訪問調査を実施
⑤訪問終了後、学校にお礼状を送付
⑥全訪問調査終了後、豊橋市教育委員会へ報告

このように、訪問調査を行うために、電話対応マニュアルを作成するとともに、訪問担当校の分担の決定、質問項目の決定、訪問終了後の確認の連絡、お礼状の作成を行った。

(4-2) 訪問調査内容

訪問調査では、太陽電池パネルのメーカー、パネルの設置枚数、方位、傾斜角度、パネル周囲の障害物の有無、インバーターの場所など、システムの設置状況を確認した。また、表示板で発電状況を確認するとともに、システムの事故・トラブルの有無、発電量の測定の有無について担当の先生に質問した。さらに、環境教育の実施状況や非常用電源装置の有無、グリーン電力証書についても質問した。

(4-3) 調査結果

訪問調査の結果、表 2 に示すようにシステムの運転に支障をきたす事故・トラブルのあった学校が 74 校中 7 校であった。その主な原因はインバーターの故障と太陽光パネルの破損であった。

この他にも、表示板のトラブルなどが 7 校で発生していた。

表 2　市内小中学校の太陽光発電システムのトラブルの発生件数

故障内容	H23	H24	累計
インバーター	2	2	4
太陽光パネル	1	1	2
システム停止	1	0	1

(4-4) データ分析（システムの性能劣化の調査）

太陽光発電システムの性能は、変換効率（＝発電量÷日射量）で評価される。この発電量と日射量は、太陽電池パネルの設置方位･角度により大きく変化する。

豊橋市内小中学校では、3 校で発電量が計測されている。図 4 には平成 12 年にシステムが設置された新川小学校の月発電量の推移を示す。図中の青線は月発電量を、赤線は伊良湖の日照時間を示している。

システムの性能劣化を評価するためには、この発電量と日射量から変換効率を求める必要がある。しかし、同校では日射量データは記録されていない。そのため、日射量と強い相関を持つ日照時間と発電量を比較することで、性能劣化の有無を推定することとした。

豊橋の日照時間の観測地点は平成 20 年に変更されている。これにより、日照時間の値に差が生じており、平成 12 年から一貫した比較をすることができない。そこで、豊橋の日照時間とおなじ傾向で変化している伊良湖の日照時間で比較をすることとした。

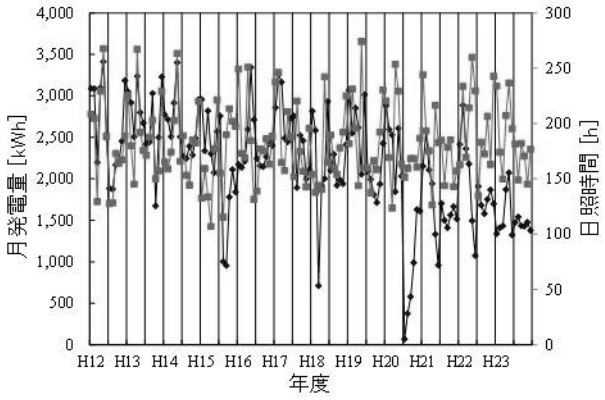


図４　新川小学校の月発電量の推移

この図から、季節変化や年度の違いによって日照時間・月発電量の両者は変動しているが、日照時間が一定の範囲内で変動しているのに対して、月発電量は減少傾向にあることが分かる。このことから、システムの性能劣化が疑われる。

太陽電池の性能が長期的に劣化することは必然であるが、この劣化があらかじめメーカーが提示している範囲内であるかどうかが劣化の有無の評価で必要になる。そのためには、日射量を用いたより精度の高い詳細な分析が必要である。

Ⅴ．まとめ

今回のプロジェクト活動により、太陽光発電の設置が各小中学校により異なる事が分かった。また、訪問調査の結果、2 年間で 7 件のトラブルが発生していたことが分かった。

今後は、豊城中学校と吉田方中学校のデータを用いながら、新川小学校を含めた 3 校の太陽光発電システムの性能劣化について、より詳細な分析を試みる予定である。

そのためにも、次年度以降も引き続き、訪問調査を継続する予定であるだ。

Ⅵ．所見

・青木優

私たち見目ゼミナールでは、太陽光発電の仕組みと豊橋市内小中学校の太陽光発電システムについて調査研究を行った。この小中学校訪問調査では、電話対応マニュアルを一から作りから始め、担当する学校に訪問調査の許可を頂くため各自電話をかけた。今までこのような用件で電話をかけたことはなく、直接会話をするよりも緊張した。また担当の先生が不在などで連絡がとれず、なかなか予定が合わないということもあり、日程調整にはとても苦労した。

訪問日当日は、パネルの設置状況・システムの故障の有無などの確認を行った。学校ごとに設置状況が異なっていたり、ソーラー発電システムについての学校の関心度の違いなど、実際に調べなければ分からない事も分かった。また、訪問結果をまとめることにより、故障などの不具合が多く発生していること、発電効率の経年劣化が起こっている可能性があることも分かった。

このように、2011、2012 年度の調査結果から、太陽光発電システムの長期信頼性に不安があることが分かった。しかし、正確な長期信頼性の評価には、継続的に調査を進めていく必要がある。今後も訪問調査を継続して行うことでデータを正確にし、私達が集めたデータが将来的に太陽光発電システム普及の発展に役立つようになって欲しいと思う。

・高畑広恵

プロジェクトの中で思ったこと

現在、プロジェクトの背景にもあるように環境問題が騒がれている、また、2012 年から固定価格買い取り制度の開始を背景に、国内では太陽光発電所の建設が盛んに行われている。鹿児島では国内最大級となる大規模太陽光発電所（メガソーラー）の建設が 2013 年 3 月に着工予定であり、また身近なところでは、豊橋市の隣・田原市で、現段階では鹿児島に続き国内第 2 位となるメガソーラーの建設が行われている。さらに、地元豊橋では老津町にて東海地方初となる公共用地を活用したメガソーラー発電事業が進んでいる。現在、このように太陽光発電システムの導入が各地で推し進められている。こうした中で、本プロジェクトの目的である長期信頼性の評価は、これから増々注目される

問題となるであろう。

今回、プロジェクト活動の一環で豊橋市内 74 校の小中学校を訪問して調査を行った。その結果、数件の故障やトラブルが見受けられた。数件とはいったものの、市内全校で見た場合、率にしてみれば故障率は10%弱となり、現在の一般的な工業製品（例えば自動車の故障率：約 5%未満）と比較すると、とても大きいと思われるような傾向が見られた。システム設置後の実態を垣間見ることができた。太陽光発電のビジネスが盛んになるとともに、世論の太陽光発電への関心も高くなる。今後の太陽光発電システムの普及とその結果起こりうるトラブル、またメーカー側の対応の仕方に着目し、エネルギー問題を国がどう取組むかに注目していきたい。

また、訪問調査で担当の先生にお話しを伺い、蓄電装置を取り付ける学校と取り付けない学校が存在することが分かった。ある中学校に伺った際、そのような話は聞いていないということであった。後にその小学校避難先として設定されていないために設置予定には入っていないことを知った。

他の小学校では、避難訓練で生徒全員を屋上を上がらせることにしている。小学校の屋上からは海が見え、防波堤がある。しかし、総合学習調べで、子供たちは防波堤が途中から作りが違っているのを知っており、もし大きな津波が発生すれば防波堤が壊れる可能性があることを理解しているだろうと担当の先生はおっしゃっていた。万が一防波堤が崩れ、生徒が屋上に避難しているところに水が押し寄せてくれば、屋上は連絡も取ることのできないただの離島のようになる。そんな時、屋上の太陽光パネルから直接電気をとることができれば無線を使い連絡ができるのではないかということをおっしゃられていた。この話を伺い危機感を覚えた。

学校による状況の違いを把握した上で、市は動き出した方が良いのではと心の底から感じた出来事であった。

プロジェクトを通して学んだこと

何一つ知り得ない状況でスタートしたプロジェクトは、まず基礎知識の習得から始まった。特に苦い思いをした経験が二つある。一つは、個人で調べた案件をまとめ、学校でプロジェクトメンバーに報告することだ。情報吸収の仕方は一人ひとり違う。自分が分かりやすく提示できたと思い込んだ情報をそのまま表しても、相手は提示されたものに対し頭を抱えてしまうかもしれない。自分が知り得た情報のポイントを絞り、先入観・主観を加えることなく簡略化して上手く情報を伝えることがいかに難しいことかを気づかされた。

二つ目は学校訪問の際の質問時である。質問に対する答えとともに質問が返って来た時、上手く返答出来なかった。下調べの大切さと質問する際の心構えを考えさせられた。質問を投げかける原因となった経緯や、疑問の発生源、基礎知識を自分の中である程度理解していなければ、知りたいことを深く聞き出すことができない。今回学んだことは普段の生活の中でも言えることだ。プロジェクトの中で経験した苦い思いや、失敗を教訓に、今後の生活で活かしていきたい。

・高藻惇史

私達は、プロジェクト活動を 4 月に太陽光発電の基礎知識の習得から初め、調査・研究を行ってきた。最初は、太陽光発電のことを聞いても屋根に設置されているイメージだけで考えていた。しかし、太陽光発電システムは、太陽からエネルギーを受けることや、直流電力が発生して接続箱でそのエネルギーを集約し、パワーコンディショナにより交流電力に変換していることなどを学んだ。実際は、家庭だけではなく小中学校にも太陽光発電が設置されていることを知り、秋学期から本格的に調査を行った。

調査を行う中で、太陽光システムはさまざまな方法で設置されており、メーカーの種類によってパネルの枚数が違うことを知った。質問により、太陽光発電システムのトラブルはないことが多かったが、昨年度と比べると今年はトラブルが多いことを知った。その他の質問で、環境教育に関しては、ペットボトルのキャップ集めやアルミ缶集めなどの活動を実施していることを知った。

・古野優輝

今回のプロジェクトを通して、今まで知らなかった太陽光発電の基礎知識や種類、また豊橋市内の小中学校の太陽光発電の現状や抱える問題点などを知ることができた。このようなことを知るために、ゼミ内のメンバーで協力して、太陽光発電システムについて分担して調べた。調べた結果、太陽光発電は、メーカーごとに値段や発電量に差があることなどが分かった。また、豊橋市の太陽光発電関連の政策においても、導入する際の補助金などは充実しているが、導入後のメンテナンスなどに対する政策はないことなどを知ることができた。

また、直接豊橋市内の小中学校を訪問するために、メンバーで事前に電話応対マニュアルを作成し、質問項目を検討した。訪問終了後には、お礼状を送付した。このように、社会人としてのマナーを勉強することができた。この経験は、社会に出た際に当然に必要なことなので、学生の間に経験することができたのは、メリットだと感じた。

【謝辞】

本プロジェクトの実行に際しては、豊橋市教育委員会教育政策課様、また市内小中学校の教員の皆様に、大変お忙しい中、多大なご協力を賜りました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

【参考文献】

(1) 独立行政法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構 日射量データベース
http://www.nedo.go.jp/library/nissharyou.html
（2012/07/28）

(2) 全国市民オンブズマン連絡会議　自治体電力購入調査
http://www.ombudsman.jp/nuclear/denki-2.pdf#search='%E8%B1%8A%E6%A9%8B%E5%B8%82+%E9%9B%BB%E5%8A%9B+pdf'
（2012/11/30）

診療情報管理士認定試験の学習環境構築 2012

五味プロジェクト

Ⅰ.プロジェクトメンバー

・中濱聡史(プロジェクト代表者)
・小田郁太
・内藤愛結実
・渡辺大祐
・幸田紘樹（サポートメンバー）
・櫻井駿（サポートメンバー）
・五味悠一郎先生(指導教員)

Ⅱ.プロジェクト概要

診療情報管理士認定試験合格を目的に、診療情報管理士認定試験の勉強や外部(医療機関)との交流、及び認定試験対策に役立つデジタル問題集の作成を目標としている。平成 24 年度は平成 23 年度よりも高い合格率を目指し、診療情報管理士認定試験の勉強を行いながらプロジェクト活動を行っている。

Ⅲ.連携先団体

・藤田保健衛生大学
・鈴鹿医療科学大学
・岐阜大学医学部附属病院
・医療法人羔羊会　弥生病院
・医療法人　名南会　名南病院
・医療法人　光生会病院
・浜松赤十字病院
・国家公務員共済組合連合会 名城病院
・名古屋第一赤十字病院
・石川県立中央病院
・三重県厚生連　いなべ総合病院
・岐阜県立　多治見病院
・静岡県立　こども病院

Ⅳ.活動内容

今回のプロジェクトで実際に行った活動は以下の通りである。

1） 認定試験合格に向けての自主勉強会
2） 認定試験対策講座の企画運営
3） 認定試験対策講座の宣伝
4） 診療情報管理士のデジタル問題集の作成
5） 診療情報管理士学術大会への参加

1. 認定試験合格に向けての自主勉強会

診療情報管理士を目指している豊橋創造大学の学生同士で、認定試験に向けて勉強する。

1.1 方法

① 一人(その日の担当)が問題集の範囲を指定する。担当は毎週ローテーションし、最終的に全員が担当する。
② 担当以外のメンバーは指定された問題集の範囲を解く。
③ 担当は勉強会までに解説を作成し、答え合わせの時間に配布する。

1.2 結果

1） 春学期は毎週木曜の 3 限を勉強会の時間として実施した。
2） 秋学期は毎週火曜の 5 限終了後を勉強会の時間として実施した。

2. 認定試験対策講座の企画運営

診療情報管理士認定試験に合格できるよう、平成 25 年度認定試験を受ける人を対象に対策講座を企画・運営した。

2.1 方法

- 対策講座の日時を決定した（表 1)。
- 認定試験対策講座を実施している(図 1)。
- 認定試験を受講した人にアンケートを実施する。

表 1　認定試験対策講座の日程

第1回(基礎)	11月24日(土)	基礎科目模擬試験60分　解答･解説30分
第2回(専門)		専門科目模擬試験60分　解答･解説30分
第3回(分類)	10:40 ～ 16:20	分類法模擬試験90分
第4回(基礎)	12月8日(土)	基礎科目練習問題60分　解答･解説30分
第5回(分類)		分類科目練習問題60分　解答･解説30分
第6回(-)	10:40 ～ 16:20	練習問題の結果を見て　弱点を補強、質問受付
第7回(基礎)	1月12日(土)	基礎科目模擬試験60分　解答･解説30分
第8回(専門)		専門科目模擬試験60分　解答･解説30分
第9回(-)	10:40 ～ 16:20	練習問題の結果を見て　弱点を補強、質問受付
第10回(分類)	1月26日(土)	分類法模擬試験90分
第11回(分類)		分類法模擬試験の解答･解説30分　分類法練習問題60分
第12回(-)	10:40 ～ 16:20	練習問題の結果を見て　弱点を補強、質問受付
第13回(分類)	2月9日(土)	分類法復習
第14回(-)		受講者の要望に応じた科目を講義
第15回(-)	10:40 ～ 16:20	受講者の要望に応じた科目を講義

図 1　対策講座の実施風景

2.2 結果

対策講座の運営は当初の日程通りに進められている。

3.　認定試験対策講座の宣伝

3.1 方法

以下の方法で認定試験対策講座を宣伝した。

1)　各医療機関への宣伝

- 医療機関向けの案内文を作成した。
- 案内文の発送先及び件数をキャリアセンターと相談した。
- キャリアセンターが学内向けに公開している医療施設リストから、案内文を発送する医療機関を決定した。
- 医療機関に送る封筒の作成と封入作業を行った（送付状・対策講座の案内文・申込用紙など）（図 2)。
- 作成した封筒を医療機関に発送した。

診療情報管理士認定試験の対策講座開講のお知らせ

拝啓　秋涼の候、貴院益々ご隆昌のこととお喜び申し上げます。

　さて、豊橋創造大学情報ビジネス学部では診療情報管理士認定試験の合格率向上のため、平成 21 年度より「診療情報管理士認定試験対策講座」を企画運営しております。詳細は同封いたしました案内に記載させて頂きました。皆様のご参加お待ちいたしております。

　なお、ご不明な点がございましたら下記までお問い合わせください。

　未筆ながら、貴院ますますのご発展を祈念するとともに、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

敬具

図 2 認定試験対策講座の案内文（抜粋）

2)　Web 上での宣伝

- 診療情報管理士のコミュニティサイトに対策講座の案内文を掲載した（図 3)。

認定試験対策講座について　投稿者:豊橋創造大学学生　投稿日:2012年10月16日(火)16時47分48秒

先日投稿させていただいた書き込みの内容に誤りがありましたので、訂正させていただきます。
この度は混乱を招くような投稿を行ってしまい、ご迷惑をおかけしました。

診療情報管理士を目指している皆様へ

私達は、愛知県豊橋市にある豊橋創造大学で診療情報管理士の勉強をしている学生です。
前年度に引き続き、学内で診療情報管理士認定試験の直前対策講座を企画・運営することとなりました。

平成24年11月24日～翌年2月9日を中心に、模擬試験の実施や解説を先生方にやっていただく予定です。
詳しくは、

http://project.sozo.ac.jp/portal/node/187

をご参照下さい。
学外からの参加も大歓迎で、参加費は￥20,000です。
皆様のご参加をお待ちしております。

図 3 新･診療情報管理士を目指し勉強中の方の BBS

- 豊橋創造大学の TOP ページのトピックスに対策講座のお知らせを掲載した（図 4)。

図 4　豊橋創造大学　診療情報管理士認定試験対策講座のご案内

平成24年度　診療情報管理士認定試験対策講座のご案内（五味ゼミ）

作成者:sozostaff 作成日:木, 10/04/2012 - 12:50

豊橋創造大学 五味ゼミでは、就業力育成支援事業の一環として行われる学生プロジェクトとして、 診療情報管理士認定試験対策講座の企画・運営することとなりました。

詳しくはこちらのページをご覧ください。

⇒　平成24年度　診療情報管理士認定試験対策講座について（五味ゼミ）

※ 応募期間終了のため締め切りました

3.2 結果

以下の効果があった。

- 18 名の外部申込者が集まった。
- 様々な県からの申込があり、中には大分県からの応募もあった（表 2)。

表 2　県別外部申込者数

県	人数
愛知県	6名
静岡県	3名
岐阜県	3名
石川県	2名
長野県	1名
三重県	1名
愛媛県	1名
大分県	1名
合計	18名

4. 診療情報管理士のデジタル問題集の作成

認定試験の勉強方法は紙媒体（教科書、問題集）以外にないだろうかと考え、パソコンや iPad でも勉強できる CBT を作成した。

4.1 方法

診療情報管理士認定試験に出そうな問題を、教科書を参考に自分たちで作成し、CBT に登録する（図 5）（図 6）。

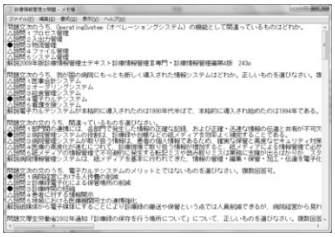


図 5 診療情報管理士問題

図 6CBT のテスト画面

4.2 結果

平成 25 年度 1 月現在、CBT 作成は作業が遅れており、200 問が完成しているが、当初の目標である 400 問に届いていないのが現状である。スケジュールの見直しなどの対策をとる必要がある。

5. 診療情報管理士学術大会への参加

平成 24 年度の診療情報管理士学術大会が名古屋の国際会議場で 9 月 6 日、7 日の両日に行われた。

5.1 方法

以下の行動をとった。

- 4 年の先輩方の発表を視聴した。
- 医療機関で勤務されている方の発表を視聴した（図 7）。
- 医療機関の方と名刺交換をして交流した。

図 7　学術大会発表の様子

5.2 結果

実際に医療機関で働いている診療情報管理士の方の発表を聞いて、多くの知識を得ることができた。

名刺交換によって診療情報管理士の方々と知り合うことができた。

V. 所見

A)　中濱聡史

診療情報管理士認定試験を受ける人に対策講座を知ってもらうためにはどうすればよいかと考え、去年対策講座を企画・運営した先輩にアドバイスを頂きました。アドバイスを元に、病院へ対策講座の案内状を封筒で送付し、診療情報管理士認定試験を受ける人達が見ているインターネットの掲示板に案内を載せました。

結果、去年より多くの参加者を募ることができ、頑張ったかいがあったと実感しました。しかし、対策講座の準備に当初の予定よりも大幅な時間がかかってしまい、診療情報管理士問題集のデジタル化のスケジュールに遅れが発生してしまいました。対策講座は平成 24 年 11 月末から始まっており、講座の運営は初めてだったので、案内や受付等の業務に不慣れなため、運営で戸惑う部分も数多くありましたが、講座を重ねるにつれ、スムーズに運営できるようになりました。

現在は診療情報管理士認定試験も近いこともあり、なかなかプロジェクト活動に着手できませんが、一段落着きましたら、問題作成などのプロジェクト活動に意欲的に取り組んでいきたいと思います。

B)　小田郁太

認定試験対策講座に関する活動の中でも特に大変だったのは、案内の封入作業です。この作業は、案内を Word で作成し、完成した案内文を封筒に封入して、約 200 件の医療機関宛に送付するというものでした。同時進行の問題作成活動が予定より遅れたことにより、作業スケジュールが圧迫されてしまい、1 日で 200 通以上の封筒に封入れするはめになり、4 時間を越える大作業となってしまいました。

病院への封筒の送付以外にも、インターネットの掲示板で参加募集を行いましたが、私が最終確認を怠ったことにより、誤って昨年の募集ページへのリンクを貼り付けてしまうというミスを犯してしまいました。私たちはこれに対し、後日管理人様へお詫びとともに削除依頼のメールを送付し、掲示板へお詫びと今年度の募集ページへのリンクを投稿し、対応しました。このミスにより、管理人様や参加希望の皆様には迷惑をおかけしてしまい、大変反省しております。しかし、同時に作業の最終確認の重要さ、お詫びの文の書き方を学ぶ事ができ、今となっては決してデメリットばかりの体験ではなかったと受け止めております。

平成24年11月から始まった認定試験対策講座ですが、診療情報管理士を目指す外部の皆様と共に勉強に励むことができ、モチベーションを高める良い機会になっております。試験まであまり時間は残されておらず、いよいよラストスパートといったところですが、このモチベーションを維持し、合格を目指して取り組んでいきたいと思います。

C)　渡辺大祐

私自身は診療情報管理士認定試験は受けず、あくまで補佐という形でこのプロジェクトに参加したので、大まかな流れしかわかりませんでした。最初に決まった問題集を自分たちで作るところから始まり、現在進行中の外部の方々が参加する診療情報管理士認定試験対策講座の運営まで、部分的に参加してきましたが、どの作業も時間がかかり大変でした。中でも外部へ送った200枚以上の認定試験講座参加用紙のファックス番号を間違え、全く関係のない所へファックスが送られてしまい、相手方にご迷惑をおかけした時は、自分たちの確認不足や未熟さを知りました。この件があったことで、今後同じミスをしないようにしっかり確認することや、こうなってしまった時の対応の仕方などを知ることができ、同時に学生でよかったと感じる場面でした。私は、診療情報管理士認定試験は受けませんが、メンバーの方々が合格できるように、私にできることは積極的にやっていきたいと思います。

D)　内藤愛結実

診療情報管理士認定試験対策講座の宣伝作業において、外部申込者の方々とのビジネス文書のやり取りが大変だった記憶があります。同じ内容の文章でも、送る媒体によって文章を変えることは、書き始めたころは苦労しました。対策講座当日までの外部申込者との情報のやりとりは、ビジネス文書に触れるよい経験になったと思います。

もう一つ苦労した経験として、メーリングリスト（以下 ML）の設定に手間取った事が挙げられます。今回はグーグルの ML を対策講座の連絡手段として使用しましたが、ゼミメンバー一同 ML の設定が初めてだったので、五味先生の助言をいただきながら設定しました。

今年は診療情報管理学会学術大会が名古屋で開催され、私たち 3 年生も実際に職場で活躍されている診療情報管理士の講演を聞く機会に恵まれ、多くの知識を得ることができました。

診療情報管理士認定試験まで残り僅かとなり、対策講座を受講している身として、合格目指して頑張りたいです。

参考文献

1)　新・診療情報管理士を目指し勉強中の方の BBS
<http://8412.teacup.com/himmezasu2/bbs>
(13/1/10)
2)　ベテラン診療情報管理士の BBS 兼 DPC 情報交換 BBS
<http://8416.teacup.com/dpc2/bbs>
(13/1/17)

田原ウィンドファーム
～社会的企業の実証研究～

中野聡プロジェクト

I. プロジェクトメンバー

荻野　駿平
二木　誠司
曽田　記義
板倉　芳貴

Ⅱ．概要

風力発電の現状と将来性を学ぶため、風車が多く存在する田原市を活動の対象に選定。社会性、事業性、将来性を調べ、評価した。学生はこの過程を通して風力発電の構造や仕組み、これからの可能性を学ぶ。

Ⅲ．連携先企業

愛知県田原市役所　市民環境部エコエネ推進課計画推進 G

Ⅳ. 活動内容

2012 年 4 月～5 月　テーマを設定。田原のウィンドファームに決定。
6 月　7 月の田原市役所のインタビューをするために図書やホームページで資料集め、風力発電ついての学習を行った。
7 月　田原市役所とコンタクトをした。そのための質問票を作成し、事前にメールで質問票を田原市役所に送った。
8 月 6 日　田原市役所市民環境部エコエネ推進課計画推進グループを訪問。杉浦清明氏（副主幹）、高橋知子氏（課長）、鈴木孝明氏のお話と質疑応答。そこで事前に送った質問票に対する回答についてお話をした。その後田原臨界風力発電所（J パワー）と田原リサイクルセンターを見学しに行った。風車を普段は遠くから見ているためそこまで大きいとは思っていなかったが、近くで見てものすごく大きくてとても迫力があった。
10 月　電源開発株式会社会社（J パワー）にヒアリング照会。
９～11 月　個別テーマの分析と発表資料の作成。テーマごとに作成したため分量が多くなってしまった。そのため、調整に時間がかかり、完成がぎりぎりとなってしまった。
12 月 18 日　プロジェクト演習成果発表会。

Ⅴ. 所見

二木　誠司

今回田原市役所にご協力をいただき、風力発電について調べて学んだところ、風力発電がこれからの世界にとってとても重要視されてくるものだと感じだ。原発問題が騒がれている中、CO_2 を排出してしまう火力発電にも勝る風力発電や太陽光発電が主流になってくるのではないか。固定価格買い取り制度の改定により、より風力発電や太陽光発電が普及しやすくなった。しかし、まだコストや低周波騒音などの問題もたくさんある。これから技術が進み誰でも手が出るような価格になればなお、地球温暖化対策へ貢献できることになると思う。

また、洋上風力発電が実現できれば立地や低周波騒音の問題も解決できる。ただ洋上風力発電の場合、漁師などとの連携が必要になる。人に対する低周波騒音の問題が解決できても、海に住む生き物に影響を与えるかもしれない。問題は山積みだが、地球温暖化対策になる風力発電に期待したい。

曽田　記義

今回のプロジェクトで風力発電について調査することで多くの発見があった。プロジェクトで風力発電に触れるまえから風力発電については多くのデメリットがあると考えていたが、調査するにつれより具体的なメリットとデメリット、対策や未だ解決できていない問題などを調べる機会となった。それにより風力発電の将来性、固定価格買い取り制度や洋上風力発電など、今までは知らなかった新しい面に触れることができた。

今回モデルとした田原市での風力発電を用いた自給自足を目指すウインドファームというプロジェクトを通じて、再生可能エネルギーの重要性や利便性、問題点を調べることで田原市の目的である自給自足というものがどれ程難しいことなのか、それを実現した場合どれ程のメリットがあるのかということを把握することができた。

風力発電に関連した FIT について調べ、世界の風力発電の普及率や買い取り価格の推移などによって世界の FIT への姿勢や実態を学ぶことができた。

板倉　芳貴

プロジェクトで風力発電についての調査をした。調査する前までは、風力発電のことは知らないことが多く、知っていることといえば風の力でプロペラを回して発電することぐらいだった。なので、このプロジェクトは風力発電について知れる機会であった。主にこのプロジェクトでは田原市の風力発電について調査をした。調査をしていくうちに風力発電のメリット、デメリットやコストなど様々なことが分かってきた。風力発電のまだまだ未解決のことやこれからの将来のことについてもいろいろと知ることができた。風力発電の将来が少し楽しみになった。

このプロジェクトで実際に田原市役所へ行き、インタビューを行った。インタビューはとても緊張したが、とても良い経験なった。そのあと、実際に風車を見に行った。普段は風車を近くで見ないので、実際近くで見たときは驚いてしまった。回る音も聞けたのでとてもよかった。このプロジェクトを通して、メンバーと一致団結してやる大切さを知ることができました。

荻野　駿平

所見

プロジェクト演習で風力発電のことについて調べた。田原臨界風力発電は、5 つの立地条件を満たしていることが分かった。風況が良い、土地利用が可能、送電線と輸送道路へのアクセス、地域環境への影響が少ない、地元の協力が得られる。これらが基本条件であった。自然エネルギーによる発電量は、市内風力発電総出が約 47300kw で一般家庭では約 3 万世帯分であり、約 130%である。また市内公共施設等太陽光発電総出力は約 300kw で、一般家庭では約 500 世帯分である。自宅・事業所用太陽光発電総出力約 4300kw であることが分かった。

風力発電の課題は、発電量の季節性、低周波騒音、バードストライク、FIT による電力価格上昇、少ない雇用効果などである。最後に、田原ウィンドファームの将来について考えた。そこには、メガソーラーの計画や洋上発電の可能性(福島の例)、市民ファンドと NPO による運営の可能性が含まれる。今までプロジェクト演習をやってきて、風力発電は非常に重要な役割を果たしているということが分かった。

豊橋からオレオレ詐欺をブッ飛ばせ！！

野口プロジェクト

Ⅰ. プロジェクトメンバー

・ 21023106 伊藤 佳祐
・ 21023111 史 雯雯
・ 21023203 今泉 裕希
・ 担当教員 野口 倫央

Ⅱ. プロジェクト概要

Ⅱ-1 背景と目的

野口ゼミナールでは，本プロジェクトにおいて，豊橋市への地域貢献を行うことを目的として活動を開始した。そこで，豊橋市の特徴を調べてみたところ，前期高齢者と後期高齢者を合わした高齢者割合が，愛知県で 3 番目に高いことが明らかになった。豊橋市に在住する高齢者のために何が出来るか検討した結果，近年オレオレ詐欺が増加傾向であり，かつその検挙率が低下していることから，オレオレ詐欺撲滅をプロジェクトの目的とした。

Ⅱ-2 目的の達成方法

本プロジェクトは，オレオレ詐欺撲滅の啓発活動を地道に行うことで目的の達成を試みた。具体的には，オレオレ詐欺に騙されないように家族間で合言葉を作ることの必要性を謳ったチラシ，およびその合言葉を書き，電話の近くに貼ることを目的としたステッカーを作成し，それを，老人クラブを中心に配布した。

Ⅲ. 連携先企業

本プロジェクトは以下の企業等と提携し，活動を行った。

・ 豊橋信用金庫
・ 豊橋市役所福祉部長寿介護課
・ 豊橋市役所豊橋文化市民部安全生活課

Ⅳ. 活動内容

Ⅳ-1 現状把握と対策の検討

本プロジェクトを具体的に進めるにあたって，まずは，オレオレ詐欺を巡る種々の現状把握等を行った。その結果，①オレオレ詐欺は近年増加傾向にあるということ，②被害者の85%以上が60 歳以上であること，③詐欺の検挙率が低下しているということが明らかになった。さらに豊橋市の人口構成に目を向けると，高齢者の割合が県内でも高く，特に後期高齢者に焦点を当てると県内で最も高いことが明らかになった。このことは，豊橋市においてオレオレ詐欺対策を行うことの意義を確かめるものであった。

図表 1　豊橋信用金庫様との勉強会

次いで，豊橋信用金庫様に勉強会を開いて頂き，オレオレ詐欺の実状把握に努めた(図表 1 はその様子である)。そこでは，実際に豊橋信用金庫様で起きたオレオレ詐欺の実例をいくつか紹介して頂いた。その結果，他人に相談しにくい話題(セクハラや会社の資金の使い込みなど)を理由として，親にお金の振り込みを依頼し

ているケースが多いことが明らかになった。加えて，他の金融機関や警察との情報交換，あるいは研修等を行うなどといった，豊橋信用金庫様がすでに採られている防止策についても教えて頂いた。

豊橋信用金庫様と，詐欺防止に有効な手段は何かについての話し合いも設けた。そこで，家族間での「合言葉」を作ることが重要であり，この「合言葉」をキーワードにオレオレ詐欺撲滅対策を行うことが決定された。

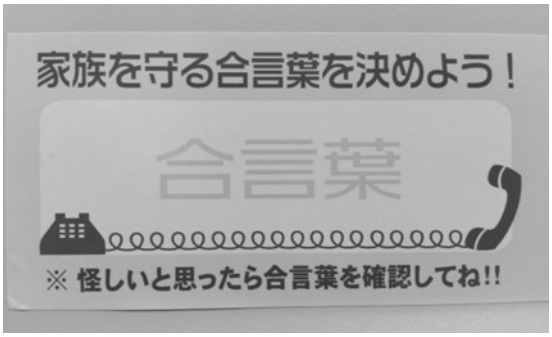
Ⅳ-2　チラシおよびステッカーの作成

オレオレ詐欺撲滅のための方法としては，様々なものが考えられる。野口ゼミナールでは，その中で，合言葉を家族間で作ることの重要性を謳ったチラシと，家族間で決めた合言葉を，電話を受け取ったところで確認することを目的としたステッカーを作成し，それを配布することとした。

チラシおよびステッカーの作成プロセスにおいて，豊橋信用金庫・小宮山様から数回にわたりアドバイスを受け，改善を行った。そのプロセスを経て，図表 2 および図表 3 のようなチラシおよびステッカーが完成した。

図表 2　　配布チラシ

図表 3　　配布ステッカー



Ⅳ−3　チラシおよびステッカーの配布

野口ゼミナールと豊橋信用金庫様とで協同して作成した，チラシおよびステッカーの配布は，高齢者が多く集まる場所を狙って行うこととした。そのために，豊橋市内の老人クラブを管轄している豊橋市役所様の協力を得ながら行った。配布先としては，老人クラブおよび高齢者の集まるイベント等であった。時間や場所が許す限り，野口ゼミナールの活動趣旨およびオレオレ詐欺の現状，ならびにその対策として合言葉を作ることの重要性を説明させて頂いた。

図表 4　　配布先の概要

訪問先	対象地域	配布人数
市役所（老人会代表者）	豊橋全域	40 人
アクアアリーナ（穂の国ハイキング）	豊橋全域	50 人
城山公民館	高師	30 人
高師緑地運動公園（スポーツ大会）	豊橋全域	225 人
平野町公民館	石巻	45 人
中部地区市民館	松山	30 人
東脇公民館	汐田	60 人
交通安全街頭啓発運動	細谷・植田	50 人
仁連木老人福祉センター	東田	35 人
豊橋信用金庫各支店	豊橋全域	350 人
豊橋創造大学	豊橋全域	20 人

配布先およびそこでの配布人数は，図表 4 のとおりである。

その結果，チラシおよびステッカーを935人に配布することができた。この配布作業においては，豊橋信用金庫様および豊橋市役所様のご協力がなければ到底できなかった。

Ⅳ−4　アンケート結果の分析

本プロジェクトは直接的な成果を数値化等することが困難である。そこで，老人クラブ訪問時にアンケートによりいくつかの質問をし，そこでの回答を集計することで，何らかの発見および成果を測ろうと試みた。なお，アンケートの有効回答数は 205 枚であった。

アンケートは，図表 5 で示すように，8 つについて問うたものである。

図表 5　　アンケートにおける質問内容

質問 1	オレオレ詐欺を知っていますか？
質問 2	心配事があった場合，身近に相談できる人はいますか？
質問 3	お金の管理は自分自身で行っていますか？
質問 4	詐欺に引っ掛からない自信がありますか？
質問 5	オレオレ詐欺に対して，何らかの対策をとっていますか？
質問 6	今回の私たちの発表について理解して頂けましたか？
質問 7	今回の発表を聞いて，合言葉を作ることの必要性を感じて頂けましたか？
質問 8	今回お配りしたステッカーに合言葉を記入し，貼って頂けますか？

これら質問に対して，野口ゼミナールでは，「はい」か「いいえ」という回答を要求した。そこで得られた回答をまとめたのが，図表 6 である。

図表 6　　アンケートの回答

	はい		いいえ	
質問 1	200 人	97.6%	5 人	2.4%
質問 2	196 人	95.6%	9 人	4.4%
質問 3	189 人	92.2%	16 人	7.8%
質問 4	143 人	69.8%	62 人	30.2%
質問 5	84 人	41.0%	121 人	59.0%
質問 6	203 人	99.0%	2 人	1.0%
質問 7	200 人	97.6%	5 人	2.4%
質問 8	195 人	95.1%	10 人	4.9%

この図表 6 からは以下のことが明らかになった。詐欺に引っかからない自信がない人が全体の約 70%もいるものの(質問 4)，半数以上がなんら対策をとっていない(質問 5)ことは本プロジェクトの活動の意義を証明するものといえる。

そのような方々に対し，野口ゼミナールのオレオレ詐欺撲滅活動により，合言葉の必要性について 97%以上の方からの理解を得ることができた(質問 7)。さらに，実際にステッカーを 95%以上の方が貼ろうとしてくださるとの回答を得た。これは本プロジェクト活動を通して，一定の成果がでたものと考えることができる。

Ⅴ．所見

以下は野口ゼミナールの活動を行った学生による所見である。

伊藤佳祐

今回私はプロジェクト活動を行い，学生が主体となり企業の方々と提携して一から活動内容を考えて物事を行うことの大変さが分かった。実際に行った主な活動内容としては，啓発用チラシの作成，老人クラブでのチラシ，ステッカーの配布，老人会でのオレオレ詐欺についての対策説明会など

を行った。どれも私達が普段の日常生活を過ごしていたら体験できることではなく，最初のうちはとても戸惑って失敗することが多々あった。

しかしながら，その経験や失敗を次に生かせれるよう努力を積み重ねた成果もあり，初めの頃に比べたら，自分自身が相手に伝えたいことを伝える情報発信力や，対人関係におけるコミュニケーション能力を高めることができた。私はこの経験を生かし，これからも今回行ったプロジェクト活動のように，地域に貢献できるようなボランティア活動を自主的に行おうと心がけるようになった

史雯雯

プロジェクト活動の中で，私は主にチラシのデザインを担当した。チラシを配る対象は高齢者であったため，簡単で分かりやすいチラシの作成に努めた。しかしながら，分かりやすさの追求および表現は思いのほか難しかった。ゼミのメンバーである今泉君と三輪先生の協力頂いて，デザインを決めた。

チラシ作りは初体験であったが，900 枚以上を配ることができた。これは想像以上の成果であった。たくさん老人クラブを回り，チラシを配布すれば，その分成果が出ると信じ，最後まで頑張ってクラブを回った。そこで，老人クラブでプロジェクトの趣旨を説明し，チラシを配ったのは今でも充実感，達成感がある。

次に自身の成長について述べる。プロジェクト活動において，いくつもの老人クラブを回った時，人前での話すという経験のなさから当初は思い通りにいかなかった。しかし，徐々に慣れ，大きな声でゆっくりと話すことが出来るようになった。今回の経験は，これからの人生において大いに役立つと思われる。さらに，いくつかあった反省点についてもゼミのメンバーと相談し，改善することが出来たのも良い経験であった。

私たちのゼミ担当の野口先生には大変お世話になった。最初私たちはこの作業の進め方が全く分からなかった。先生には，テーマを決めてから，豊橋信用金庫様や市役所の方々との連絡の仕方やマナー等について教えて頂いた。

今回の活動を通し，自分の未熟な点や反省な点を見つけることが出来たのは大きな収穫であった。今後，これから未熟な自分を成長させるために，今回の経験を活かし，新たなことに挑戦しようと思う。

今泉裕希

今回の，地域社会貢献を目的とした「オレオレ詐欺撲滅活動」を通して，私は改めて地域の方々の温かさを感じることが出来た。それは，地域高齢者の方々の温かさや，活動に協力していただいた豊橋信用金庫様および豊橋市市役所の方々の我々に対する援助から感じることができた。

また，私たちはこの活動を通して多くの有益な体験をすることができた。それは，普段の学生生活の中では学べないことばかりであるため，とても満足できた。特に，私は人に物事を説明することが苦手であり，今回の活動では，大勢の高齢者の前で詐欺についての報告の役目を任された。当初は，大勢の高齢者の視線や空気に圧倒され，満足の行く報告ができなかったのであるが，回数を重ねることに経験値として蓄積され，最終報告の場では，胸を張って堂々と報告ができている自分にとても驚いた。

友人や協力していただいた方々からも私の成長を認めていただくことができた。こうして全体を振り返ってみますと本当に得るもの多い活動であった。今回の活動をさせていただいたことを心より感謝している次第である。本当にありがとうございました。

豊橋トップインタビュー2012

三好プロジェクト

１．メンバ

鈴木一輝(20923633)

協力メンバ：堀江光（20923224）

宮崎康平（20923727）

大江澄南（20923203）

２．プロジェクト概要

２．１　プロジェクトの動機

大学の講義「経営学」や「戦略経営論」において種々の企業の経営の在り方や運営方法について学んだ。また「職業研究」や「企業研究」を通して、業界とそれに属する企業の存在について学んだ。多くの企業がそれぞれ特色を持って経営されているが、それがどのように形成されるのか、もしくはどのように企業の方向性が決定されるのかについての疑問を持ったので、プロジェクト活動で調査することにした。経営的な視点やビジョンの聞き取りのために経営代表者に直接話を聞けるインタビュー方式で実施することを検討することにした。

２．２　インタビューを通した調査の目的

経営者はそれぞれに経営に関する考え方や経営哲学、将来に対するビジョンを持っている。本プロジェクトでは経営についての理解を深めること、それらを自身の行動決定の参考にすることを目的としている。

まず特色ある企業を種々の視点から調査して調査対象候補を選定する。そして、これらの企業にプロジェクトの趣旨を説明しインタビューを承諾して頂ける企業を選出しインタビュー活動を行う。そして、そのまとめを行う。本プロジェクト活動では、以上の作業を繰り返す。また、就職活動を控える学生にも有意義な報告になるように、企業トップが求める人材像についても併せて調査を行う。

３．連携先企業

本プロジェクト活動では、地域企業に協力をいただきインタビューを実施したが、そのインタビューに協力いただいた企業を表１に示す。インタビュー企業は3社で、豊橋市内に拠点を置く企業である。

４．活動内容

４．１　作業スケジュール

2012 年に行ったプロジェクト活動として作業スケジュールを表２にまとめる。今年は、4月のゼミナール開始とともに、プロジェクト活動を開始した。約 1 か月を掛けて、プロジェクトのテーマについて協議した。2011 年の実施報告も踏まえ、企業トップインタビューを継続して実施することになった。

まず５月に、訪問先を確定するために、地元企業についての情報を求人誌や商工会議所発行の資料およびＷＥＢ上の情報を通して調査した。その中から、訪問候補企業を５社選定した。

その後、春学期に１社、秋学期に２社訪問インタビューを実施した。当初の予定では、全体で５社のインタビューを目標に設定したが、インタビュー後の WEB へのまとめに予定以上に時間がかかったことや、

表１　連携先企業一覧

企業名	事業内容	インタビュー相手	URL
パッケージプラザシライ本店	ラッピング用品、店舗用品、事務用品、生活雑貨の販売	店長 白井成明様	http://www.packageplaza.net/shop/g/g03/g0300009.htm
ワルツ株式会社	コーヒー、紅茶、製菓・製パンの材料、器材、輸入食品の販売。	代表取締役社長 片桐逸司様	http://www.waltz.co.jp/index.html
株式会社お亀堂	和菓子の製造・販売、おむすび販売、茶屋	代表取締役社長 森愼一郎様	http://www.okamedo.jp/index.html

表２　プロジェクト活動スケジュール

４月	・プロジェクト内容決定
５月	・訪問企業の選定
６月	・インタビュー準備
７月	・7 月 23 日 パッケージプラザシライ本店へインタビュー　代表 白井成明 様
８月	・WEB ページ作成
９月	・企業選定、調査 ・インタビュー準備
10 月	・10 月 29 日 ワルツ株式会社へインタビュー　代表 片桐逸司 様（予定）
11 月	・インタビュー準備 ・11 月 12 日 株式会社お亀堂へインタビュー　代表取締役 森慎一郎 様 ・WEB ページ作成開始
12 月	・18 日　　成果報告会
１月	・12 月 7 日 成果報告書作成

図１　ワルツ株式会社へのインタビューの様子

● インタビュー内容

1. 活動の趣旨・インタビューの目的の説明

2. 社長の人物像
   - ✧ 学生時代
     - ・どんな学生だったか
     - ・どんな目標を持っていたか
     - ・何に一番影響を受けたか
   - ✧ 起業に至るまで
     - ・起業前は何をしていたか
     - ・なぜ起業を思い立ったのか
     - ・起業前後で苦労したこと
3. 経営について
   - ✧ 経営理念
     - ・何を第一に考えるか
     - ・尊敬する人物はいますか
   - ✧ フランチャイズを選んだ理由
   - ✧ 経営の現状と今後の方針
4. これから
   - ✧ 日本経済の現状をどう捉えるか
     - ・増税について
     - ・震災による経済打撃
     - ・日本の GDP の低下について
5. 就職について
   - ✧ 貴社が求める人材像は
   - ✧ 学生へメッセージ

図２　インタビューリスト

http://projectweb.sozo.ac.jp/miyoproj2012/

図３　作成する WEB ページのイメージ図

アポイントメントが、確保できなかったために、訪問インタビューは３社とした。

４．２　事前準備

訪問企業選定後、訪問日のアポイントメントを行い、インタビューの準備を行った。これらの作業をまとめると以下のとおりである。

(1) 訪問企業とのアポイントメント

訪問希望企業を選定後、インタビュー実現のために必要なことの意見交換を行い訪問希望企業へいかに依頼をするかについて検討した。インタビューを依頼する前提として、本学部で展開するプロジェクト活動の趣旨や内容を説明し、三好プロジェクトの主旨や方法を説明した。その上で、インタビューの可否を確認することになった。電話だけでは十分伝わらないことがあるので、封書による依頼をおこない、その後、電話で確認することになった。

本学には、地域産業界とつながりを持った教員や職員が多い。そのため、訪問希望企業とのコネクションがある教職員がいる場合は、本プロジェクトへの協力

を依頼した。上記のインタビュー依頼のための学生活動とは別に、訪問企業へのインタビューへ依頼をしていただいた。2012 年の 3 社のうち、パッケージプラザシライ本店とワルツ株式会社は、学内職員の協力を得て、インタビューが実現したが、株式会社お亀堂については、学生による依頼文書と電話によりインタビューを実現した。

以上の手続きで、訪問希望企業の中から訪問インタビューできる企業を選定し、インタビューのスケジュールを確定した。

(2) 企業調査

インタビューにおいては、企業トップの方の話を理解して、それに対してインタビュー内容を変化させながら、企業代表の意図を理解する必要がある。そのため、経営学や会計学、マーケティングなど企業経営に関する大学での学びに加えて、訪問する企業に関連する知識を持っておく必要がある。そのような認識のもと、訪問企業の Web ページや関連記事などインターネットから情報収集し、訪問企業について理解を深める。豊橋商工会議者など地元産業界に関連する団体の WEB ページや発行物にも企業トップインタビューに関する記事があり[1][2]、本プロジェクトのインタビュー内容の参考にした。

(3) 質問リストの作成

大まかに 4 項目に分けてそれぞれで詳細な質問を作成する。作成したインタビューリストの例を図 2 に示す。

(a)経営者の人物像について (b)経営について

(c)就職について (d)尊敬する人物について

作成後チェックを行い訪問日の 1 週間前に挨拶状とともに訪問企業に送付する。またインタビューの練習を兼ね、当日のシミュレーションを行う。

(4)訪問日の段取り

当日の服装、交通手段、持ち物の確認をする。各自の役割分担の打ち合わせを行う。

４．３　インタビューの実施

最初に名刺交換などの挨拶を行い、プロジェクトの主旨を説明後、事前準備に用意したインタビュー内容に沿ってインタビューを行う。訪問日の役割分担は、インタビュー係 1 人、記録係 2 人とする。インタビューの記録は IC レコーダーとデジタルカメラで行う。帰学後、記録のバックアップとメールにて礼状の送付を行う。

４．４　まとめ作業

インタビュー後、Word にて企業概要やインタビュー内容をまとめ、報告書を作成する。作成した報告書の内容を Web ページに写し、写真を挿入し、Web ページを作成する。Web ページの作成が終了後、インタビューを行った方に校閲依頼を行う。校閲依頼が終わり次第、まとめ作業を完成する。

５．インタビュー報告

インタビュー記録の詳細は図 3 に示した WEB ページにまとめる。そのため、ここでは、インタビューの概要を訪問先別に紹介する。以下に 3 社のインタビュー内容を要約する。

５．１　パッケージプラザシライ本店

パッケージプラザでは時代の変化に即応し「お客様のニーズに応える」ことを基本理念にしておりラッピング用品をはじめ、店舗用品から事務用品、生活雑貨まで多種多様に取扱っている。その代表取締役である白井成明氏にインタビューを行った。パッケージプラザは包装用品を中心とした品ぞろえであるが、白井氏は包装用品以外にも、訪問した時期に需要の高かった縁日用品の販売も行っており、他にもお客のニーズに応えるための様々な工夫が施されていた。また「お客様はパートナーである」といった理念のもとお客さんと対等な立場で経営を行われていた。こうした経営理念は我々にとってとても新鮮なものであり、経営についての新しい考え方に触れられたことは大変良い経験となった。

フランチャイズ店であるシライ本店ではさらに、いまの時期ですと縁日などの包装用品が利用される企業のイベントや自治会活動で必要とされる氷みつ、スーパーボールなどの縁日用の商品も提供している。

図 4　パッケージプラザシライ本店　訪問時の写真

図 5　ワルツ株式会社訪問時の様子

５．２　ワルツ株式会社

ワルツ株式会社では片桐逸司社長にインタビューを行った。ワルツではコーヒーや成果剤の販売に加えディルマ紅茶の日本総代理店の経営、オリジナルカフェやフランチャイズ店舗の経営など多角経営がなされていた。また「大きい会社よりいい会社」という経営理念のもと様々な活動も行っており、特にエコハイキングなどの環境保護への取り組みが盛んであるように感じた。こうした取り組みは会社が一丸となって取り組んでいるようで、社長の話から社内の強い結束を感じた。

５．３　お亀堂

株式会社お亀堂では代表取締役 森愼一郎氏にインタビューを行った。お亀堂の商品は菓子博に出展され、賞を受賞するなど、高品質な商品を製造・販売している。和菓子屋は地域との結びつきが強い特性があるため、お亀堂では既存の顧客を大切にする地域に密着した経営を行っていた

図 6　株式会社お亀堂訪問時の写真

６．メンバー所見

鈴木一樹

今回のプロジェクトでは、企業訪問しそれぞれの代表取締役社長に、直接インタビューでき、大変、貴重な体験ができたと感じている。今回訪問させていただいた企業は、豊橋に本社を置く企業であり、消費者への小売を主業務とする企業であるため、古くからその存在を認知している。どの企業も豊橋では、著名な企業であり、その企業の代表取締役に直接インタビューできる機会を得ることができ、大変光栄に感じている。インタビューでは、用意した質問に対して丁寧に説明をいただき、経営理念やビジョンならびに具体的な経営目的や企業活動について大変興味深く伺った。これまで、講義で、企業経営がどのようなものであるか、経営に含まれる要素やその構成などについての学習を深めてきたが、インタビューでは具体的事例をもとに説明を頂いたので、考え方とその実現のための活動が具体的であり理解を深めることができた。また、当方の質問に対して、種々の具体的事例を通して、考え方や対象方法を教示いただけたので、知識の少ないわたしども学生にもわかり易かったとの感想を持った。

参考文献

[1]　東三河優良企業就職情報：豊橋商工会議所
http://www.newvoice.jp/
[2]　企業インタビュー：商工会議所
http://www.toyohashi-cci.or.jp/joho/interview.html

のんほいパーク盛り上げ隊

三輪プロジェクト

Ⅰ. プロジェクトメンバー

情報ビジネス学部キャリアデザイン学科 3 年
・21023204　太田詩織
・21023209　佐々木千聡
・21023114　田中沙弥香
・21023602　浅井美咲
・21023617　鈴木晴香
担当教員　三輪多恵子

Ⅱ. プロジェクト概要

本プロジェクトでは、プロジェクト活動を通してのんほいパーク(主に動物園エリア)を活性化することを目的とし、主に Web を通じた情報発信を行った。

来園予定の人が知りたいと思う情報は何か、どのような情報を発信すれば興味喚起を図れるか等、チームメンバーでアイディアを出し合うと共に、協力して情報収集にあたった。

主な媒体として Web を利用することとし、Web サイト、ブログなどを通して、パーク内・外の方への取材・インタビューを通して得た情報を発信した。利用者の立場に立った情報発信を心がけると共に、情報収集・加工・発信についての一連の作業を体験することで、広告・広報活動について理解が深まった。

また、のんほいパークという公共施設と、その周辺の様々な店舗への取材を通して、地域社会の成り立ちや、そこで働く多くの人々の関係等について理解することができた。

Ⅲ. 連携先企業

・豊橋総合動植物園(のんほいパーク)
・豊橋みどりの協会(のんほいパーク内売店)
・のんほいパーク近隣の飲食店
・のんほいパーク近隣のコンビニエンスストア

Ⅳ. 活動内容

Ⅳ-1のんほいパークとの連携

(1) インタビューによる情報収集

① 飼育員の方への取材

のんほいパークへの理解を深め、動物たちの様々な情報を発信するために、飼育員の方へのインタビューを行った。収集した情報を Web で公開することで、動物についての知識を広げ、よりパークへ興味を持って頂く狙いがある。

子供が知りたいと思うような疑問をまとめ、それぞれの動物の飼育担当の方へアポイントメントを取り、動物たちを見ながら質問をさせて頂いた。食事内容や、飼育環境に対する質問を主とし、その他飼育に携わっている方だけが知っているような情報を聞かせて頂いた。

② 売店(みどりの協会)への取材

売店の取扱商品の情報は公式の Web サイト等で取り扱っていないため、利用者の利便性を考え、本プロジェクトの Web サイトに情報を掲載したいと考えた。取材では売り上げトップの商品、新商品、のんほいパークオリジナル商品、等のお話を伺い、実際に商品を購入して使用・試食した感想を Web ページに掲載した。

(2) 施設見学・写真撮影

のんほいパークの動物舎の中や、バックヤードの中に入れて頂き、動物たちの巣や食事内容等を見学させて頂いた。

また、Web ページに掲載するため、動物や売店などの写真撮影を行った。

Ⅳ-2 周辺店舗情報の発信

Web サイト内の Access ページに、パーク周辺施設情報を記載するために取材を行った(表1)。なお、周辺の飲食店・コンビニエンスストアへの取材準備としてプロジェクトの名刺(図1)を

作成した。名刺には、QR コードとWebサイトのURLを記載し、携帯電話やパソコンからアクセスができるようにした。

表１　取材スケジュール

月	飲食店・コンビニエンスストア
10	Ｌｏｑｕａｔ 福ちゃんラーメン ぼてこ うずらプリン
11	サークルＫ

また、取材の際には、プロジェクトの趣旨を理解してもらう目的で、大学の公式リーフレット、作成したWebサイトの印刷を持参した。

図１　名刺デザイン

(1) 飲食店情報

パーク内にはレストランが1ヶ所しかなく、自分が来園する立場で考えると、食事をする場所についての情報が有用であると感じたため、パーク周辺の飲食店への取材を行った。

取材ではWebページへの掲載許可を頂くとともに、定休日や営業時間、おススメメニュー等を中心に情報の収集を行った。

(2) 前売り券情報

パークの入場料は通常 600 円であるが、前売り券は 480 円で購入することができ、経済的にお得である(ただし、窓口で購入した前売り券は当日使用不可)。このような“お得情報”を積極的に発信することで、来場者の増加が見込めるのではないかと考えた。

そこで、前売り券の販売をしているコンビニエンスストアへ取材を行い、これらの情報について Web への掲載許可を頂いた。

Ⅳ-3　Web による情報発信

収集した情報をのんほいパーク利用者に発信するため、FC2 無料ホームページを利用し Web サイトを開設した。Web サイト訪問者を調査するため、アクセスカウンターとアクセス解析を利用した。

作成した Web サイトを図2に示す。

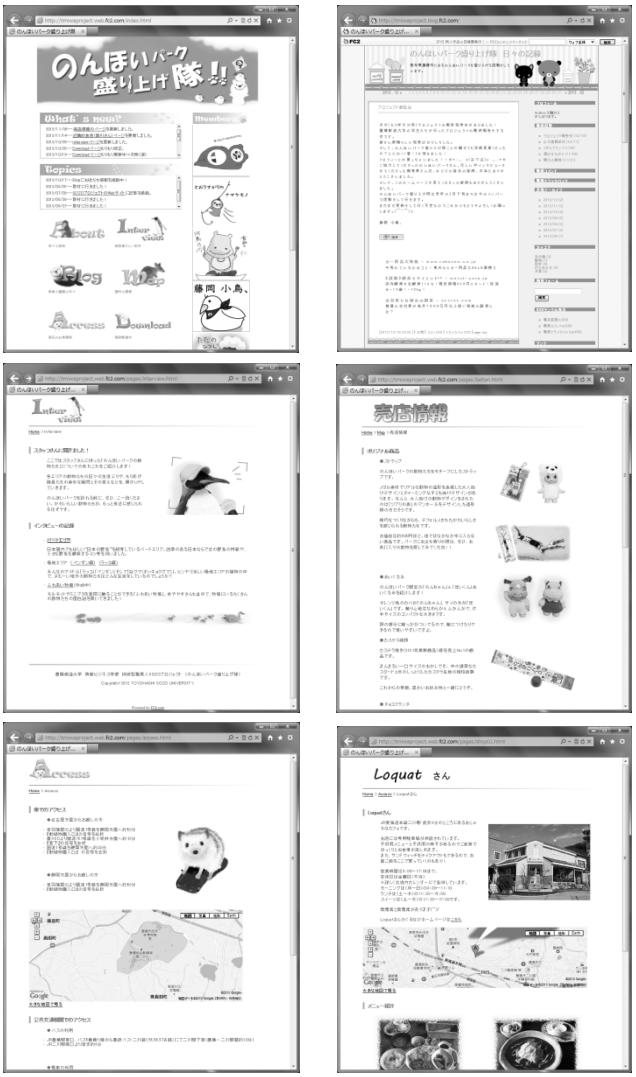


図２　作成した Web サイト

(1)活動についての情報発信

パークの飼育員の方へのインタビュー内容は Interview ページ、売店で販売されている土産については Map のページ、近隣飲食店の紹介は Access ページにそれぞれ掲載した。

(2)Blog 作成

FC2 無料ブログを利用し、本プロジェクトの活動報告を記載した。

Ⅳ-4 創造祭における情報発信

本学の学園祭には子供連れが多く見込めるため、のんほいパークおよび本プロジェクトの効果的な宣伝ができる機会だと考え、写真展示・チラシ配布の活動を行った。

また、学生課・学生会の方に協力して頂き、学園祭のパンフレットに「のんほいパーク盛り上げ隊」のシール(図3)を貼付した。シールにはQRコードを記載し、携帯電話やスマートフォンからの Web サイトへのアクセスアップを図った。

図3 宣伝用シール

(1)写真展示

学園祭で行われる学科(ゼミ)展示部屋の外(廊下)に、パークで撮影した写真を展示するコーナーを設けて本プロジェクトの宣伝を行った。動物たちの自然な姿を撮影した写真を用い、実物を見るためにパークへ足を運んでもらえることを期待した。展示した写真は、濡れや汚れに強くするためラミネート加工を施した。また、小さな子供でも目が届くように、高すぎない位置に貼ることを心掛けた。

(2)パネル展示・チラシ配布(オータムフェスタ)

写真展示コーナーの横に、のんほいパークオータムフェスタのチラシの拡大印刷(A1)パネルを展示し、告知・宣伝を行った。廊下を通った人の視線を写真で惹きつけ、イベント情報を知らせることが目的である。

イベントに興味を持った人に自由に持ち帰ってもらえるように、パネルの側にパークの方に用意して頂いたチラシを設置した。

Ⅴ.所見

田中 沙弥香(21023114)

Web サイト開設のため一から画像を作成するということで、メニューボタンや各ページのイラストなど動物のイラスト制作には苦労した。知人から Web に掲載するイラストはデフォルメ化した方がいいと言われたが、私は動物を描くのが苦手で可愛くデフォルメしたイラストを描く画力がなかった。

Web サイト開設前は 2 週間に一回程度の更新や、モバイルやスマートフォン向けのサイトも作成したいと思っていたが、作業のペースが遅く更新が疎かになりがちで、モバイル向けのサイト作成にまで至らなかった。ブログも私物化してはいけないと思うと、下手に更新できず、結局私が更新した記事は 2 つ程度だった。定期的な更新、Web サイト運営の難しさを、身を以て知った。

また、飼育員の方へのインタビューでは iPad や iPhone を駆使して取材模様を録音していたが、不具合などがあり音声が収録されていなかったこともあった。切実にボイスレコーダーが欲しいと思った。

太田 詩織(21023204)

本プロジェクト活動を行っていて大変だったことは、インタビューのため自分で先方にアポイントメントを取ることや、実際に飲食店へ行き、お話してもらった内容や、撮影した写真をホームページへ載せるための編集などであった。しかし、のんほいパークの職員さん方も飲食店の方も、学生がやることに対し協力的で親切な方ばかりだったので、とてもやりやすく感じた。

ホームページに載せるインタビュー記事の推敲や、素材作り、写真加工など学校で地道にやる作業が多かった。大変な思いを沢山したが、努力をしてだんだん自分たちだけのホームページができていくということに、楽しさとやりがいを感じることができた。活動を通し、ホームページのデザインや、写真加工、イラスト作成などの技

術を高めることができたのも大きな収穫である。

授業の合間に情報収集や、ブログの更新などが大変だったけれど、この１年間はとても充実した時間を過ごすことができた。

佐々木　千聡（21023209）

私は HP 素材作成にあたりトップ画像とヘッダー画像を手掛けた。Web サイトにアクセスした人が最初に目にするため印象が決まる部分であり、親しみをもってもらうために Photoshop を使用し、シロクマとペンギンをデフォルメして温かみを持たせた。

掲載情報の収集でもっとも印象に残っていることは飲食店の取材である。来園者が利用しそうだと思う周辺飲食店を調べ、掲載許可を求め取材して回ったが、なかなか許可をいただけなかった。HPがないお店がほとんどであり、イメージがつかない部分もあるのだろう。そのため、活動の趣旨や目的を伝えることの難しさや、自分たちが交渉する大変さを実感した。さらに、実際に自分の足で見て回ることで得ることができた発見も多く、地域の方とふれあい話をすることの楽しさや重要さを知った。その中で、ただ利用するのみでは知りえない情報など知ることができ楽しかった。

快く協力をしてくださった方々への感謝の気持ちとともに、豊橋に対する愛が深まった。

浅井　美咲（21082602）

今回の活動を通じて今まで知り得なかったことを学んだ。私は担当していないが Web サイトを作成しこまめに更新をして運営をしていくという作業はとても手間と時間がかかるのだと実感した。普段から何気なく色々な Web サイトを見ているが、どのような様式であれ想像を遥かに超えた手間をかけていると知った今は、Web サイトに対する見方が少し変わったように思う。

他のメンバーに比べ私がプロジェクト内で行ったことは少ないが、少ないなりにも濃く実のある体験をすることができた。その一つがインタビュー体験である。のんほいパークの飼育委員さんと飲食店の方々にインタビューをしたが、思ったより難しいと実感した。緊張したり上手く話を広げることができなかったりしたことから、他人とコミュニケーションをとるに当たり話術の巧みさも相手から情報を上手く引き出す為に重要であると感じた。

今回得た知識や経験を今後に活かせるよう精進したいと思う。

鈴木　晴香（21082617）

プロジェクト活動でインタビューを行った際、改めて実感できたことがある。それは、聞いた話を忘れないために、メモを取ることに必死になってしまった。その結果、話を途切れさせ、相手に気を遣わせてしまったことがあった。話を聞かせてもらっているという意識を忘れず、相手のことを思いやることも忘れてはいけないと感じた。

また、プロジェクトについて全く知らない人に、どのように説明すれば伝わるか、もっと簡単に説明できないかとても悩んだ。相手に伝わるように簡潔に内容を説明することがとても難しいと感じたことである。全体の活動の反省として、web サイトの知識がなく、Illustrator や Photoshop も使いこなせないため、出来る人に仕事を押し付けてしまうことが多く、楽をしてしまったことに反省している。

プロジェクト活動を通して、反省と自分に足りなかった点を改善していこうという思いが生まれ、良かったと思っている。

謝辞

本プロジェクト活動を行うにあたり、のんほいパーク、みどりの協会の皆様には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

また、近隣の飲食店、コンビニエンスストアの皆様には Web 掲載の許可を頂き、誠にありがとうございました。

豊橋献血促進プロジェクト

山口プロジェクト

Ⅰ．プロジェクトメンバー

金子忠史（20923207）
中野景子（21023115）
橋本卓也（21023218）

Ⅱ．プロジェクト概要

若年層（10 代・20 代）の献血離れが社会問題となっている。この問題に対し、献血に関する広報活動を通じて、豊橋市における若年層の献血を促進させる事を目的として、プロジェクトを立ち上げた。特に、本学の学生について献血意識を高めることを目標とした。

主な活動として、赤十字社の献血イベントへの参加、学内アンケートの実施を通じた献血意識調査、プロジェクト Web サイトを通じた広報活動を行った。

上記の活動を通じて、若年層の献血を促進し、地域・社会に貢献できることを目指した。

Ⅲ．連携先企業

本プロジェクト活動を進めるにあたり、愛知県豊橋赤十字血液センターの方にご協力いただいた。

Ⅳ. 作業スケジュール

プロジェクトのスケジュールを表 1 に示す。次に、それぞれの具体的活動を説明する。

Ⅴ．活動内容

プロジェクトでは、大きく分けて次の 4 つの活動を行った。

（1） 献血イベントへの参加（ボランティア活動）
（2） 学生意識調査（学内アンケートの実施）
（3） 血液センターの方々との意見交換
（4） Web サイトの構築と情報発信

（1） 献血イベントへの参加（ボランティア活動）

献血促進のための広報活動にあたり、まずは学外で行われる献血のイベントに参加し、実際の献血呼びかけ現場の体験と把握に取り組んだ。参加した日時は下記のとおりである。

- 6 月 17 日　イオン豊橋南店
- 7 月 22 日　豊橋駅南口（サマー献血）
- 12 月 16 日　イオン豊川店（クリスマス献血）

ボランティア内容は、それぞれの施設を訪れる一般の方々に対する献血場所への誘導などの献血呼びかけ活動であった。

（2） 学生意識調査（学内アンケートの実施）

本プロジェクトで対象とする若年層の献血に対する意識を把握するため、本学の学生に対して意識調査（アンケート）を実施した。1082 枚配布して 756 枚の回答を得られた。回収率は 69.87%だった。

表 1　プロジェクトのスケジュール

5月	6月	7月	8月
プロジェクト始動 学内アンケートの作成----------	献血イベントへ参加① 17日：イオン豊橋南店 学内アンケートの配布---------- WEBサイトの作成----------	献血イベントへ参加② 22日：豊橋駅南口（サマー献血） 学内アンケートの集計------>	中間報告会 ---------->

9月	10月	11月	12月
名刺カード作成 ポスター作成 WEBサイトの作成----------	26・27日：創造祭にて 名刺カード配布 意見交換会のための アポ取り・資料送付 ----------	1日：意見交換会 三角柱POP作成の計画 ----------	献血イベントへ参加③ 16日：イオン豊川店（クリスマス献血） 三角柱POPの作成・設置 （教員インタビュー） 成果発表会 ---------->

表２　学内献血意識調査の結果

献血経験あり（189人）

回数	一回	二回	三回
	61%	21%	18%

献血をした動機	自発的	知人・友人に誘われて	なんとなく	家族に誘われて	その他	会場の雰囲気
	35%	23%	17%	16%	12%	7%

献血経験なし（567人）

献血できない理由	行く機会がない	注射採血が苦手	その他	時間場所が不明	体重不足	不明な点がある
	42%	32%	16%	7%	4%	3%

協力意志	ぜひ協力したい	できれば協力したい	あまり協力したくない	協力したくない
	71人	279人	156人	32人

アンケートでは、以下の項目について調査した。

・性別と年齢　・献血経験と回数　・献血の動機

・献血できない理由　・協力意思　・自由記述

アンケートの集計結果を表２に示す。表２の結果より、献血未経験の人の大半に協力の意思があること、その方たちに献血に関する情報が行き届いていないことが分かった。また、献血経験のある人の献血理由は、大半が身近な人からの誘いであったことが分かった。

（３）　血液センターの方々との意見交換

11 月 1 日、愛知県赤十字血液センター事業課の方をゼミ室へお招きして意見交換を行った。資料は事前に送付し、学内アンケートの結果からアドバイスを頂いた。また、若年層の献血促進について意見交換を行い、献血に関する基礎知識や若年層に対する既存の取り組みを教わった。意見交換会の様子を図１に示す。

若いうちに献血の経験がないと大人になっても献血しない人が多いことや、周りの人や友達に誘われて来る人が多いことから、学生のうちに一度は献血を経験してもらうことが大事であると分かった。

図１　意見交換会の様子

以上のことから取り組むべきこととして、学生同士が誘い合って献血できる機会を提供することが必要であると知った。

（４）　Web サイトの構築と情報発信

献血への理解・関心を深める事と、イベント情報発信を目的として、プロジェクトのオリジナル Web サイトの構築を行った（Word Press で作成）。図２に構築した Web サイトを示す。

掲載内容

・献血の基礎知識や日程

・学内アンケート結果

・赤十字の方に教授いただいた内容

・教員インタビュー

・Web アンケート

・プロジェクト活動の報告

構築したところで Web サイトへの誘導が必要になる。Web サイトを訪問してもらうため、サイトの周知を目的として、名刺サイズのカードと三角柱 POP の二つを作成し、配布・設置した。

URL: http://projectweb.sozo.ac.jp/myamaproj2012/

図２　プロジェクト Web サイト

【三角柱 POP】　　【名刺サイズカード】

図 3　Web サイト誘導の取り組み（制作物）

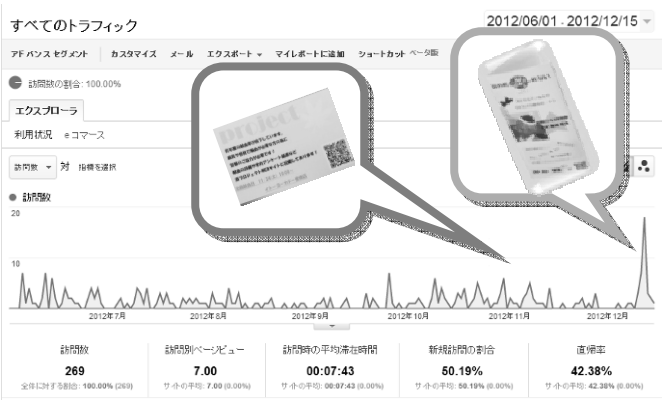


図 4　Web サイトアクセス状況

〇カード

献血の必要性とイベント日程の記述、そして Web サイトの QR コードを記述してプロジェクトサイトをアピールした。このカードは、創造祭のパンフレットに挟み、200 枚配布した。

〇三角柱 POP

飲食店などの机上にある POP は目に付きやすいということから、三角柱 POP を作成し、学内の学生ホール、D 棟 4 階ラウンジに設置した。掲載内容は、献血の現状やイベント日程、学内アンケートを基にした学生の疑問（答えは web サイトにて）や、先生インタビューの一部（Vol.1 は佐藤学部長）とした。今後は、Vol.2, Vol.3 と続けていく予定だが、他学部の学生にも目を向けてもらいたいため情報ビジネス学部以外の教員の方などなどインタビュー先は毎回変えていく方針である。

構築した Web サイトのアクセス状況について、Google Analytics を利用して記録・分析した。アクセス状況について図 4 に示す。取り組みの結果として、創造祭で配布したカードは、思ったようにアクセス増加に結びつけることが出来なかった。一方、三角柱 POP を設置した翌日にはアクセスが増加しており、効果を実感することができた。

Ⅵ. まとめと今後の予定

本プロジェクトは、若年層の献血率を向上させるため、主として広報活動を通じた献血意識向上について取り組んだ。学内意識調査の結果や血液センターの方々との意見交換の内容も踏まえ、当面の目標を「4 月の学内献血の献血率を向上」に修正した。今後は、4 月に向けて、Web サイトへの掲示情報を充実させ、同時にサイトへ誘導するための三角柱 POP2 弾 3 弾を作成し、多くの学生の献血への興味・関心を高められるよう活動する予定である。

今回一連の活動を通し、話し合いから実行に移すまで時間が掛かってしまったこと、製作物を完成させるのにスムーズに進まなかったことなど反省点がいくつかある。また、発表会での質疑応答に答えられないなど、準備不足が見られた。最終目標に向けて反省点を改善しつつ活動していきたい。

Ⅶ. 所見

本プロジェクトを通して各メンバーが実感したことを、以下にまとめる。

・金子忠史

今回のプロジェクト活動を行ったうえで学んだことはまず赤十字血液センターの方との意見交換会では目上の方との接し方を学べた。これは社会にでたら必ず必要なスキルだと思うのでこれからも勉強していきたい。またチームとして動くときに定期的にプロジェクトメンバーで集まり情報交換や意見、アイディアなどを言い合い一つの目標に向かっていくことができたと思う。会社に勤めたときにはプロジェクトで行ったように積極的に意見やアイディアをだしたいと思う。

次に反省点は話し合いや製作物を作るのに時間がかかってしまい周知期間が短くなってしまったことだ。

どんなに良い物やアイディアがあっても人に伝えるのに時間がかかってしまっては意味がないのでこれからは早めに計画を練り製作に取り掛かりたいと思う。

また私個人の反省点は献血のボランティアの日に体調を崩してしまい参加できなかったことである。またほかのプロジェクトメンバーへ連絡をしなかったことも反省するべき点であると思う。また技術がないことにより作業をほかのプロジェクトメンバーにまかせっきりになってしまったことも反省点である。これからは今回のプロジェクトで学んだことはもっと勉強し反省したことは次回にいかせるようにしたいと思う。

・中野景子

全体を通して私はWebサイト構築・広報製作を主に担当した。

Webサイトを構築するにあたって、構築用サイトの『WordPress』、アクセス分析の『Google Analytics』といった使用したことのないものに触れることができた。まだまだおぼつかない所が多々あるが、最初と比べれば大きく成長できた。プロジェクト活動を通して、こうして新たな知識を蓄積できたことはとても嬉しい。

広報製作においては創造祭で配布したカードや、学内に設置するための三角柱ＰＯＰを作成した。若年層献血率増加を呼びかけるためにはどのようなデザインを施したらよいのかとても悩んだ。それだけでなく、関心を持ってもらうために呼びかける言葉もメンバーと話合った。広報製作の一連は決して楽ではなく、とても苦労したものだったが、一つ一つ作り上げ達成する度に「良い経験をした」と思えた。自分の好きなように作るのではなく、目的に沿ったものを期間内に作らなければならないことの大変さを知った。また、関心を持ってもらうためには様々な視点から見ることが大切であることを学んだ。

活動を行ってきたことで得たこと、学んだことはたくさんある。献血での基礎知識と現状・献血会場の様子（車内含め）・本学生の献血の有無や意識・サイトやＰＯＰなどを通じた呼びかけの大変さなど様々である。赤十字の方との交流やプロジェクト発表会、先生インタビューなどで自身の能力向上にも繋がった。これまでの活動はとても満足できるものになった。

・橋本卓也

今回のプロジェクトでは、反省すべき点が非常に多く残った。特にほとんどの作業をメンバーにまかせてしまったり、大学を休みがちになってしまったりでメンバーや教員に大変迷惑をかけてしまった点である。このことに関しては昔から変わっておらず、裏切りから脱皮するチャンスを逃してしまった。

しかし活動を通じて、収穫もあった。豊橋南イオンでの献血呼びかけ活動では少しだけ積極的に動けたと思うし、赤十字センターの方との意見交換の時は、苦手なアポ取りや部屋までの誘導等を行い、これまでに経験のないとても良い経験をしたと思う。またプロジェクト発表の時は、関係者が見守る中での発表でもあり、緊張しやすい私にとって本当に良い経験をさせてもらえたと感じている。

正直、プロジェクト活動は真剣に取り組んだものの積極的に関わっていなかったために、あまり達成感を感じることがなかった。今後は積極的で協力的な人間に変われるよう、挫けず努力していきたい。

【謝辞】

本プロジェクトを行うにあたり、愛知県豊橋赤十字血液センターの皆様には、お忙しいなか多くの御指導や御協力をいただき、大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

③社会人基礎評価票の集約結果

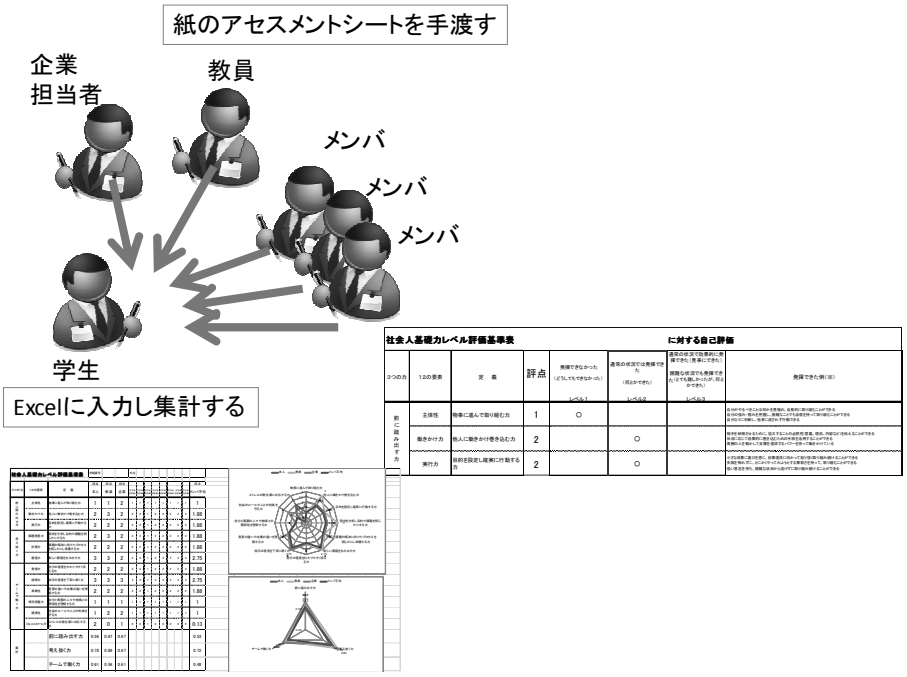
社会人基礎評価票の集約結果

１．　学生の「育成すべき資質（社会人基礎力）」向上についての評価

現段階の学生に社会人基礎力の評価を経産省が提供している評価シートで行う。多面的な評価を行うために、学生の自己評価に加えて、学生間の相互評価、指導教員の評価、協力企業担当者の評価の４つの評価者で評価し、その対比を行う。

そのために、該当学生に対する評価を、学生自身、教員、協力企業、プロジェクトメンバーが紙にチェックして本人に渡す。受け取った学生は、配布されるエクセルファイルに入力し、集計シートを印刷する。これを学生へのフィードバックとする。

なお、企業側の負担、プロジェクト内の人間関係など、アセスメントを実施することが実際上困難な場合は、指導担当者の裁量で、実施の可否を決定してよいこととする。この場合、その旨を取りまとめ者に回答することとする。



２．学生と教員の面談による気づきの促進

学生の社会人基礎力に関するまとめを基本データとして、学生・教員間で評価結果を共有する。評価者（学生自身、教員、企業担当者、メンバ相互評価）によって評価に差がある点について、なぜそのように差が生じたかについての考察を学生に行わせ、今後の行動指針を考察させる。そして、今後の行動指針を学生個人にまとめさせる。教員は、その作業について適宜助言を与える。

３．集計結果

評価結果を全体で集約した結果を以下に示す。教員と本人の評点平均の差や、メンバーと本人の評点平均の差を図にまとめる。マイナス値担っているのは、本人評価が周囲の評価より低く自己評価していることである。

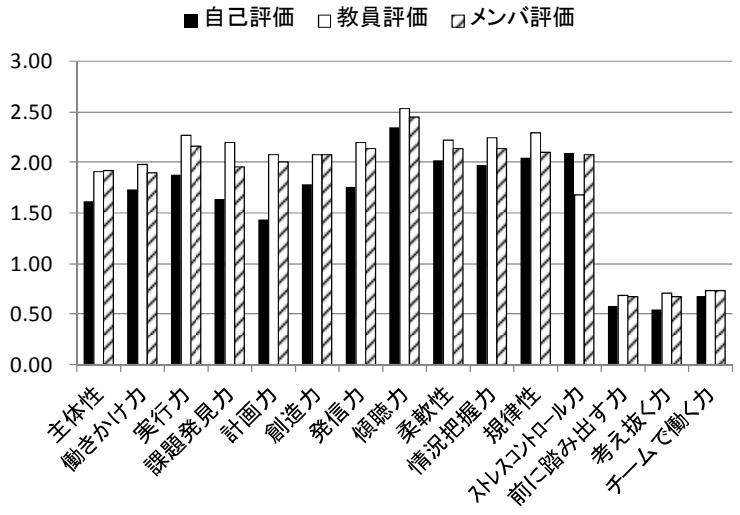


図　社会人基礎力評価における各能力の平均評点

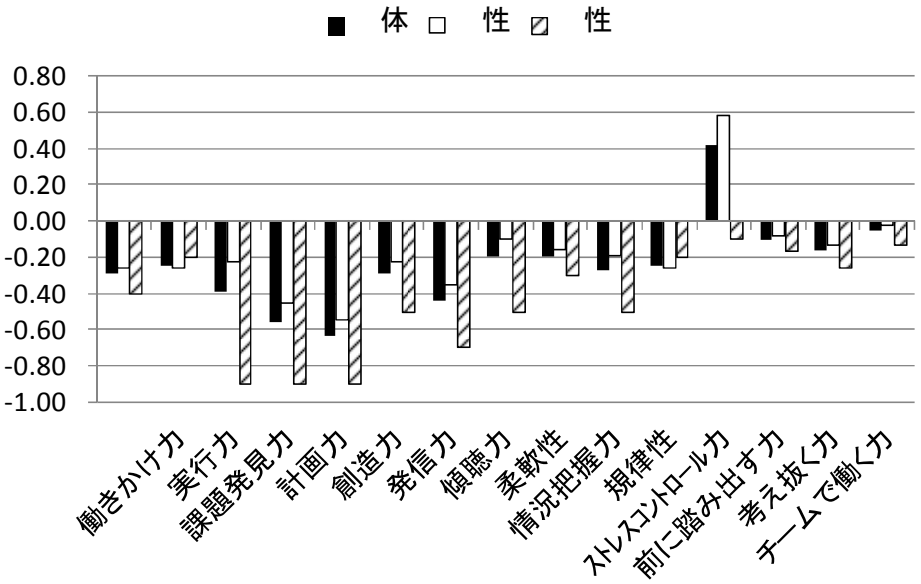


図　社会人基礎力評価における教員評価と本人評価の評点の差

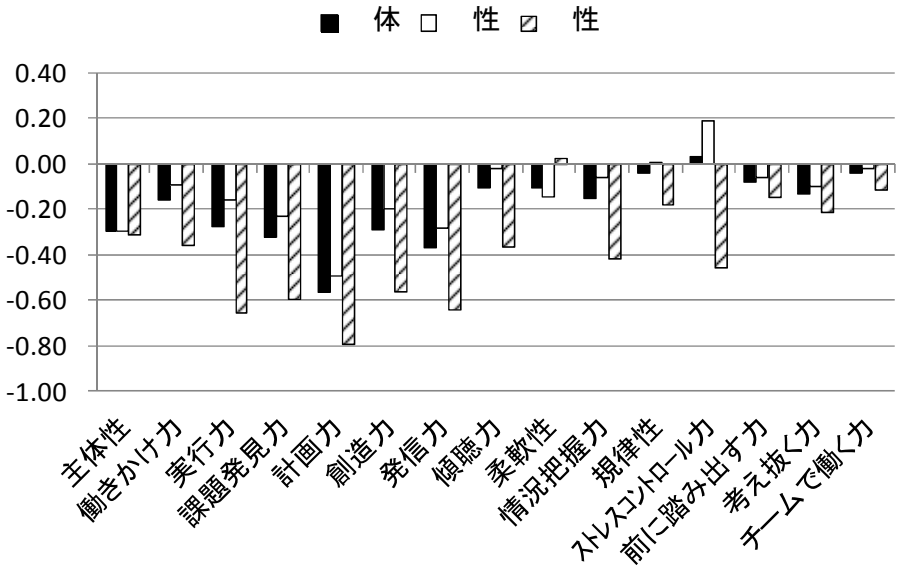


図　社会人基礎力評価におけるメンバ評価と本人評価の評点の差

④成功事例・失敗事例

2012/01/16

調査票５　事業の成果（成功事例）　　豊橋創造大学

※第１次提出ですので、改定の可能性があります。

全体テーマ　　：中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化

本学の取り組みテーマ　：地域産業界連携教育改革プロジェクト

１．事業目的

大学における人材育成と産業界のニーズとのギャップについて、もっとも指摘される点の1つは「学生の主体性・創造性の欠如」であるとの認識に立ち、学生が主体的に行動できる能力を育成し、産業界に於いて就業できる力の醸成を図ることが本事業の目的である。

2. 事業内容

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」として、これまでの専門知識の教授に加えて、ジェネラルスキル（社会人基礎力）の養成にむけた、下記の４つの新たな教育プログラムの整備を行う。また、下級学年に配当されたキャリア形成科目やキャリアガイダンスとの連携を踏まえた体系的教育プログラムを実践する。さらに、その定着のために学部専任教員で、その成果や問題点を共有する機会を創設する。事業成果を共通の視点で捉えるために、学生のジェネラルスキル（社会人基礎力）を学生自己評価、学生間の相互評価、教員による評価によって定量化し、学生自身が自らの状況を自己認識出来る体制を検討する。

本事業で取り組む４事業は以下のとおりである。

（1）メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み

（2）自己理解促進のための採用面接官の疑似体験（バーチャル人事体験）

（3）地域企業と連携した プロジェクト体験

（4）学生、連携大学、地元企業を含めた３者間の協働によるインターンシップ実施

3. 事業の成果

（1）就業力育成の観点からカリキュラムとしての教育体系の整備

ジェネラルスキルの養成は、反復習慣化が必要であり、複数科目で継続的に実施する必要がある。そのため、本補助事業においては、従来の知識教育に加えてジェネラルスキルの養成も評価対象にする科目を選定し、ジェネラルスキル養成を意識した教育内容を充実させる。また、ジェネラルスキルに関する評価も含めて評価を行う。このようなカリキュラム上の整備とジェネラルスキルに対する教員の認識の共有化が行えるようになり、ジェネラルスキルにかかる教育の実施が体系的に実現できる体制を構築できる。

（2）学部教育目標の再認識と評価の共有化

学部の教育目的として「健全な就業感、職業観の育成」が掲げられており、本事業での取組み内容が、目的実現の具体策となっている。そのため、補助事業に関連する学部内会議において、常に教育目標の確認がミーティングを通して行う。さらに、育成目標であるジェネラルスキルについても、共通の様式による評価を実施する。このように、教育目標と評価体制の整備が行えつつある。

（3） 実施上の困難性の共有による運営方法の改善推進

ゼミナールを担当する教員が個別にプロジェクト指導も行う。従来のゼミナール指導においては、それぞれの専門性を活かした教育を展開していたため、他ゼミナールと連携して進める機会は少なかった。しかしながらジェネラルスキルを養成する本事業に於いては、その進め方の困難性や運営上の工夫などについては、担当教員間で共通する問題であり、共同で問題解決を図る。そのため、担当教員によるミーティングを開催し、問題点の共有化を図ると共にその解決方法について意見交換ができる体制を整備する。

（4） 産業界との対話の機会創設

本学では、従来よりインターンシップによる企業実習を実施しており、その協力企業とは、例年、インターンシップに係る座談会開催している。また、参加学生が実習内容やその考察を発表するインターンシップ報告会を実施し、協力企業も参加している。これらの機会をとおして参加学生の就業能力や就職観などについての協力企業との意見交換を行っている。本事業では、多くの学生が何らかのプロジェクトに参加しており、協力企業の数も増えたことを受けて、さらなる産業界ニーズ把握に努力する体制を整備している。

（5） 他大学との連携・共有化の方法形成

本事業への参加により、収集された他大学の失敗事例など、運営にあたって有意義な情報交換が可能となる。またプロジェクトテーマの選定方法なども共有化でき、本学における進め方の参考にできる。本学と類似した学部の事例にも触れることができ、本学が進める場合の貴重な意見が収集できる。

なお、成功事例の個別事案は、事業の一部となっているため、個別には報告が難しい。

調査票６　失敗事例データベース（豊橋創造大学）　※第１次原稿のため変更の可能性あり。

事例名称	プロジェクト指導の方法
事象	本プロジェクト活動では、本学部の全ての３年生がグループを形成し、地域企業とのプロジェクト活動を行う。１名の担当教員がプロジェクトの遂行指導を担当する。グループによってメンバ数は異なっているが、おおよそ 5，6 名で構成されている。教育成果を考えた場合に、学生が自律的、主体的に役割分担をしてプロジェクト進行を行うことが理想であるが、ロード分担に不均衡が生じることがあった。その不均衡が大きい場合は、指導教員による助言を行うことになっているが、学生個々の能力や事業の進捗によっては、中心的な学生に作業分担を強いることも散見された。
経過	プロジェクト活動は４月に開始し、8 月に中間報告会、12 月に成果報告会を開催している。プロジェクトの個々進捗管理は、指導教員が個別に行なっている。現在の計画では、上記のような問題を共有する機会を、プロジェクト終了後の年度末（2 月）にプロジェクト担当者会議を開催予定である。その準備が充分でないため、問題点の共有化を図ることになっている。プロジェクト進行上の問題は、個別に解決する雰囲気となっており、指導の困難性を組織的に解決する方策は検討されていない。
原因	プロジェクト活動に対する支援体制が十分ではないため、担当教員が一人で対応するしことになっている。その結果、指導方法の検討などが不足しているため。
対処	指導担当者は、学部教員であり、プロジェクトの進捗状況を会議に於いて確認出来るような運営を行う。学科会議が毎月開催されているので、その中で、プロジェクト進捗状況を報告し合い、指導の改善等の意見交換を行うこととする。
総括	プロジェクト指導においては、通常の授業とは異なり、地元企業の協力を得ていることや演習時間外にも活動を進めなければならず、企業や学生にとって負担が多いことを十分理解し、指導のあり方を検討する。
知識化	プロジェクト活動に於いては、社会人とは異なり進捗が遅れる場合があることを認識する。そのようなことを踏まえて、学生の指導やフォローを充実させる必要がある。

調査票６　失敗事例データベース（豊橋創造大学）※第１次原稿のため変更の可能性あり。

事例名称	産業界ニーズを把握するための対話の困難性
事象	作業界のニーズ把握に対する協力要請に、企業として消極的な場合がある。
経過	プロジェクト活動においては、地元企業の協力の下に、課題解決を図ることになっている。プロジェクトを教育の一環として進めるために、企業内での対処する場合に比較すると、プロジェクトでは時間をかけた運営をせざるを得ない状況にある。そのため、協力企業に於いては、プロジェクト活動への支援が、大きな負担になる場合がある。そのような中で、学生のジェネラルスキル評価や産業界のニーズ確認作業など更に協力依頼をしたが、時間的な拘束やあらたな労力の提供は難しいとの回答があった。
原因	本事業が、プロジェクト活動をはじめとして、産業界ニーズの把握、学生のジェネラルスキル評価など多面的な協力を企業に求めることにより、地域企業の負担が大きくなっている。このため、プロジェクト活動以外の依頼に対して消極的な場合も生じている。特に、三河地区の限られたエリアでの活動を行うため、依頼が特定の企業に集中する場合もあり、企業側の負担が増加していることが原因である。
対処	複数のプロジェクトやインターンシップ等が同時並行で進んでいるが、協力企業に関する年間通してスケジュールを担当者で把握し、企業側の負担に配慮する体制を検討する。また、協力企業の負担を軽減できる方策を企業と相談の上、検討する。
総括	企業側の負担を考慮した年間スケジュールを立てたうえで、対処する。
知識化	企業との共同による学生のジェネラルスキル養成は、効果的であるが、企業側の負担の上になり立っていることを認識し、学内で準備できる体制を整えて、運営管理する必要がある。

⑤大学教育改革フォーラム
in 東海 2013

大学教育改革フォーラム in東海2013

大学教育について、一緒に議論をし、連携・連帯を深め、質の高い大学教育をこの地域に実現しませんか。
大学教育をよりよくしたい、という意志や希望をお持ちの方々のご参加をお待ちしております。

2013年3月2日(土)10:00-18:30

会場 名古屋大学東山キャンパス ES総合館ほか
事前参加登録不要、参加費無料、情報交換会(2,000円)

プログラム(予定)

9:00 **受付**

10:00 **開会あいさつ**

10:10 **基調講演**
学生の主体的学びをどう促すか
川島 啓二 氏(国立教育政策研究所総括研究官)

11:10 **オーラルセッションI**

1 : **大学職員の学びと実践**
座 長: 加藤史征 (名古屋大学)
報告者: 中元 崇 (京都大学)
満田清恵 (愛知教育大学)
檜森茂樹 (名城大学)

2 : **融合的・総合的な理系教養教育の可能性**
座 長: 安田淳一郎 (岐阜大学)
報告者: 高橋 真聡 (愛知教育大学)
福士 秀人 (岐阜大学)
黒田光太郎 (名城大学)

3 : **協同学習の場としての大学図書館**
座 長: 岡部幸祐 (名古屋大学)
報告者: 中田晴美 (名古屋学院大学)
次良丸章 (静岡大学)

12:30 **昼食・ポスターセッション**
ミニワークショップ「物理現象と概念を結ぶ一講義実験という挑戦(2)」

14:00 **オーラルセッションII**

4 : **教務の実践的知識の共有**
座 長: 上西浩司 (奈良教育大学)
報告者: 辰巳早苗 (大阪樟蔭女子大学)
小野勝士 (龍谷大学)
村瀬隆彦 (佐賀大学)

5 : **大学経営と評価**
座 長: 室 敬之 (星城大学)
報告者: 花原大輔 (名城大学)
角谷充彦 (名古屋大学)
藤原将人 (学校法人立命館)

6 : **教養・基礎教育の設計**
座 長: 栗原 裕 (愛知大学)
報告者: 伊藤奈賀子 (鹿児島大学)
内田啓太郎 (関西学院大学)
久保田祐歌 (愛知教育大学)

15:30 **オーラルセッションIII**

7 : **課題解決型学習の可能性**
座 長: 大津史子 (名城大学)
報告者: 加藤彰一 (三重大学)
山口 満 (豊橋創造大学)
川北泰伸 (同志社大学)

8 : **学生・学習支援の現在**
座 長: 池田輝政 (名城大学)
報告者: 橋本 勝 (富山大学)
増田淳矢 (中京大学)
東 誠 (南山大学)

9 : **日本の大学におけるIRの実践とノウハウ**
座 長: 藤井都百 (名古屋大学)
報告者: 藤井都百 (名古屋大学)
浅野 茂 (神戸大学)
阿部一晴 (京都光華女子大学)

17:00 **情報交換会・ポスターセッション**

主 催: 大学教育改革フォーラムin東海2013実行委員会、名古屋大学高等教育研究センター(FD・SD教育改善支援拠点)

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/forum/tf2013/

大学教育改革フォーラム in 東海 2013

名古屋大学東山キャンパス
ES総合館 ほか
2013年 3月 2日（土） 10:00-18:30

プログラム

9:00	受付
10:00	開会あいさつ
10:10-11:00	**基調講演**
11:10-12:30	**オーラルセッション Ⅰ**
12:30-14:00	昼食・ポスターセッション ミニワークショップ
14:00-15:20	**オーラルセッション Ⅱ**
15:30-16:50	**オーラルセッション Ⅲ**
17:00-18:30	情報交換会・ ポスターセッション

会場案内図

事務局

名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町1
Tel: 052-789-5696
Fax: 052-789-5695
Email: info@cshe.nagoya-u.ac.jp

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/forum/tf2013/

大学教育改革フォーラムin東海 2013

地域企業との協働プロジェクトを通した総合的学士力養成プログラムの試み

豊橋創造大学 経営学部
○山口 満／村松 東／見目 喜重／今井 正文／三好 哲也

豊橋創造大学

1. はじめに

① 豊橋創造大学 経営学部 紹介
② ディプロマポリシー
③ 総合的学士力養成に関する背景
④ 教育目標・カリキュラム

① 豊橋創造大学 経営学部 紹介

沿 革	
1996年	豊橋創造大学 開学 経営情報学部 経営情報学科 開設 ☑ 起業家精神(Entrepreneur)
2002年	メディア・ネットワーク学科 開設 (2学科体制へ)
2006年	情報ビジネス学部 キャリアデザイン学科 開設 ☑ キャリア教育 ＋ ☑ 総合的学士力の育成 ＋ ☑ 就業力の育成
2012年	経営学部 経営学科 開設 定員: 1学年80名 実践教育、PBL

補助事業

- 大学教育・学生支援推進事業 2009－2011
  総合的学士力の養成に向けた実践教育の改善
- 大学生の就業力育成支援事業 2010－2011
  持続型職業人SOZOプロジェクト
- 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業 2012－2014
  地域産業界連携教育力改革プロジェクト

② ディプロマポリシー

知識・理解

ビジネス社会において経営体を適切に管理運営するために必要な経営、会計・財務についての基礎的専門知識を修得する。
また、情報活用に関して基礎的情報処理技術を理解し、その技術を経営、会計・財務に利用して適切にビジネス展開できる能力を身につけている。

思考・判断

自ら持つ知識や情報処理技能を適切に活用して、現状を正しく把握し、直面する問題解決のための必要な知識修得とその応用ができる能力を身につけている。

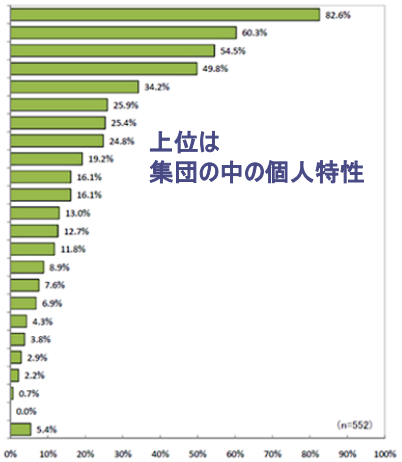
意欲・態度

変化する情報ビジネス社会において、自律的・積極的に知識探求する意欲と能力を備え、健全な就業観や職業観を持ち、組織の中で協調して活動できるコミュニケーション力を有している。

③ 総合的学士力養成に関する背景

▶ 企業から求められる力（新卒採用時に重視した点、重複解答有）

1	コミュニケーション能力	82.6%
2	主体性	60.3%
3	チャレンジ精神	54.5%
4	協調性	49.8%
5	誠実性	34.2%
6	潜在的可能性（ポテンシャル）	25.9%
7	論理性	25.4%
8	責任感	24.8%
9	柔軟性	19.2%
10	職業観・就労意識	16.1%
11	リーダーシップ	16.1%
12	専門性	13.0%
13	信頼性	12.7%
14	創造性	11.8%
15	一般常識	8.9%
16	学業成績	7.6%
17	語学力	6.9%
18	倫理観	4.3%
19	出身校／所属ゼミ／研究室	3.8%
20	クラブ活動／ボランティア活動歴	2.9%
21	感受性	2.2%
22	保有資格	0.7%
23	インターンシップ受講歴	0.0%
ー	その他	5.4%



（社）日本経済団体連合会「新卒採用（2012年4月入社対象）に関するアンケート調査結果の概要」

③ 総合的学士力養成に関する背景

☑ 学士力（4分野13項目）

「学士課程教育の構築に向けて」
中央教育審議会答申（平成20年）

▶ **知識・理解**

○ 多文化・異文化に関する知識の理解　○ 人類の文化，社会と自然に関する知識の理解

▶ **汎用的技能**

○ コミュニケーションスキル　○ 数量的スキル　○ 情報リテラシー　○ 論理的思考力　○ 問題解決力

▶ **態度・志向性**

○ 自己管理力　○ チームワーク・リーダーシップ　○ 倫理観　○ 市民としての社会的責任　○ 生涯学習力

▶ **統合的な学習経験と創造的思考力**

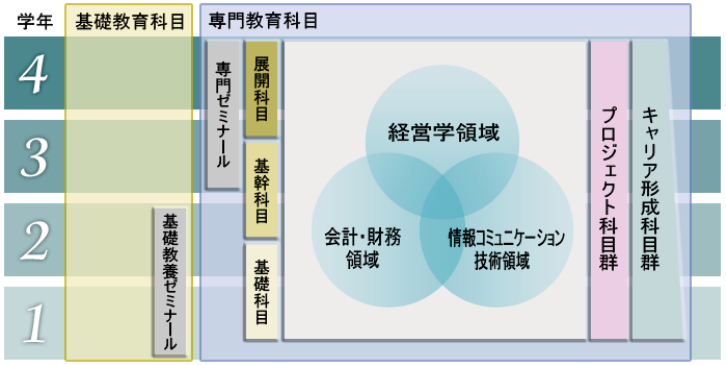
これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

実践能力の育成　⇒　そのためのカリキュラムポリシー・カリキュラム設計

④ 教育目標・カリキュラム

教育目標

生涯にわたっての高い就業能力を身につけさせるため、健全な職業観と就業意識を涵養し経営学と情報学の専門知識とスキルを持つ**専門的職業人の育成**を目標とする。



④ 教育目標・カリキュラム

学年	ゼミナール	キャリア形成	基礎能力育成	社会の理解	実体験	学生支援	その他
1	入門ゼミナール1		国語表現法 キャリア開発1	職業研究		フレッシュマンスクール	教務ガイダンス
	入門ゼミナール2	キャリア形成	キャリア開発2		就業体験講座		
2	基礎ゼミナール1	社会人基礎		企業研究			教務ガイダンス
	基礎ゼミナール2			キャリア発達論	ICT応用 経営ビジネス講座		
3	専門ゼミナール1				プロジェクトマネジメント プロジェクト演習	メンタルタフネス講座	教務ガイダンス
	専門ゼミナール2			ビジネスエシックス	インターンシップ プロジェクト演習	就職ガイダンス	
4	専門ゼミナール3					就職ガイダンス	
	専門ゼミナール4					就職ガイダンス	

2. 補助事業の枠組みにおける取組

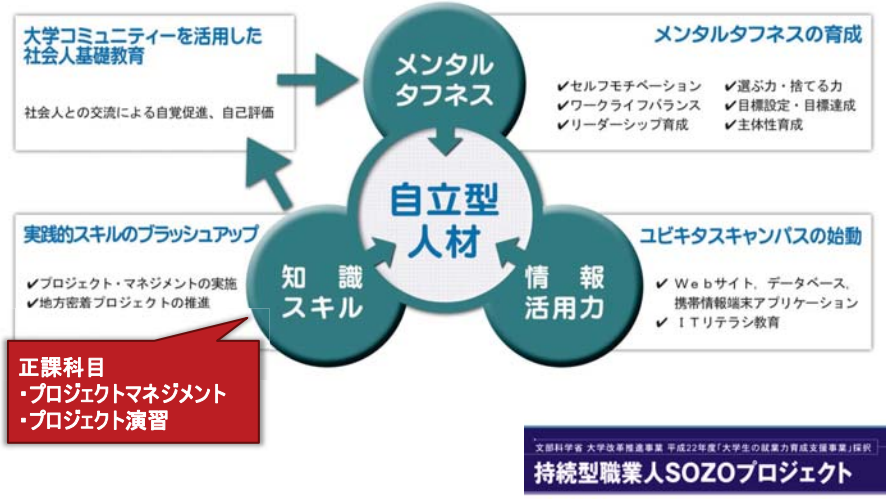
① 大学教育・学生支援推進事業
② 大学生の就業力育成支援事業
③ 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

① 大学教育・学生支援推進事業

- H21～H23　総合的学士力養成に向けた実践教育の改善

② 大学生の就業力育成支援事業

- H22～H23　持続型職業人SOZOプロジェクト



③ 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

- H24～H26　中部圏グループ事業テーマ
  中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化

- 豊橋創造大学：　地域産業界連携教育改革プロジェクト
  - メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み
  - 自己理解促進のための採用面接官の疑似体験
  - **地域企業と連携したプロジェクト活動**
  - 学生、連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実施

3. 企業との協働プロジェクト

① プロジェクトの目的・運営
② 事例紹介

① プロジェクトの目的・運営

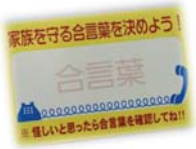
- 情報ビジネス（経営）学部　3年『プロジェクト演習』で実施
  - 学生全員参加の下、社会での活動を学生が主体的に取り組むことにより、学生の就業力を育み、継続した就業ができる力の養成を目的とする
    - ⇒ 実践を通じた体験知・経験知の獲得
  - 原則としてゼミナール単位で運営（ゼミ担当教員が指導）
  - プロジェクトテーマは、学生提案・教員提案のいずれか

- 平成23年度　プロジェクトテーマ　15　参加学生数　55　名
- 平成24年度　プロジェクトテーマ　11　参加学生数　41　名

② 事例紹介（1）

- 豊橋からオレオレ詐欺をぶっ飛ばせ！！

連携先
- 豊橋信用金庫
- 豊橋市役所
- 豊橋警察署
- 老人クラブ



現状把握（勉強会）
チラシ・ステッカー作成

配布
呼びかけ

② 事例紹介（2）

- のんほいパーク盛り上げ隊プロジェクト

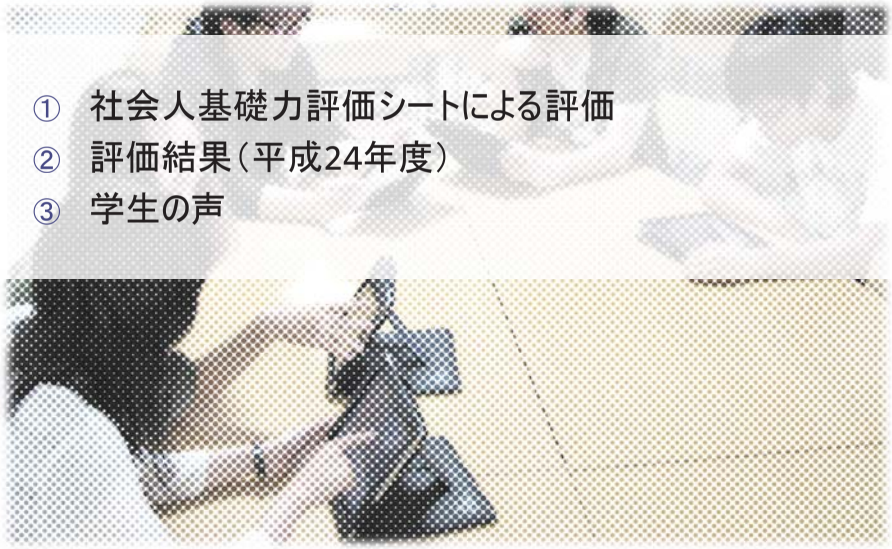
のんほいパーク活性化	・積極的な情報発信（Web等） ・オフィシャルサイトの不足点を学生の視点で補う ・情報発信による“のんほいパーク”の活性化
地域社会への理解	・のんほいパーク（市営：総合動植物公園） ・のんほいパーク内売店（みどりの協会） ・近隣の飲食店、コンビニエンスストア、等
広報活動への理解	・情報収集（インタビュー、等）・整理・加工 ・受信側の立場に立った情報発信

⇦ 連携先

インタビューの様子

作成した Web サイト

4. プロジェクトの評価

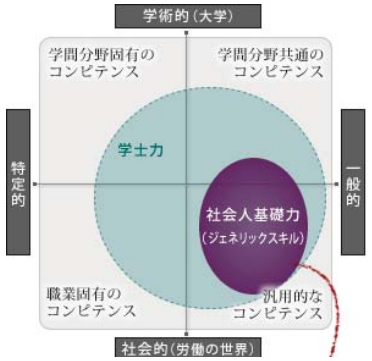


① 社会人基礎力評価シートによる評価
② 評価結果（平成24年度）
③ 学生の声

① 社会人基礎力評価シートによる評価

☑ 社会人基礎力 経済産業省

- **前に踏み出す力**
  - ○ 主体性　○ 働きかけ力　○ 実行力
- **考え抜く力**
  - ○ 課題発見力　○ 計画力　○ 創造力
- **チームで働く力**
  - ○ 発信力　○ 傾聴力　○ 柔軟性
  - ○ 情況把握力　○ 規律性
  - ○ ストレスコントロール力

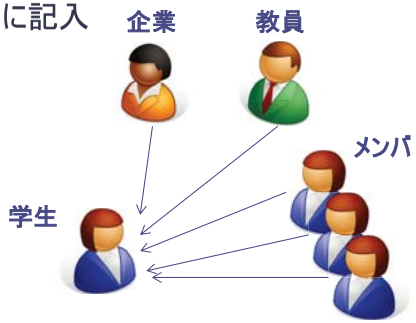


参照元
ジェネリックスキルとPROG
http://www.riasec.co.jp/prog_hp/generic.html

- 定量化
- 共通の評価軸

① 社会人基礎力評価シートによる評価

- 評価シートを利用した4者による多面的・定量的な評価
  （学生自身＋指導教員＋プロジェクトメンバ＋企業）
- 実施方法
  - 当該学生の評価を紙の評価シートに記入
  - 収集後Excelに入力して集計
  - 評価結果を共有（フィードバック）
  - 学生と教員の面談（気づきの促進）

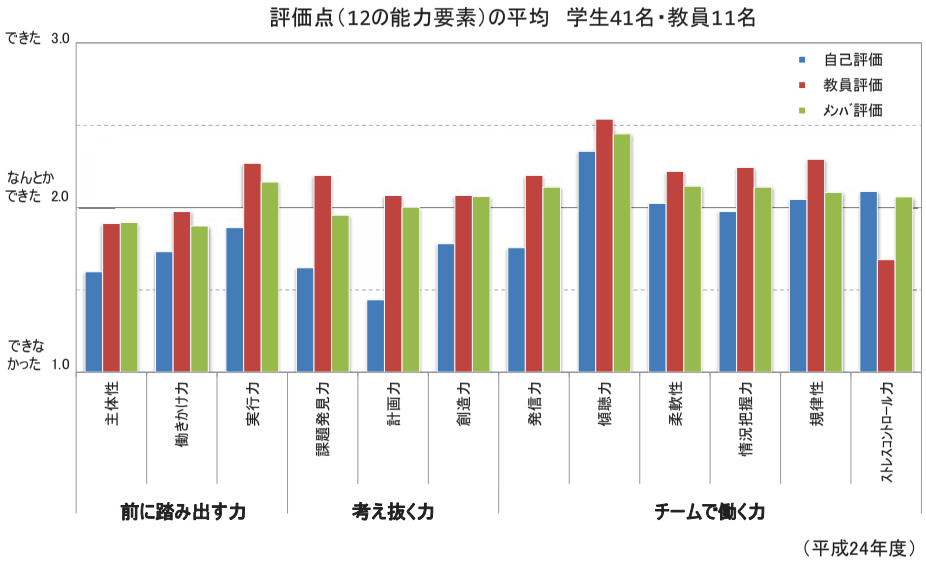


① 社会人基礎力評価シートによる評価

	12の要素	定　義	自己評価	企業	教員	メンバ平均
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力				
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力				
	実行力	目的を設定し確実に行動する力				
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力				
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力				
	創造力	新しい価値を生み出す力				
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力				
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力				
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力				
	情況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力				
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力				
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力				

1 ： できなかった
2 ： なんとかできた
3 ： できた

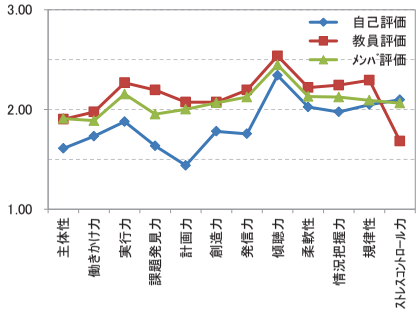
② 評価結果(1)



② 評価結果(2)

▸ 自己評価 と 他者(教員, メンバ)評価

	前に踏み出す力			考え抜く力			チームで働く力					
	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレスコントロール力
自己評価	1.61	1.73	1.88	1.63	1.44	1.78	1.76	2.34	2.02	1.98	2.05	2.10
教員評価	1.90	1.98	2.27	2.20	2.07	2.07	2.20	2.54	2.22	2.24	2.29	1.68
メンバ評価	1.91	1.89	2.15	1.95	2.00	2.07	2.12	2.45	2.13	2.12	2.09	2.06

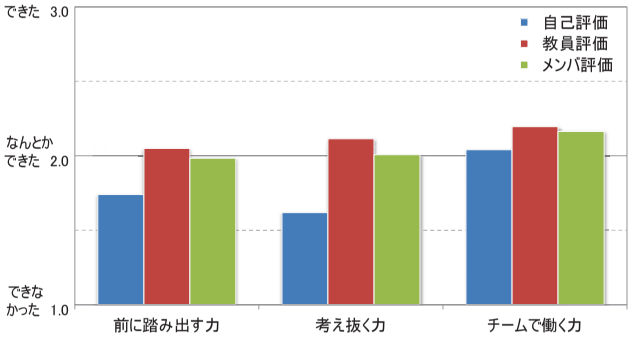


- 自己評価 と 他者(教員, メンバ)評価に違いがある
- 教員、メンバの評価は類似している

自己分析について課題

② 評価結果(3)

▸ 社会人基礎力(3つの力)



③ 学生の声

5. おわりに

① まとめ
② 今後の課題

① まとめ

- 豊橋創造大学における総合的学士力養成を目標とした教育プログラムを紹介
- 地域企業とのプロジェクト活動の実践事例を報告
- 社会人基礎力評価シートを用いた評価の定量化の取り組み（試行）を紹介

② 今後の課題

- 社会人基礎力評価シートにおける自己評価と教員評価の乖離に関する分析・改善策の検討
- 他アセスメントツールの利用（一面的な評価にならないよう）
  - PROG
  - 1年次（入学後）、3年プロジェクト実施前後など、変化の観測
- プロジェクトにおける成功事例・失敗事例の整理および共有化を通じた改善活動

付録　プロジェクトスケジュール

月	内　容
4月	プロジェクトメンバーの決定（該当学生のグループ編成） プロジェクト管理システムへの要望収集
5月～7月	プロジェクトテーマの決定 協力企業と選定，交渉 プロジェクトの目的確定 プロジェクト活動開始 プロジェクト管理システムの改訂作業
8月	中間発表会（プロジェクトテーマ，概要）
9月～12月	プロジェクトの推進
12月	プロジェクト成果報告会 → 協力企業担当者の参加
1月	プロジェクトの成果報告書の作成と就業力育成に関する評価 → 協力企業へ学生活動についての評価アンケートの実施
2月	プロジェクト活動に関する成果についての総括と報告書作成

付録　プロジェクトテーマ（平成23年度）

プロジェクト名	参加学生数
外食産業におけるロジスティクス・システムの研究	4
福祉施設で紙芝居	4
ビジネス系学生のための情報処理資格に向けた電子コンテンツの改善活動	1+6
認定試験に受かるための学習環境と運営	2
会計事務所の業務内容と組織に仕組みを知る	4
社会的企業の実証研究	5
豊橋市内小中学校の太陽光発電システムの稼働状況調査	3
豊橋筆プロジェクト	5
豊橋自慢企業のトップインタビュープロジェクト	3
東三河における繊維産業	4
炎の祭典支援プロジェクト	1
東三河Bible	5
学食広報プロジェクト by 学食おうえん団	8

付録　プロジェクトテーマ（平成24年度）

プロジェクト名	参加学生数
三河港豊橋コンテナターミナルの役割と機能に関する研究	4
iPad、iPhoneで利用できるアプリケーションの作成	5
ヨシノパンプロジェクトー学生視点の活用ー（Bread Project 2012）	4
SOZOショップ開店・運営	4
豊橋エコタウン・プロジェクト ～小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～	4
医療情報の学習環境構築と運営	4
豊橋からオレオレ詐欺をぶっ飛ばせ！！ ー3人の大学生による撲滅への軌跡ー	3
田原のウィンドファーム–社会的企業の実証研究	4
豊橋トップインタビュー2012	1+3
のんほいパーク盛り上げ隊	5
豊橋献血促進プロジェクト	3

付録　プロジェクト連携先

平成23年度	平成24年度
愛知県三河繊維技術センター NPO法人 インターネットラーニングアカデミー （株）エフエム豊橋 小畑耕一公認会計士事務所 （株）キューソー流通システム 春日井営業所 （株）サイエンスクリエイト （株）サーラコーポレーション （医）豊岡会 豊橋市教育委員会 豊橋市企画部政策企画課 豊橋市産業部産業政策課 （福）豊橋市社会福祉協議会 豊橋市総合福祉センター あいトピア 豊橋商工会議所 三遠南信地域社会雇用創造事業 豊橋商工会議所 社会起業インキュベーション事業 豊橋商工会議所 青年部　炎の祭典委員会 南部デイサービスセンター 日本ゼネラルフード（株） 豊橋市立 章南中学校／青陵中学校／東部中学校／東陵中学校／南稜中学校 羽田中学校／豊城中学校／北部中学校／吉田方中学校／植田小学校 老津小学校／大崎小学校／新川小学校／杉山小学校／鷹丘小学校 津田小学校／つつじヶ丘小学校／福岡小学校	日本通運（株）豊橋支店 豊橋市港湾活性課 愛知県三河港務所 金城ふ頭コンテナターミナル （株）インターネットイニシアティブ （株）アイエスエル よしのベイカリー 豊橋商工会議所 豊橋市発展会連盟 NPO法人　どんぐりの会 豊橋市教育委員会 近隣医療機関 近隣医療系大学・専門学校 田原市役所 豊橋信用金庫 パッケージプラザシライ本店 ワルツ（株） （株）お亀堂 豊橋総合動植物公園 愛知県豊橋赤十字血液センター

⑥連携企業・団体一覧

(株)アイエスエル
愛知県豊橋赤十字血液センター
愛知県三河港務所
(株)インターネットイニシアティブ
NPO法人 どんぐりの会
(株)お亀堂
金城ふ頭コンテナターミナル
田原市市民環境部エコエネ推進課
豊橋市教育委員会
豊橋市企画部政策企画課
豊橋市産業部港湾活性課
豊橋市福祉部長寿介護課
豊橋総合動植物公園
豊橋商工会議所
豊橋市発展会連盟
豊橋信用金庫
日本通運(株)豊橋支店
日本通運(株)豊橋支店 海運営業所
パッケージプラザシライ本店
よしのベイカリー(株)
ワルツ(株)

（敬称略順不同）

⑦各種発行パンフレット

本事業においての本学の実施計画内容

豊橋創造大学

本学では「アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証」を実現するために、具体的展開を他大学と連携を取りながら、以下の4事業を柱として事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図ることを目的に実施します。

❶ メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み

平成22年度「大学生の就業力育成支援事業」において開発・実施してきた「メンタルタフネス講座」は、学生の「メンタル面の育成」を通して、就職後の早期離職などを防止するための講座であった。今回の取組みでは、これまでの実施経験や学生からの要望等を反映させて、「実践講座」を追加し総合的な「就業力」の育成を図るとともに、新しい「メンタルタフネス講座」として、キャリア科目群の実習科目として正規科目化する。

❷ 自己理解促進のための採用面接官の擬似体験（バーチャル人事体験）

アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を擬似体験するバーチャル人事体験を行う。特に普段経験することの出来ない「面接官」の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズや、自己の職業観を理解することが可能となる。

❸ 地域企業と連携した プロジェクト活動

実社会におけるプロジェクトベースでの仕事の増加状況を踏み、プロジェクトの体験を通して産業界ニーズとのギャップを埋める「プロジェクト実習」科目を開解する。学生は、ゼロから企画を立ち上げ、誰えの用意されていない課題に取り組むことによって、自主性や創造性、さらにはリーダーシップや他者との協働がいかなるものであるのかを実地体験を通して学ぶ。

❹ 学生、連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実施

学生自らが行動を起こすアクティブラーニングをコンセプトとして、それを達成するための5つの要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を包括的に含むインターンシップ活動を連携大学間にも拡大し、学生、連携大学、地元企業の3者間の相乗効果によって更なる成果を狙う。

豊橋創造大学短期大学部

アクティブラーニングの手法を最大限活用して、メンタルタフネス育成講座やプロジェクト活動を中心とした以下の4事業を展開し、学生の主体性を育み、産業界のニーズと大学における人材育成のギャップを埋めるような活動を実施します。

❶ 長期にわたる就職活動に耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施

「ストレス」の基礎理論、「セルフモチベーション」講座を実施。知識を伝達する座学に加え、課題演習の機会を多く設けメンタルストレスをコントロールし、リラックスするためのノウハウは、これから一生活用できるものであることを理解させる。

❷ 度胸をつけ、臨機応変に対応できるための採用面接官の擬似体験（ロールプレイ）

学生に面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験し、企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させる。この経験により、他学生の良い点や改善点を自分の場合に照らし合わせて学んでいくことになる。

❸ 地域組織と連携したプロジェクト活動

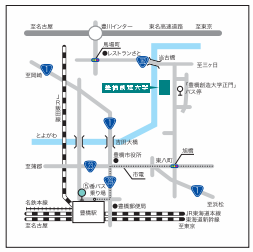
地域組織・企業と関わりを持ちながら、企画・計画・実行するプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの運営を通して、学生自らが主体的に学ぶ「SOZOプロジェクト」を推進する。学生は、これまで学んできた知識が、実社会でどのように活用されているのか知る機会となる。

❹ アクティブラーニングの手法を使った教育経験の共有

あらゆる局面で、アクティブラーニングの手法として5つ要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を含むような活動を展開し、高度化を図っていく。各大学の教員・学生代表がプレゼンテーションを行い、お互いの評価・フィードバックを行いながら、各大学の教育力のレベルアップを図る。

事業期間終了後の取組と評価

事業期間終了後は、本取組で形成した大学間ネットワークを母体として、中部圏の他大学をも含めた、より広範な中部圏教育改革ネットワークを形成する。評価の実施体制としては、各大学独自の成果評価を踏まえ、チームにおける連携FDの成果や自己評価、中部地域大学教育改革推進委員会による自己点検・評価を踏まえて、中部圏産学連携会議における外部評価を実施する。



SOZO 豊橋創造大学

■情報ビジネス学部　キャリアデザイン学科
■経営学部　経営学科
■短期大学部　キャリアプランニング科

〒440-8511　愛知県豊橋市牛川町松下20-1　渉外部キャリアセンター
TEL.050-2017-2104(直通)　FAX.050-2017-2112(直通)
http://www.sozo.ac.jp　E-mail job@sozo.ac.jp

平成24年度

文部科学省 大学教育改革推進事業

産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

取組名称

「中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化」

取組テーマ

❶ アクティブラーニングを活用した教育力の強化
❷ 地域・産業界との連携力の強化

※アクティブラーニングは、授業者が一方的に知識伝達をする従来型の講義形式ではなく、学生参加型授業、共同学習を取り入れた授業、課題解決型学習やPBL(Problem-Based Learning/Project-Based Learning)など、学生の能動的な学習をとりこんだ授業を総称するもの。

事業実施期間

平成24年度～平成26年度

文部科学省の平成24年度新規事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」（本事業は、産業界のニーズに対応した人材育成の取組を行う大学・短期大学が地域ごとに共同して地元の企業、経済団体、地域の団体や自治体等と産学協働のための連携会議を形成して取組を実施することにより、社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材の育成に向けた取組の充実が図られるよう、国として財政支援を行うことにより、幅広い職業人養成に比重を置く大学の機能別分化に資することを目的としています。）において、豊橋創造大学及び豊橋創造大学短期大学部をはじめ中部圏の23大学が連携し取組む「中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化」が選定されました。

SOZO 豊橋創造大学

平成24年度 文部科学省 大学教育改革推進事業
産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業
中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化

大学グループと地域・産業界との連携の趣旨

中部圏23大学（短期大学を含む）以下「中部地域大学グループ」と呼ぶ）は、これまで各大学独自で学生の社会的・職業的自立を目指して、入学から卒業までの間を通した全学的かつ体系的な指導を行う体制整備を進めるとともに、教育の質保証を目指して教育理念に基づく学士力の検討を進めてきました。この過程で、大学個々で、キャリアガイダンスが整備され、教育改革を本格的に進める舞台が整ってきました。一方で、従来の教育改革の議論が、大学内における教職員間にとどまっているために、「育成すべき資質」が、真に地域・産業界のニーズに応えたものであるかに関して、大学側が十分な確信を得ている状況ではありませんでした。

そこで、中部地域大学グループは、上記の共通認識のもとに、相互に連携しつつ、地域・産業界と積極的に対話を進めることを通して、大学の教育理念を尊重しつつ、地域・産業界が学生に求める資質として提示している「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に合致する人材を送り出すための現実的な教育改革力の強化を図ることを目標に定め連携することにいたしました。

大学グループの構成

中部地域大学グループは、大学が教育改革のチャレンジを行う過程で行う失敗をも財産であるとみなし、中部圏の地域・産業界のもつ質を追求する姿勢を、教育現場に適用するために、積極的な対話や連携をすすめていく。各大学が、地域に根差しつつ「チームで働く力」を発揮するためには、より小さな単位による相互作用が機能的です。これらのチームは、地域に根差した連携FDの企画単位であり、成果や失敗を共有する単位となるが、取組自体は、中部地域大学グループが一体となって実施するものです。

東海Aチーム	東海Bチーム	静岡チーム	北陸チーム
アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証を行う。	地域・産業界との連携力強化と検証を行う。	静岡県を舞台として教育力・連携力の強化を図る。	北陸地方を舞台として教育力・連携力の強化を図る。
•名古屋商科大学 •三重大学 •愛知産業大学 •椙山女学園大学 •中部大学 •**豊橋創造大学** •**豊橋創造大学短期大学部**	•名古屋産業大学 •岐阜大学 •同朋大学 •日本福祉大学 •名城大学 •愛知大学短期大学部	•静岡大学 •静岡理工科大学 •静岡英和学院大学短期大学部 •東海大学短期大学部	•金城大学短期大学部 •金沢大学 •福井大学 •富山県立大学 •富山国際大学 •金沢工業大学

※大学グループの幹事校は三重大学、下線はチームを代表する副幹事校

大学グループにおける取組テーマの達成目標・取組内容・成果

❶アクティブラーニングを活用した教育力強化

取組内容　連携FD等を通して、どのようなプログラムや学習目的において、いかなるアクティブラーニング形態が用いられ、どのような教育効果を生んでいるかについて、成功例・失敗例に関わらず、数多くの参加大学間で情報を収集・共有し、整理体系化する取組を進め、その成果を、中部圏産学連携会議における産業界との対話を通して検証する。

達成目標　各大学の教育理念に基づいて学生を育てる資質と、地域・産業界が求める資質を実践的事例とともに対話を繰り返すことを通して、より効果的な大学教育方法を生み出すサイクルを形成するとともに、地域・産業界に大学の包括的な教育使命と、教育現場の実態に関する情報を提供する仕組みを構築する。

❷地域・産業界との連携力強化

取組内容　地域・産業界との連携によるインターンシップの高度化を図る。本取組では、インターンシップの内容や教育効果の改善の領域に、大学と地域・産業界が関わる仕組みづくりが行われる。また、地域・産業界との連携による授業の開講が進められる。本取組を通して、連携型授業の導入を促進し、地域・産業界の知識や生きた体験を教育現場に取り入れ、産業界のニーズに対応した人材作りを進める手立てとする。さらに、地域・産業界との対話・連携を進める上での協議会等を設置し、地域・産業界が大学と一体となって、大学の教育目標に合致しつつ、産業界ニーズに対応した人材育成のための仕組みをつくる。

達成目標　地域・産業界と連携したインターンシップや連携型授業の導入と改善を通して、質が保証された教育プログラムを産学連携で生み出す仕組みを構築する。

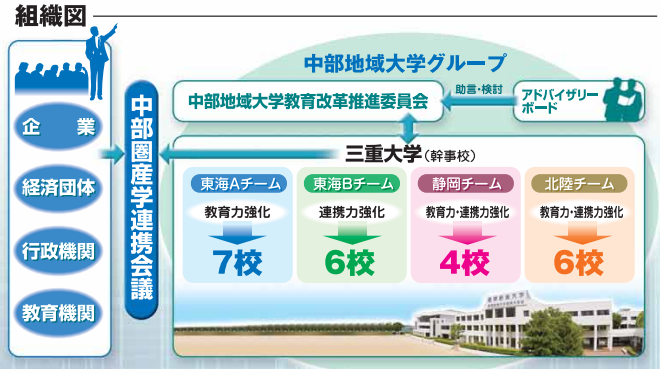
成果　テーマに一貫した大学の教育改革力強化

教育改革のために前に踏み出す力
- 各大学が個別に行っていた教育改革を、他大学と連携を組んで行う。
- 大学が独自に行っていた人材育成を、地域・産業界と連携した教育改革につなげて実施することができる。

教育改革のために考え抜く力
- 大学間で良い実践や失敗を共有化し、分析し、知識化することを通して、創造性を生みだすことができる。

教育改革のためにチームで働く力
- 異なった教育理念や背景を持ったそれぞれの大学や、異なった視点から大学教育を見ている地域・産業界に耳を傾けると同時に、自らの立場を相手に理解できる方法で説明する姿勢を養うことができる。
- 知識化された成功例や失敗例を、社会が活用可能な方法で発信することができる。

組織図



①メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み

平成22年度「大学生の就業力育成支援事業」において開発・実施してきた「メンタルタフネス講座」は、学生の「メンタル面の育成」を通して、就職後の早期離職などを防止するための講座であった。今回の取組では、これまでの実施経験や学生からの要望等を反映させた「実践講座」を追加し、総合的な「就業力」の育成を図るとともに、「新メンタルタフネス講座」としてキャリア科目群の実習科目として正規科目化する。

②自己理解促進のための採用面接官の疑似体験（バーチャル人事体験）

アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を疑似体験するバーチャル人事体験を行う。特に通常経験することのない「面接官」の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業人事の視点からどのような学生が求められ何が評価の対象となるかについて、企業側のニーズや自己の職業観を理解することが可能となる。

③地域企業・組織と連携した プロジェクト体験

実社会におけるプロジェクトベースでの仕事の増加状況を鑑みプロジェクトの体験を通して産業界ニーズとのギャップを埋める「プロジェクト演習」科目を展開する。学生はゼロから企画を立ち上げ、含えの用意されていない課題に取り組むことによって、自主性や創造性、さらにはリーダーシップや他者との協働がいかなるものであるのかを実地体験を通して学ぶ。

④学生、連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実施（学部）とアクティブラーニングの手法を使った教育経験の共有（短大）

学部では、学生自らが行動を起こすアクティブラーニングをコンセプトとして、それを達成するための5つの要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を包括的に含むインターンシップ活動を連携大学間にも拡大し、学生、連携大学、地元企業の3者間の相乗効果によって更なる成果を狙う。また短大ではあらゆる局面でアクティブラーニングの手法としての5つの要素を含むような活動を展開し、高度化を図るとともに、各大学の教員・学生代表によるプレゼンテーションを通し、教育力のレベルアップを図ってゆく。

プロジェクト活動報告
～プロジェクト活動を通した社会人基礎力の育成～

専属嘱託講師　村松　東

社会人として働くためには、業種業界を問わず共通に必要とされる基本的な能力がある。

豊橋創造大学情報ビジネス学部・経営学部、豊橋創造大学短期大学部キャリアプランニング科では、地域企業・組織と連携したプロジェクト活動を通して、健全な職業観と職業観を持ち組織の中で協調して活動できる人材の育成に不可欠な社会人基礎力（ジェネラルスキル）の養成に取り組んでいる。

社会人基礎力とは、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」（経済産業省）と定義され、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力と、その能力を構成する12の能力要素の養成が必要とされる。

社会人基礎力の12の能力要素をバランスよく身に付けることで、成果のある仕事、周囲とのコミュニケーション、仕事とプライベートとの両立ができ、その結果として学生にとって社会で自立するための自信につながることになる。

本事業で実施するプロジェクト活動では、学生が企業をはじめとする外部組織とプロジェクトチームを組んで、独自性と有用性のあるプロジェクトに取り組んでいる。企画・運営・進捗管理・報告といった4段階のプロセスを踏まえた実践を通して、社会人として主に必要とされる主体性、計画力、情況把握力、発信力をはじめとする能力要素を養成する。

今後においても、本学では、特色のある実践的なプロジェクト活動を通して社会人基礎力を養成し、学生の総合的な就業力の育成を図ることを目的として本事業を実施する。

最後に、この事業にご理解・ご協力いただいた地元団体企業各位をはじめ、関係各位に御礼を申し上げます。

図表：3つの能力／12の能力要素

3つの能力	12の能力要素	内　容
前に踏み出す力（アクション）	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力（シンキング）	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力（チームワーク）	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	情況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

出典：経済産業省「社会人基礎力」とは

SOZO 豊橋創造大学

●情報ビジネス学部 キャリアデザイン学科　●経営学部 経営学科　●短期大学部 キャリアプランニング科

〒440-8511 愛知県豊橋市牛川町松下20-1 渉外部キャリアセンター

TEL.050-2017-2104(直通)　FAX.050-2017-2112(直通)　インターネット [URL] http://www.sozo.ac.jp/ [E-mail] job@sozo.ac.jp

平成24年度 文部科学省 大学教育改革推進事業
産業界のニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業

プロジェクト活動報告

地域産業界連携
教育力改革プロジェクト

事業推進責任者　佐藤勝尚

『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』は、三重大学を代表校とした中部圏23大学によるアクティブラーニングを通した教育力および地域・産業界との連携力を通して、教育改革力を強化する取組である。本学情報ビジネス学部／経営学部ならびに短期大学部キャリアプランニング科は、その中で東海Aチームに属して幹事校と副幹事校からなる中部地域大学教育改革推進委員会の調整のもと、連携FDを通して教育改革の実践過程で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力を高め、中部圏産学連携会議を通して大学が育成しようする資質と地域・産業界のニーズに関する対話を行うものである。また、その地域・産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習やPBLなどを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに、社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

現在、大学における人材育成と産業界のニーズとのギャップについて最も指摘される点の1つは「学生の主体性・創造性の欠如」である。これは、企業入社後において、与えられた仕事しか出来ない、仕事上の問題点を自ら発見し、目的を設定し、仮説を立て、創造的に解決していくという社会人として必要な姿勢が欠如している状態である。この問題は学生の能力が欠如しているのではなく、彼らがこれまでの人生経験において目的を持って主体性と創造性を発揮する機会が十分に備わっていなかったことにあると考えられる。大学全入時代において各大学の学生サポートが非常に手厚くなる中、学生が「自らの力」で主体的に活動する機会や、創造的に物事を解決する経験が減少していることが原因として推測される。この問題に対応するため、本学では「大学生の就業力育成支援事業」として、これまで情報ビジネス学部・経営学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた『持続型職業人SOZOプロジェクト事業』を発展させ、右記①～④を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

今回のプロジェクト活動報告書では、平成24年度に実施した『地域企業・組織と連携したプロジェクト体験』（下記③）の学部・短大それぞれのプロジェクト活動の内容について報告する。

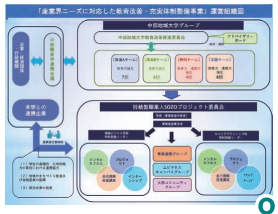
最後に、この事業にご理解・ご協力いただいた地元団体企業各位をはじめ、関係各位に御礼を申し上げます。

豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部

地域産業界連携教育力改革プロジェクト

①メンタルタフネス講座の正規科目化への取り組み
②自己理解促進のための採用面接官の疑似体験
（バーチャル人事体験）
③地域企業・組織と連携したプロジェクト体験
④学生、連携大学、地元企業を含めた3者間の協働による
インターンシップ実施（学部）とアクティブラーニングの
手法を使った教育経験の共有（短大）

※各事業の内容は最終ページにてご案内しています。



SOZO

豊橋創造大学短期大学部　キャリアプランニング科

プロジェクト活動

1 食の伝達「大学生コックさんのクッキング教室（こどもクッキング）」プロジェクト

担当教員：朝倉 由美子　協力：豊橋市福祉部こども未来館 ココニコ

現代では食事は家庭で作らなくても用意できるほど食の外部化が進んでいる。その簡便さに押され、家の味・母の味は無くなりつつあるのではないかと懸念する。そこで、調理を学ぶ学生たちは、少しでも早くから家庭で食事作りに関わってもらいたいと、小学生向けに料理教室を計画し、本年度はピザやギョウザなどデモ作りのリクエストも盛り込んで3回実施した。子どもには料理をすることの大切さや楽しさ、そして自分で作った料理のおいしさを伝え、一方学生は料理教室開催に関わる過程の問題解決や自らの技術の確認とコミュニケーションの必要性を学んだ。何度も参加してくれて顔見知りになった子どももあり、学生の緊張はしだいにほぐれた。料理教室の開催は大変だが、楽しくてよい経験になったと述べ、学生自身の成長にも有効であった。今後もこの活動を通して多くのことを学んでもらいたい。

2 豊橋の朝市を考えるプロジェクト

担当教員：今泉 仁志　協力：豊橋観光コンベンション協会

豊橋市では、現在でも毎日、市内の5ヵ所のどこかで「朝市」が開かれている。大正時代から続いており、すっかり市民に定着した存在とも言えるが、出店側・購入側双方の高齢化が進み衰退していく一方である。「三八の市」（豊橋市前畑町）を例にとれば、最盛期には200を越えた店舗数も、現在では、その十分の一の20店程度の規模である。「朝市」のみならず、個人経営の「八百屋」も廃業が続き、一般消費者は「スーパーマーケット」を使うようになっている。「朝市」の存在自体を知らない学生も多いため、「マルシェ」全般を調査させ、実際に「朝市」に行ってみる経験をさせた。夏の真っ盛りということもあり、炎天下での自習業の大変さを実感できたようだ。朝市の存続を望む意見が大半を占めたが、その消滅は避けられないようだ。

3 発酵食品のおいしさ発見プロジェクト

担当教員：木下 賀律子　協力：（名）小田商店（株）ビオック

数年前から、麹を使った発酵食品が話題になっている。本プロジェクトは、①日本の伝統食品である麹を使った味噌や醤油などの発酵食品についてその製法を調査し、それらを使った調理法を研究すること。②学園祭でパネルや料理の展示をして発酵食品についての情報を一般に公開することを目的とした。また、調理実習の集大成として、学園祭でレストランを企画し運営した。主な活動内容は、手作り味噌体験や味噌の醸造元（市内の小田商店他）を訪ね、味噌蔵内を見学。一方、レストランでは、自分達が作った味噌を使い豚汁や野菜たっぷりのスープ類、手作りパン・チリコンカンなどの料理をお客様に販売するという体験を通して、社会性を養う力を身に付けることができた。本プロジェクトは、学生達の自己実現の場としても有意義な活動になったと考えている。

4 防犯プロジェクト

担当教員：千賀 博巳　中島 剛　細谷 邦夫　協力：愛知県豊橋警察署

働く意欲と意識の向上を目指して、「人と人とのつながり、絆を大切にし、社会に貢献する学生生活を送るために、自分たちに何ができるか」を考え、先輩たちが発足したボランティアチームCTS（Clean Team SOZO）の活動を継承した。活動は、月に一度の地域巡回と豊橋警察署と連携した駅前のキャンペーン活動が主であったが、学内の自転車の施錠点検や、少年立ち直り支援行事などにも参加した。地域巡回やキャンペーン活動では、最初戸惑っていた学生が、大きな声で声掛けする姿が見られた。活動の中で、行事に参加した他のボランティア団体の方との交流も積極的に図られた。また、CTSの防犯活動に対し、愛知県地域安全研究会及び豊橋警察署から感謝状をいただき、学生たちも自分たちの活動に自信を持つことができた。

5 身近な自然発見・発信プロジェクト2012

担当教員：寺本 和子　協力：NPO法人 東三河自然観察会・愛知県三河港務所

愛知県の東三河地方は、多様性に富んだ地形を有し、その結果、東三河の自然もまた多様である。しかし、これら多様な生物の現状は決して楽観できない。プロジェクト参加者は、NPO法人東三河自然観察会の指導を受け、実際野外（蒲郡市竹島、豊川市東三河ふるさと公園、豊橋市葦毛湿原）へ出て自然を肌で感じ、自然に感動する感性を養いながら、東三河の自然の現状を知ることに努めた。

また、三河湾に浮かぶ竹島の自然観察を通して興味を持った「三河湾汚染の現状と対策」について、愛知県三河港務所の協力を得ながら深く学んだ。

以上の活動を通じて、社会人との交流マナーを学ぶことにも努めた。

6 長谷川ゼミ活動報告

担当教員：長谷川 正志　協力：医療秘書教育全国協議会

我々の活動は、地域産業界との連携を目指したものではなく、学生たちの資格取得という学びの1つに対する実践的チャレンジと、幅広い視野を広げるという意味での「韓国医療研修」の二本柱の活動を行った。医療秘書技能検定試験では、二級受験者35名に対して合格者35名という全員合格を勝ち取った。又、最難関の準1級では35名の受験者に対して29名の合格者で合格率は82.9%であったが、全国平均合格率（37.1%）に比べると極めて高い合格率であった。又、成績優秀者として全国表彰者も2級2名、準1級2名を輩出した。韓国医療研修は8月29日～31日の2泊3日で実施し、韓国ソウル市の漢陽大学を訪問し、医学部付属病院、国際病院を見学した。又、異文化交流ということで、観光・グルメ・ショッピング等も満喫した。以上の活動を通じて学生の学びに対する向上心と、運帯感・コミュニケーション能力の開発に寄与することが出来た。

7 豊橋うどんプロジェクト

担当教員：花岡 幹明　協力：（株）東京庵

本プロジェクトのテーマは、豊橋麺類食堂組合青年会との協働による豊橋地域におけるうどん・そばに関する総合的調査の実施と「豊橋うどん」の普及に関する貢献活動を行うことであった。

本年度は、全体的な市場調査に向けての準備段階として、調査手法を学習し、豊橋のうどん市場の現状把握を目的としたアンケート調査を行った。また、豊橋うどんのルーツについて、関係者にインタビュー調査を実施した。更に、これらの活動成果や情報を発信するためのHPやブログを作成した。学生メンバーは、短大部と学部の有志学生からなる混成チームであったため、活動時間のズレなどで苦労した点もあったが、意欲的に作業を進めてくれた。今後、アンケートやインタビュー調査の結果報告、また、更なる調査や情報発信について活動を継続する予定である。

8 We ♥ ROSE プロジェクト

担当教員：村松 史子　協力：Watanabe Rose Nursery・ガーデンガーデン（株）

地域の産業の実態を知り、地域のために何ができるかを考える場として本年度も田原市の花農家（バラ園）と連携をして実践した。

学生の発想を期待して、プロジェクト名を「トからWe」と改称し、「絆を大切にしよう」をテーマとした。目標を具体化するために「育てる・作る・売る」の3部門に分かれて取り組んだ。7月30日、バラ園を見学し、生産者の栽培に関する苦労や喜びを身近に見聞きすることができた。学園祭には、産地直送の新鮮なバラと前評判の高い"青いバラ"の販売を行い完売した。実践を通して、自分の得意とする面をグループ内で活かすことの喜びと、互いに認め合い協力することの大切さを感じとっていたことが何よりの成果と考える。

豊橋創造大学
情報ビジネス学部／経営学部

プロジェクト活動

1 豊橋コンテナターミナルの発展可能性に関する調査研究

担当教員:石田 宏之
協力:日本通運(株)豊橋支店・日本通運(株)豊橋支店 海運営業所
愛知県三河港務所 金城ふ頭コンテナターミナル・豊橋市産業部港湾活性課

三河港は、重要港湾の中で「重点港湾」として位置づけられ、港湾整備に期待がもたれている。また、三河港は、輸出入完成自動車の基地(豊橋地区、田原地区、蒲郡地区)であるとともに外貿貨物にとって重要な役割を果たしているコンテナターミナル基地(神野地区公共埠頭)ともなっている。また、公共埠頭でのコンテナ取扱量は増加傾向を示しており、今後もコンテナ基地が発展する可能性がある港であるため、プロジェクト演習のテーマとして「三河港豊橋コンテナターミナルの機能と役割(発展性可能性)」を設定した。

豊橋コンテナターミナルの後背圏は広く、立地している企業も多いため、コンテナ貨物の港在量はかなりあると推測される。また、現状のコンテナターミナルの能力は、現状の2倍の量を取り扱うことができる。今年度より、自動車部品等を対象としたロシア向け航路も開設することが計画されている。

また、今後の数量拡大に伴い寄港の数を減らすことによりリードタイムの短縮と1個当りコンテナの輸送費の削減を図ることが可能となり、さらに数量拡大は、アジア地区への直行便の開設も今後考えられる。

このように、豊橋コンテナターミナルが有するメリットは、①低廉性、②通関の迅速性、③緊急時対応の迅速性、④インターナショナルモーダルシフトが可能であることなどであり、豊橋コンテナターミナルは、将来的に発展可能性のある港であることがわかった。

2 iPad,iPhoneで利用できるアプリケーション作成

担当教員:今井 正文
協力:(株)アイエスエル(株)インターネットイニシアティブ

経営学部では全学年にiPadが無償貸与され、教材として使うだけでなく、レポート作成のための情報収集やゼミナールでのプレゼンテーション作成、就職活動などのあらゆる場面に利用されている。また無線LAN環境も完備されわり、学内どこからでもインターネットを利用することができる。本プロジェクトは、iPadの特性を活かした学習支援アプリの作成を行った。アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに、学習ツールとしての効率的な活用について考えながら活動した。

本プロジェクトは、iPadの特性を活かした学習支援アプリの作成を行い、アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに学習ツールとしての効率的な活用を考える事を目標として活動した。具体的には、授業での利用を目的とし、テスト問題の製作・配信、解答の機能を備え、学籍番号や名前等の項目表示、キーボード及び手書き文字入力、データベース接続(データ送受信)の機能を有する学習支援アプリの開発を行う事とした。制作方法や開発環境の検討については、協力先企業様への企業見学で得た情報やアドバイスを参考にした。なお、協力先企業は、株式会社 インターネットイニシアティブ名古屋支社と株式会社アイエスエルの2社様である。最終的には、2チームに分かれてFileMaker、HTML+CSS+JavaScript、PhoneGap等を用いて実際に学習支援アプリの制作を行う事を通して、チームによるアプリ開発の基礎を学ぶことができたと考えている。

3 ヨシノパンプロジェクト

担当教員:加藤 尚子
協力:よしのベイカリー(株)

本学に設置されているヨシノパン自動販売機の売上向上に貢献するため、プロジェクトメンバーである学生4名は様々な活動に取り組んだ。具体的には、AIDMAモデルというモデルをもとに、Attention及びInterestを向上させることで、売上向上に貢献する活動である。

プロジェクト実施にあたり、本学学生の自販機利用について事前調査を行い(自販機観察)、その結果をもとに企画書を作成、よしのベイカリー株式会社(ヨシノパン)の代表取締役社長、鈴木雅晶氏にお時間を頂戴し、本プロジェクト企画についてのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの結果、鈴木氏よりプロジェクト実施の許可をいただき、活動を開始した。

活動開始後の具体的な活動内容についてであるが、Attention及びInterestを向上させる方法として、ヨシノパンに関する紙面(3号分)を協力企業へのインタビュー及び学内アンケート等を通じ作成、学内に掲示する方法を採用した。また紙面掲示とともに本学学生に対してアンケートを実施した。アンケート結果及び協力企業へのインタビューからは本プロジェクトでの取り組みが売上向上に貢献できた可能性が考えられている。

また、学生たちは協力企業へのプレゼンテーション、インタビュー、紙面作成、のべ1300名にもおよぶ学生へのアンケート実施や分析等、多岐にわたる活動には取り組んできたが、このような活動により、学生それぞれがプロジェクト活動中のさまざまな時期に社会人基礎力を伸ばす場面が観察されている。

4 SOZOショップ企画・開店

担当教員:川戸 和英
協力:NPO法人 どんぐりの会・豊橋商工会議所・豊橋市発展会連盟

豊橋市広小路にあったコーヒー豆販売の「SOZOチャレンジショップ」を、新たに「SOZOショップ」として一から立ち上げ、開店するためのプロジェクトとして2012年度から開始された。

4名のメンバーに加えて他のゼミからの希望者を入れた合計5名で取り組んだ。まず店舗企画・運営について全く未経験の学生たちに本プロジェクトを取り組ませるに当たり、第1にマーケティングと店舗運営の理論学習と、第2に具体的な店舗企画の二本立てで進めた。その間、豊橋商工会議所はじめ連携団体・企業へのヒアリングや、広小路商店街に関する学生の意識調査に取り組んだ。

秋学期以降は、店舗企画を具体的に展開した。一口に店舗企画といっても、検討すべき領域は多岐に及び、学生たちには相当の覚悟と粘りが必要だった。幸いにも理論学習と具体的な企画を通して彼らのモチベーションが次第に高揚し、自発的に取り組む意欲やアイデア開発について成果を見た。特に学生たちに、店長、総務経理、仕入れ、マネジメント、広報の役割分担を決めてから、企画作業が進んだ。

1月現在、学生たちの努力で、3月の開店を目指して最後の詰めを行うまでに至っている。仕入れ、商品調達にほぼめどが立ち、後は運営スタッフ、営業日程、人員配置、店舗運営などの細則を詰めながら、店舗装飾、電飾看板、その他備品調達の段階まで進んでいる。ただし、学生たちが毎営業日に店舗に詰めることは事実上不可能なため、学生たちとの店舗共同経営者を現在探していて、これが決まれば晴れて開店とすることができる。各位の一層のご協力をお願いする次第である。

5 豊橋エコタウンプロジェクト ～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～

担当教員:見目 喜重
協力:豊橋市教育委員会 教育政策課

エネルギー環境問題、脱原子力への対応策として、クリーンで無尽蔵であり、かつ家庭など生活に身近な場所への設置が容易な太陽光発電の普及が急速に拡大している。一方で、太陽光発電は設置方法により発電量が大きく異なり、またシステムの故障や発電性能の劣化などの長期信頼性に関する問題点も指摘されている。そのため、発電に関するデータの長期収集・分析が重要である。

本プロジェクトでは、太陽光発電の長期信頼性に関する基礎的なデータの収集・分析、エネルギー・環境問題への意識を高める環境教育コンテンツの開発を目的に、平成23年度に引き続き、豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの稼働状況および環境教育への取り組みに関する訪問調査を行った。

調査に当たっては、学生が事前に小中学校の担当者と日程調整を行った。その後の訪問時に、システムの設置場所、障害物の有無、発電量など稼働状況を確認するとともに、運転トラブルならびに環境教育への活用状況などの聞き取りを行った。

昨年度は全74校中・17校の調査にとどまったが、今年度は74校全てを訪問した。その結果、この2年間にシステムの停止などのトラブルが5件生じていたことが分かった。また、平成11年度に設置された最も古いシステムでは、年間の発電量が減少傾向にあることが分かった。この原因がシステムの発電性能の劣化によるものなのかどうかは、今後、日射量との比較などによる精密な分析によって判断する必要がある。

6 医療情報の学習環境構築と運営

担当教員:五味 悠一郎

診療情報管理士認定試験(以下、認定試験)合格を目的に、学内を対象とした自主勉強会の企画運営、学内外を対象とした診療情報管理士認定試験対策講座(以下、対策講座)の企画運営および宣伝活動、診療情報管理士のデジタル問題集の作成を行なった。

対策講座の学外受講者は18名程度となり、知名度を向上させ、地域貢献することもできた。今年度からは参加費(全15回の講座で2万円)を徴収して運営費に充てることとしたため、昨年度より学外受講者が減ることが予想されたが、プロジェクトメンバーの頑張りにより、昨年度と同程度の学外受講者を集めることができた。一般的に、大学の教育目的で実施するプロジェクトは連携団体の負担が大きく、WIN-WINの関係を作れないことが多いが、本プロジェクトにおいてはWIN-WINの関係が構築できたと評価できる。九州地方や中国・四国地方からも受講者を集めることができたのは、大きな収穫であった。

昨年度のプロジェクトの成果を、昨年度のプロジェクトメンバーである学生が日本診療情報管理学会で発表したところ、学会参加者から多くの問い合わせがあり、新たな繋がりも生まれた。発表学生のモチベーションも高まったようである。本プロジェクトは、3月末に行われる認定試験の合格発表後、受講生にアンケートを実施し、集計・検証を行って終了となる。本報告には間に合わないので、本プロジェクトの成果は今後も学会等で広く伝えていく予定である。

7 田原のウインドファーム ～社会的企業の実証研究～

担当教員:中野 聡
協力:田原市市民環境部エコエネ推進課 計画推進グループ

本プロジェクトでは風力発電の現状と将来性を学ぶため、風車が多く存在する田原市を活動の対象に選定し、田原市役所市民環境部エコエネ推進課計画推進グループ様の協力のもと、社会性、事業性、将来性を調べ、評価した。特に、風力発電システムの電力供給に関して考察し、そのメリット・ディメリットを検討した。その中で①東日本大震災と福島原発事故に繋げる、②世界に繋げる、③丁寧なコストベネフィット分析の3点を目標に据えた。

「風」は当地域の自然エネルギーの中で最も期待されており、田原市では「環境と共生する豊かで持続可能な地域づくり」を目指すため、行政支援や補助金等の後押しを活用しながら国内最大級のウインドファームを形成している。風車は、普段遠くから見ているためそこまで大きいと思わなかったが、近くで見ると圧巻でとても迫力があった。

今年は、テーマ選定からリサーチプランの作成まで、できるだけ多くを学生に委ねた結果、試行錯誤の連続となったが、田原市役所の人々が丁寧に対応してくださったこともあり、時間が経つにつれ、自分達で自然に作業を行う傾向がみられるようになった。また、学生が共同作業を通して学ぶことをそれなりに楽しんでいる様子もみられた。こうした行動はこれまでの教育にかけていた点かと思われることからプロジェクト活動の効果の一つと考えられる。

8 豊橋からオレオレ詐欺をブッ飛ばせ!!

担当教員:野口 倫央
協力:豊橋市福祉部長寿介護課・豊橋信用金庫

本プロジェクトでは、近年増加傾向にあり、検挙率が低下しているオレオレ詐欺の撲滅活動を、豊橋信用金庫および豊橋市役所と連携して行った。これは、豊橋市における高齢者の割合が県内で3番目に高いことから、豊橋市に在住する高齢者への貢献を目的とした活動であった。

我々は、豊橋信用金庫との勉強会により、オレオレ詐欺の撲滅には家族間だけの「合言葉」を作ることが重要であることを明らかにした。そこで、我々は「合言葉」を作成することの必要性を謳ったチラシとその「合言葉」を記入し、電話の近くに貼ることを目的としたステッカーを作成した。このチラシとステッカーを豊橋市内の老人クラブやスポーツ大会等で配布した。配布枚数は935枚を数えた。

この活動の成果は数値化が困難である。そこで、チラシ等を配布した際にアンケート調査も行い、その回答により成果を測ることとした。有効回答アンケートは225枚であった。そこでの回答をみると、オレオレ詐欺の対策を60%は何ら対策をとっていないことが分かった。そこで、「合言葉」を作成し、ステッカーを活用するか否かに関しては、98%の方が「合言葉」を作成し、95%の方がステッカーを活用するとの回答を得た。これは、オレオレ詐欺撲滅に対して、一定の成果が得られたことを示唆するものである。

加えて、この活動により学生は、企業人と協力してプロジェクトを進めることで、事前準備の必要性、物事を多面的に考えることの重要性、情報発信力、ならびに老人を思いやるという人間力を育むことができた。

9 豊橋トップインタビュープロジェクト2012

担当教員:三好 哲也
協力:(株)お亀堂・(株)シライ パッケージプラザシライ本店・ウルリ(株)

「豊橋トップインタビュープロジェクト2012」では、2011年度に引き続き、三河地区で著名な企業に訪問し、企業経営の哲学やビジョンについてインタビューを行い、その内容をWEBページで公開することを活動目的とした。インタビューでは、企業が求める人材についての意見を収集した。当初5社の予定であったが、参加メンバーも限られていたため、3社のトップインタビューを行った。訪問インタビューさせていただいた企業は以下のとおりである。

7月23日 パッケージプラザシライ本店 代表 白井成明 氏
11月9日 ウルツ株式会社 代表取締役 片桐浩司氏
11月12日 株式会社お亀堂 代表取締役 森慎一郎氏

取りまとめた記事は以下のWEBページで公開している。
http://projectweb.sozo.ac.jp/miyoproj2012/

本学部のプロジェクト活動では、学生の社会人基礎力を養成することを目的しているが、このトップインタビューを進めるためには、ビジネス活動で必要とされる様々な行動や思考が求められる。たとえば、インタビューの依頼、その可否の問合せ、日程調整、企業調査、インタビュー内容の検討、インタビュー後のとりまとめなどの作業を、メンバーで協働してスケジュールに沿って進めなければならない。以上のようにビジネス活動の疑似体験になっている。トップインタビューの依頼では断られることも体験する中で、悩ます次の作業に乗ると取り組むとメストレスコントロールも体験する。「なんでも一度やってみると自信が付きます」というのが学生の感想であり、まさに、体験知を体得できるプロジェクトになっている。

10 のんほいパーク盛り上げ隊

担当教員:三輪 多恵子
協力:豊橋総合動植物公園

本プロジェクトでは、「情報発信のためのプロセス―情報収集・整理・加工・発信」を体験することで広報活動について理解を深めるとともに、必要な知識と技術を習得することを目的として活動を行った。連携先として、豊橋総合動植物公園(のんほいパーク)にご協力を頂いた。

事前に様々な動物園のWebサイトを調査し、のんほいパークの公式Webサイトと比較することで「どのような情報を掲載すれば閲覧者が興味を持ってくれるか」「来園する際にはどんな情報が役立つか」等を議論し、協力してWebサイトを作成した。受信者を意識した情報発信を心がけ、アイディアを実践する機会を設けられたことは、講義では得られない貴重な経験になったと考えている。また、情報収集のために何度もインタビューを行った経験は、聞く力／話す力を成長させる必要がある、と気づく)原動力となった。始めはぎこちなかった取材も、回を重ねるにつれて、笑いを交えながら話を引き出すことができるようになり、学生の成長を実感した。

動物に関する情報だけでなく、パーク内売店(運営:みどりの協会)の商品紹介や、周辺飲食店の紹介まで対象を広げ、多様な情報を発信できたことは、学生の課題発見力や実行力、主体性の成長によるものだと感じている。様々な調査・取材を通して、のんほいパークを中心とした地域社会の成り立ちや、そこで働く様々な人々の関連について意識できたことは、今後、就職活動を行う学生達にとって非常に有意義な経験になったと考えている。

11 豊橋献血促進プロジェクト

担当教員:山口 満
協力:愛知県赤十字血液センター 豊橋出張所

近年、若年層の献血離れが深刻であり、将来的に手術などで使う輸血用血液製剤が不足する恐れのあることが指摘されている。本プロジェクトでは、主として献血に関する広報活動を通じて、豊橋市における若年層(本学学生含む)の献血率向上を目的とした活動を行った。

具体的には、(1)献血呼び掛けボランティア活動、(2)若年層の献血に関する意識や実態の調査(学内献血意識調査)、(3)若年層の献血の現状や従来の取り組みに関するヒアリングと意見交換(愛知県豊橋赤十字血液センターの皆様と)、(4)プロジェクトWebサイトの構築および献血関連情報の発信、の4つを行った。なお、構築したWebサイトは「豊橋 献血促進」でWeb検索すると確認できる。

若年層の献血率低下は社会問題として認知されており、簡単には解決できない非常に困難な課題である。学生達は、多くの議論を重ね、献血意識調査用紙の作成やWeb記事作成(広報)を行った。また、調査結果の分析を通じて「家族・友人に誘われて献血を体験する人が多い」ことを見出し、血液センターの方々へのヒアリングを通じて「若いうちの献血経験が重要」であることを学んだ。これを受け、現在は、来る4月の学内献血において一人でも多くの献血経験の無い学生に献血を経験してもらうことを目標に、活動を継続中である。

学生達は、プロジェクトの実践を通じて、「課題発見力」や「計画力」「実行力」、そして、「発信力」「傾聴力」など、重要な社会人基礎力を養成することができたと考えている。

平成 24 年度
「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」
『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』成果報告書

平成 25 年 3 月 27 日　発行

編集発行　豊橋創造大学
地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会

〒440-8511　愛知県豊橋市牛川町松下 20－1
TEL　0532－54－2111
FAX　0532－55－0803
http://www.sozo.ac.jp/